

浅野誠 沖縄論シリーズ

7. 沖縄論

2010～2019年

私のブログ「沖縄南城・人生創造・浅野誠」（2013年2月までは「田舎暮らし・人生創造・浅野誠」）に掲載した記事のなかから、2010年から2019年まで沖縄について論じたものを抜き出して編集したものだ。といっても、主として2013年以降のものだ。それ以前については、2013年に本HPにアップロードした「浅野誠沖縄論シリーズ1 沖縄」（目次をp71～74に掲載）をご覧いただきたい。そこで掲載もれになったものを、本誌に掲載した。だから、本誌は、「シリーズ1」の続編になる。

2014年から2018年にかけては、私の最近著「魅せる沖縄」（高文献2018年刊）の執筆作業と並行していた。そのため、同書の下書き的な論、あるいは同書発刊後の反応などにかかわる小論が含まれている。

2019年4月刊

目次

※ 記事の掲載は、新しいものから古いものへの順で配列してある。

HP「浅野誠・恵美子の世界」への54冊目のファイル掲載 沖縄論シリーズ 2019年1月25日

連載「魅せる沖縄」周辺

p 6

- | | |
|---------------------------------------|-------------|
| 1. 浅野誠「魅せる沖縄——私の沖縄論——」高文研 まもなく刊行 | 2018年05月20日 |
| 2. ウチナーンチュと沖縄移住者のアイデンティティ模索 | 2018年05月27日 |
| 3. 本完成 沖縄アイデンティティ問題にかかわる私の行動と思索 | 2018年06月03日 |
| 4. 多文化を受け入れチャンプルーする視点で沖縄をとらえる カナダでの発見 | 2018年06月10日 |
| 5. 「魅せる沖縄」に魅せられる人 | 2018年06月18日 |
| 6. 沖縄に「魅せられた」わけ | 2018年06月25日 |
| 7. 多文化 多様なつながり チャンプルーとしての沖縄 | 2018年07月01日 |
| 8. 「全国最下位」議論からの卒業 | 2018年07月08日 |
| 9. 沖縄・沖縄的なものが表れやすい分野とそうでない分野 市民形成 | 2018年07月15日 |
| 10. 集落（コミュニティ）の弱体化・消滅と再編 | 2018年07月21日 |
| 11. 地域・人間関係における沖縄の魅力 | 2018年07月29日 |
| 12. 産業経済分野 沖縄おこし | 2018年08月06日 |
| 13. 沖縄とアイデンティティ | 2018年8月22日 |
| 14. 続・沖縄とアイデンティティ | 2018年08月31日 |
| 15. 続々・沖縄とアイデンティティ | 2018年09月06日 |
| 16. 多文化のチャンプルーとアイデンティティ | 2018年9月14日 |
| 17. チャンプルーのなかで生きる | 2018年09月21日 |
| 18. 多様な読者の多様な反応 | 2018年10月08日 |
| 19. 「沖縄らしさ」「沖縄的なもの」は「できあがってくるもの」だ | 2018年10月13日 |
| 20. 激変期にある沖縄と人生の転換 | 2018年10月18日 |

「沖縄的なもの」第二次連載

p 25

- | | |
|--|-------------|
| 1. 「沖縄的なもの」の生成・維持・変化・消滅にかかわる、社会の三つのレベル | 2016年09月10日 |
| 2. 14世紀以前には「沖縄的なもの」の自己意識は未成立 | 2016年09月20日 |
| 3. 15世紀から16世紀におけるⅢレベルを軸にした「沖縄的なもの」の成立と広がり | 2016年10月05日 |
| 4. (続) 15世紀から16世紀 Ⅲレベルを軸にした「沖縄的なもの」の成立と広がり | 2016年10月16日 |
| 5. 17～19世紀半ば | 2016年10月25日 |
| 6. 19世紀後半～ | 2016年11月06日 |
| 7. 19世紀後半～(続) 芸能 沖縄内外の接触・交流 | 2016年11月17日 |
| 8. メディアの登場 日本と沖縄との対比 | 2016年11月26日 |
| 9. 沖縄戦と沖縄戦直前期 | 2016年12月09日 |

10. 米軍統治期（1950年代初めごろまで）	2016年12月16日
11. 米軍統治期（1950～1960年代） その1	2016年12月26日
12. 米軍統治期（1950～1960年代）その2	2017年01月07日
13. 「復帰」前後期（1960年代後半～70年代前半）	2017年01月18日
14. 「復帰」前後期（1960年代後半～70年代前半）（続）	2017年01月28日
15. （続々）「復帰」前後期（1960年代後半～70年代前半）	2017年02月08日
16. 1970年代後半～90年代 個人としての「沖縄的なもの」と教育家族	2017年02月19日
17. ストレーター秩序が沖縄にも広がるなかで	2017年03月03日
18. 市民化と孤立化 文化芸能分野	2017年03月13日
19. 近年の社会運動のなかでの「沖縄的なもの」	2017年03月23日

連載「沖縄的なもの」

p 43

1. 「沖縄的なもの」を表現する言葉	2015年09月07日
2. いろいろに語られる「沖縄的なもの」	2015年09月18日
3. 「沖縄的なもの」という表現の多様性	2015年10月02日
4. 「沖縄的なもの」が語られる時・場	2015年10月16日
5. 「沖縄」という用語と「琉球」という用語 その1	2015年10月28日
6. 「沖縄」という用語と「琉球」という用語 その2	2015年11月06日
7. 「沖縄的なもの」が、肯定的に受け止められる時、否定的に受け止められる時	2015年11月18日
8. 「沖縄的なもの」を創りだし推進するものたち 「沖縄的なもの」の生成消滅	2015年11月28日
9. 連載のこれまでと今後の予定	2015年12月05日
10. 境界の意識	2015年12月19日
11. 境界意識を強めるもの弱めるもの	2015年12月29日
12. 沖縄外部と沖縄内部との関係に着目する	2016年01月11日
13. 「もともとの沖縄にあったもの」と決め込まない	2016年01月22日
14. 多様なものの「チャンプルー」のなかで	2016年01月31日
15. （続）多様なものの「チャンプルー」のなかで	2016年02月09日
16. 沖縄外から見た「沖縄的なもの」への眼 その1	2016年02月23日
17. 沖縄外から見た「沖縄的なもの」への眼 その2	2016年03月04日
18. 沖縄外から見た「沖縄的なもの」への眼 その3	2016年03月14日
19. 同じ「沖縄的なもの」でも、良し悪しの価値判断が分かれる その1	2016年03月25日
20. 同じ「沖縄的なもの」でも、良し悪しの価値判断が分かれる その2	2016年04月05日
21. 「伝統」＝「沖縄独自」定型の形成	2016年04月15日

2010年～2015年記事

p 64

日本本土を追いかける顔と独自創造の顔の二つをもつ沖縄における変化	2015年09月28日
多田治「沖縄イメージの誕生」（東洋経済新報社2004年刊）を読む	2014年10月30日
外間守善「沖縄の言葉と歴史」（中公文庫2000年）を読む1 ニライカナイ オモロ	2014年10月23日

外間守善「沖縄の言葉と歴史」を読む2 アジ・あまみきよ・あふ（奥武）・うりずん・若夏・シヌグ	2014年10月26日
新崎盛暉「沖縄を越える」を読む1 尖閣諸島 国境を低くする	2014年08月16日
新崎盛暉「沖縄を越える」を読む2 沖縄の独自性	2014年08月20日
「浅野誠沖縄論シリーズ1 沖縄」のホームページ掲載	2013年3月11日
地域社会と子育て 「リベラル」傾向	2012年9月26日
琉球新報社「沖縄県民意識調査報告書」琉球新報社 2012年を読む1	2012年9月27日
「家族の幸せや健康」群抜く」 沖縄県民意識調査2	2012年9月30日
人間関係の『希薄化』？ 沖縄県民意識調査3	2012年10月3日
祖先崇拜 トートーメー ユタ 沖縄県民意識調査4	2012年10月5日
ウチナンチュ・アイデンティティ 沖縄県民意識調査5最終回	2012年10月8日
独立か同化かといった二項対立 琉球政府の特異性 沖縄問題本1	2011年7月5日
日本兵の遺骨の意味 蛍の光 4 番歌詞 沖縄問題本2	2011年7月8日
「辺境」 南と北 自立 沖縄問題本3	2011年7月11日
「本土に追いつけ」はどの県のどんなところをイメージするか1	2010年10月24日
「本土に追いつけ」はどの県のどんなところをイメージするか2	2010年10月26日
沖縄———ブログ記事の振り返り・再発見	2010年10月16日

HP「浅野誠・恵美子の世界」への54冊目のファイル掲載 沖繩論シリーズ

2019年1月25日

これまでのブログ記事を整理編集したものをファイルにし、HP「浅野誠・恵美子の世界」
<https://asaoki.jimdo.com> に掲載する作業を積み重ねている。

このところは、沖繩シリーズだ。

昨年10～11月に、次のものを作成した。

浅野誠 お出かけ・旅5 沖繩各地2010～2013年

浅野誠 お出かけ・旅6 沖繩各地2013～2018年

浅野誠 沖繩論シリーズ5 沖繩の歴史・民俗2013～2017

そして、先週作成したものは、「浅野誠 沖繩論シリーズ6 産業経済 政治 生活 集落 自然環境芸能
2010～2018」だ。

どうぞご覧ください。

今後の予定は、以下の通りだ。

沖繩論シリーズ7 沖繩論

沖繩論シリーズ8 子ども・教育

その後、ここ数年書き溜めた「生き方」シリーズを作成する予定だ。

連載「魅せる沖縄」周辺

1. 浅野誠「魅せる沖縄——私の沖縄論——」高文研 まもなく刊行

2018年05月20日

最終校正を終えて、いよいよ発刊へ秒読みに入った。

本書は、私が沖縄にかかわって40余年のなかで感じ考えたことをベースに、ここ数年の作業で作上げたものだ。出版社刊行の単著はたしか13冊目になるだろう。前著『沖縄おこし 人生おこしの教育』(アクアコーラル企画2011年刊)から、少々間が空いてしまった。

内容の概要をお知らせするために、まずは目次を紹介しておこう。

第一章 沖縄とは

1. いろいろに語られる沖縄
2. 「沖縄」という用語と「琉球」という用語
3. 沖縄・沖縄的は生成変化していくもの
4. ウチナーンチュ(沖縄人)とウチナー(沖縄)アイデンティティ
5. ウチナー(沖縄)アイデンティティの創造

第二章 沖縄・沖縄的の歴史スケッチ

1. 19世紀半ばまで
2. 明治大正昭和戦前期
3. 沖縄・沖縄的を意識する際の身分差・階層差
4. 米軍統治期
5. 「復帰」前後期
6. 1970年代後半以降

第三章 沖縄・沖縄的を見る眼を再考する

1. 境界の意識
2. 沖縄の内と外とが接触する所
3. 沖縄の内と外という見方
4. 沖縄外からの沖縄・沖縄的への眼
5. 旅行者の眼 沖縄イメージ
6. 沖縄・沖縄的を見る眼を再考する
7. 多様なもののチャンプルーのなかで

第四章 多様な分野での沖縄・沖縄的

1. 沖縄・沖縄的の分野差
2. 軍事・生活文化(衣食住)・自然環境における沖縄・沖縄的

3. 音楽芸能・学校教育・スポーツにおける沖縄・沖縄的
4. 言語における沖縄・沖縄的
5. ライフスタイルにおける沖縄・沖縄的

第五章 外部支配と沖縄・沖縄的 沖縄脱出と沖縄独自

1. 外部による支配と沖縄・沖縄的
2. 沖縄・沖縄的をめぐっての内と外とのからみあいとチャンプルー
3. 国民国家と沖縄 沖縄の自己決定権
4. 沖縄と日本
5. 沖縄と日本との関係のとらえ方
6. 噴出と抑え込み

第六章 沖縄・沖縄的の現在とこれから

1. 沖縄の内と外との交流協同の拡大と多様化の進行
2. 激動する現代における沖縄
3. 沖縄のもつ豊かさを創造し発信する

このブログで、執筆動機、読者から寄せられた感想などへの私からのコメント、本書に収めきれなかったことなどを連載していくことにする。

2. ウチナーンチュと沖縄移住者のアイデンティティ模索 2018年05月27日

連載のはじめとして、まずは執筆動機というか、執筆背景めいたものについて書いていこう。

本書「魅せる沖縄——私の沖縄論——」（高文研 まもなく刊行）は、「沖縄とは何か」「沖縄人（ウチナーンチュ）とは何か」というアイデンティティにかかわることを一つの対象にしている。それは、著者である私自身のアイデンティティ模索ともつながっている。

ここ数十年間に、私のように他府県から沖縄にやってきた人は、観光者を除いても莫大な数に上る。その人たちがウチナーンチュと多様な出会い・協同をするなかで、沖縄・ウチナーンチュに対してだけでなく、自分に対してもアイデンティティ問題を考えないわけにはいかなることが多い。

本書で詳しく述べるが、沖縄・沖縄人は、アイデンティティをめぐって多くのことを体験してきた。端的に言う、本書のなかで述べるように、「沖縄独自—沖縄脱出」という二極をめぐっての複雑なものである。沖縄であることを誇りに感じ、より一層沖縄的であろうとすること、それとは対照的に沖縄であることを否定的にみて、沖縄から脱出しようとする、この二つが併存したり、対立葛藤したりしてきた。なかには、自信をもって沖縄独自ないしは沖縄脱出を貫く人もいよう。

そうした沖縄の人に出会う沖縄外からの移住者もまた多様なありようをしてきた。無論、沖縄を外から支配し、「沖縄はこうであらねばならない」と語り行動する人には葛藤がない、あってもわずかだということもあるだろう。だが、多くの沖縄移住者は、「ヤマトンチュ」「ナイチャー」と呼ばれる中で、自分のアイデンティ

ティについて考えさせられた。

「ヤマトンチュになりたくてもなりきれないウチナンチュ」と同様に、「ウチナンチュになりたくてもなりきれないヤマトンチュ」がいるかもしれない。

さらに、ここ数十年間に激増した、沖縄人と沖縄外の人とのカップルから生まれた子どもにもそうしたアイデンティティ問題に出会う人は多い。さらに、親ないしは祖父母が沖縄出身（こうした人を沖縄にルーツを持つ人ということがある）だが、長く沖縄外に住んでいる人にとって、自分は沖縄人なのかどうか、という問いが生まれてくることもある。

こうした沖縄意識は、沖縄をめぐって生まれる多様な事態、一方で豊かさを、他方で困難な事態を自らのものとして引き受けるかどうか、という問題とつながってくる。

私にかかわって書こう。

こうしたアイデンティティ問題を初めて意識したのは、本文のなかにも書いたが、1950年代末からのことだ。私は、10代から20代にかけて、岐阜から愛知へ、愛知から東京へ、そして東京から沖縄へと生活場所を変えてきた。10代のころは、アジア蔑視感情をもつ戦前戦中世代の発言を耳にした。それは最近のヘイト・スピーチにつながるものでもあろう。と同時、そのころは安保問題に象徴される社会運動があり、アメリカとの関係を軸に、日本のありようが社会問題として広汎な関心を呼んでいた。世界的には、民族独立への動きが強まり、民族解放運動が展開していた時代だ。それはまた、第二次世界大戦における侵略支配問題と結びつつ、アメリカの世界制覇、米ソ対立動向なども絡む。

そんななかで、1960年代前半に原水爆禁止問題とやらんで沖縄問題に初めて触れた。そして、1972年4月の沖縄の日本「復帰」直前に、沖縄生活を始める。そのころは、「沖縄」「日本」「沖縄人」「日本人」をめぐっての問いかけが渦巻いていた。それは私自身への問いでもあった。ということで、沖縄関連書をむさぼり読み、考え始めた。



3. 本完成 沖縄アイデンティティ問題にかかわる私の行動と思索 2018年06月03日

印刷製本されたばかりの本書が届いた。店頭には並ぶのは、中旬になってからのことだ。急いでほしい方は私までご連絡ください。

さて、沖縄生活を始めていろいろなことに出会う中で、私の思索は揺れつつ、深まっていく。その経験などを並べよう。

- ・「本土」から来たということで、警戒忌避されたり、関心をもたれたり、尊重されたりするなかで、それらには、沖縄人のヤマトンチュとの出会い体験が投影していることに気づく。そのなかで、「普通のヤマトンチュ」とみられないようにしたりもした。

- ・ウチナムク（ミヤークムク）であることがわかると、急に親しくしてくれる人もいて、自己紹介には、そ

のことを多用した。

- ・知らぬ間に、ウチナー大和口の話し方に近づいていく。
- ・本書のなかで、沖縄と日本との多様な関係のとらえ方を詳しく書いたが、それらについて、たとえば「沖縄は日本の縮図だ」というとらえ方をめぐって考えるようになった。
- ・当初のころは、「日本か沖縄か」という枠組みによる思考が強かったが、その枠組みを相対化する見方に出会って学ぶことも始まった。
- ・「国民国家的な枠組みを前提にして、沖縄と日本の関係を考える」ことから距離を置くには、かなりの時間を要し、本格的には90年代以降になる。
- ・70年代は、教育にかかわってこれらの問題を考えることがほとんどだった。そして、70年代末から、いろいろと書き綴り始め、その集約例としては、『沖縄の教育実践の課題』（「新沖縄文学」所収）、『沖縄教育の反省と提案』（明治図書刊）がある。
- ・それらの諸論では、沖縄独自のものを教育実践においても育てていくことを強調した。
- ・当時、それらは暖かく迎えられたが、実践としてそうしたものを追求し広げ創造していくことには、かなりの困難があった。

・琉球大学で「日本教育史」を担当したこともあって、沖縄教育史研究を70年代から始めた。当時、沖縄教育史研究は、どちらかというところ、未開拓ないしは試行錯誤的な状況にあり、他の諸分野から多くを学ぶことが続いた。

・そんな折、「沖縄県の教育史」執筆の依頼がきた。近世以前を中心とする依頼であったので、多様な文献史料から教育関連事項を発見し整理していく作業となった。大学カード1000枚以上の項目を書き溜める作業が10年近く続いた。

大変な作業だったが、沖縄から愛知の大学に転勤する過程でようやく完成し、1991年に思文閣から出版した。『沖縄県の教育史』出版当時は、沖縄教育史研究者はとても少なかった。それでも沖縄教育史研究に取り組む学生院生は増加し、80年代末から00年代前半にかけて、私のところに相談に来る人はかなりの数になった。彼らは、90年代末から成果を公開し始める。うれしい限りだ。

4. 多文化を受け入れチャンプルーする視点で沖縄をとらえる カナダでの発見

2018年06月10日

「魅せる沖縄——私の沖縄論」は、そろそろ店頭にも並ぶころです。よろしくお願ひします。

今回は、本書の軸ともなっている「チャンプルー視点で沖縄をとらえる」ことを後押しした体験について書こう。

私の研究の仕事のうえで、1999-2000年の一年間にわたるカナダのトロント大学での研究生活に伴う見聞・体験・思考は大きな意味をもった。多文化主義の先進であるカナダでは、多くの衝撃的な出会いがあった。数十にのぼる国・地域出身の人々との交流があり、そのなかで、沖縄についてあらためて考える機会ともなった。

世界の実に多様なエスニック、ネイションとのつながりのなかで教育を考えることは、それまでの日本国内

の視野で考えていた枠を大きく超えるものとなった。沖繩にかかわっても、こんなことがあった。

- ・多様な人々に自己紹介する際に、日本から来たということにとどめず、沖繩とつながりがあると言うと、話はずむことが多かった。沖繩が世界的に認知される存在であることに気づいた。

- ・沖繩県立芸大による沖繩芸能公演がトロントで持たれたときに、トロント大学の教員たち何人かを連れて、出演者の西江喜春（現在人間国宝）さんと懇談したりもした。沖繩音楽は強い印象をトロントの方々に与えたようだ。その折、トロント沖繩県人パーティに、恵美子手製のソーキブニ持参で参加した。

- ・カナダ東端の島（「赤毛のアン」で有名）にあるプリンスエドワードアイランド大学にでかけた折、同大学の島嶼研究の方と話した。沖繩に強い関心をもっておられた。

こんななかで、国民国家的発想枠組みを超える世界が見え始めてきた。そして、世界には多文化主義的発想が広がり、多様な交流協同が豊かさを築きつつあることも発見していく。

そうした視点から、沖繩把握をすすめるようになっていく。それはまた世界のウチナンチュというとらえ方の重要性をも示唆するものだった。

こうしたなかで、沖繩をとらえる際に、移動する人（移民・出稼ぎ・移住・Uターン）におけるアイデンティティの豊かさへの注目が必要であることに気づく。それは、複数のアイデンティティをもつことの豊かさという発想にもつながる。

そしてそれらは、チャンプルーの視点から沖繩の豊かさをとらえる発想とも結び合う。排除の論理ではなく、沖繩に流れ込む、あるいは沖繩とつながる多様なものを取り込みチャンプルーするなかで、沖繩をより豊かにしていくという発想につながるのだ。

5. 「魅せる沖繩」に魅せられる人

2018年06月18日

本書タイトル「魅せる沖繩」について書こう。

「魅せる」という言葉が使われることは多くないかもしれない。しかし、「魅せられた」という言葉はよく耳にする。本書は、私がなぜ「沖繩に魅せられたか」を書いたものだともいえよう。今風にいうと、「沖繩にハマった」わけである。「魅せる」は「魅力」ともいえるが、動詞で動きを感じさせるのが、私の好みだ。

「沖繩に魅せられた」人はかなり多い。沖繩に移住してきて沖繩生活を楽しむ人もそうだろう。11年前に「沖繩田舎暮らし」（アクアコーラル企画2007年）という著書を発刊した。その後、我が家近くの百名ビーチを散策している時に、初対面の方から声をかけられた。同書を読んで沖繩移住を決めて、今、家族で沖繩生活を始めたというのだ。医療に従事する若い方だった。

私が入院している時にも、短期の看護師募集に応じて、大都市からやってきたという人がいた。医療分野に限らず、そういう感じの人は多く、日常的に出会う。近所のファーマーズマーケットが主催して「移住者の集い」というのを我が家でしたことがある。近隣から20名も集まったので、驚いた。福島からも何人かおられた。そうした人々にも、「沖繩に魅せられた」人が多いだろう。

もともと沖繩生まれ育ちで、大都市に進学就職したが、Uターンしてきた人は膨大な数に上る。それは「自然な形」でそうなった要素もあるだろうが、「魅せられた沖繩」から離れがたいという心情が強いのだろう。

沖繩の大学進学では、県内大学の比率がかなり高い。就職にしても、給与面で不利だとしても、県内就職に

こだわる人はとても多い。地元の人にも、「魅せる沖縄」なのだ。

そんなこともあってか、ほとんどの都道府県で人口減少が進むが、沖縄は東京と並んで、人口増が続いている。東京は、仕事を求めての社会増が中心だろうが、沖縄は、必ずしもそうではない。仕事のめどがなくても、ともかく沖縄に住む。住んでから仕事を考えるという人が結構いる。

この対照的なありようの背景に、「魅せる沖縄」があるのではなからうか。無論、東京にも「魅せる」ものがある。仕事がある、賃金が高い、というだけでなく、大都市としての魅力、多様な文化が集中するし、世界ともつながる。そういう「魅せる」ものが特に若者をつかむ。50年以上前に10歳代後半の私にも、そうしたものがあつた。今の若い世代にも存在しているだろうが、以前と比べれば、減っているのだろうか。

二股をかける人もいる。大都市と沖縄の双方に生活拠点をもって行き来する人が結構いる。沖縄に本拠地をおいて、大都市で稼いだお金をもとに沖縄生活をするというものもある。キセツなどもその例だろう。私が13年余り愛知で仕事をして沖縄にもどってきたことに、「出稼ぎ」と名付けた人がいるが、100%否定することはできない。

移住を含めた生活を話題にしてきたが、観光者の多さは「魅せる沖縄」を示す一つの指標だろう。近年ではリピーターがとても多い。また、団体よりも個人旅行が多くなっている。そのなかで「魅せる沖縄」に「はまり」「沖縄通」になる人も多い。そして、「沖縄ファン」であることを通り越して、沖縄にアイデンティティさえ感じる人も出てくる。沖縄に生まれ育った人でいうと、沖縄外での生活体験を経て、改めて「魅せる沖縄」を発見し、ウチナンチュとしてのアイデンティティを強める人がいる。海外移民の二世三世四世の人にも、そうした人が多い。

6. 沖縄に「魅せられた」わけ

2018年06月25日

各地の書店に「魅せる沖縄」が並んでおり、早い方は本書を手にして読書中かもしれません。読後感をこのブログのコメント欄にでもお寄せいただくと嬉しい限りです。

前回書いた「魅せる沖縄」に魅せられる人たちは、どんなことに「魅せられた」のだろうか。人さまざまだが、よく聞く話を並べよう。

1) 自然

海や森などのすばらしさ

温暖な気候

なかには、花粉症がないことを挙げる人もいる。

低レベルの放射能をいう人もいよう。だが、私が沖縄生活を始めるころ一番不安に思ったのは、米軍の核の存在が明るみに出たことだった。「撤去」したことになるが、いまだに不安を感じる人もいよう。

2) 人々のつながりの豊かさや人間的穏やかさ暖かさ。ゆったりさがいいという人もいる。

3) 豊かな文化 これまで出会ったことがなくて、新鮮な衝撃を感じる人も多い

なかには、エスニック的なものに興味を持つ人がいる一方で、「ふるさと」を感じるという人もいる。

4) 生活しやすさ 仕事や時間に追いかけることからの解放 だが、統計調査は沖縄県は長時間労働であることを示している。

地元型生活をすれば、という条件付きだが、安くつく生活費
仕事もないわけではない。給与の低いものが多いことがあるにしても。

5) 沖縄戦や米軍基地などの苦難のなかで生きる沖縄に「魅せられる」人もいる。苦難を共に担いたいという人もいる。

苦難だけでなく、1)～4) で書いた豊かさとかからみあって、歴史的地理的自然的社会的政治的な興味深さ、そして生活のなかで生まれる経験と感覚とが「魅せる沖縄」をうみだしているといえるかもしれない。

こうしたことに「魅せられ」、沖縄に親しみを感じる人がいる一方で、逆に、沖縄に距離を感じ、避けたいと思う人もいる。これらは複雑さをもっているし、変動も激しい。

こうした魅力を生み出すものを「沖縄らしさ」と表現することもできよう。そこで、「沖縄とは何か」「沖縄らしさとは何か」、それらはどのようにして生まれてきたのか、今後どのようになっていくか、という問いが生まれてくる。その問いに私なりに応えようとしたのが本書といえるだろう。

7. 多文化 多様なつながり チャンプルーとしての沖縄

2018年07月01日

ここまで書いてきたことが刺激となって、沖縄研究の新たなステージを私は作り始め、今回の出版への踏み台がつくられてきた。それは次のようなものだろう。

1) 単一民族論ではなく、多文化主義的な発想で沖縄をとらえていく。

それは、「日本の中の沖縄」に限定することなく、多様なつながりのなかで沖縄をとらえる、ということでもある。と同時に、「沖縄内」においても、多様な移住者がおり、また1000年間にわたる移住者が基盤となって、多様な地域が作られてきた。それを沖縄というひとまとまりの単一なものとする動きがある一方で、多様さを保障し、さらに多様さを作り出そうという動きも生まれていく。それは、多様な移住者の共生協同という多文化的なものでもある。

その点で、グスク時代およびそれ以前の沖縄が多様な移住者によって形成され、人口増大が生まれたという研究成果は大きな刺激を与えた。

2) 沖縄におけるアイデンティティは、単一なものではなく、多様なつながりの中で、多様にできあがっていく。複数のルーツを持つ人がかなりの比率にのぼることを見落としてはならない。日本「本土」と「沖縄」という複数ルーツの組み合わせが多いにしても、他の多様な組み合わせが存在する。アメリカ人と沖縄人という組み合わせ、アジア人（台湾・中国本土・フィリピンなどなど）と沖縄人という組み合わせの人も多い。南米などの移民先との組み合わせも多い。

同様に、12～14世紀もそうしたありようが顕著にみられた時代だったろう。

振り返ってみれば、そうした多様な方々と出会っているのが、沖縄の日常だろう。そして、沖縄在住の人は

そうした経緯・歴史を背負って生きている。沖縄における地域差にもそうしたことが反映しているともいえよう。

だから、ハーフではなくダブルという表現に関心が寄せられるし、ダブルどころか、もっと多様なトリプル以上を持つ人は多い。「半分」という消極的な印象を与えかねないハーフではなく、「ダブル」「トリプル」という豊かさを示唆する表現が好まれるのだ。

3) こうしたことをふまえるなら、沖縄を一筋で綴るのではなく、チャンプルーで綴ることが有効といえよう。

「もともとの沖縄」「沖縄固有」「本来の沖縄」といった固定的な本質主義ではなく、人間移動、多文化協同、チャンプルーを豊かに展開してきた沖縄というとらえかたに行きつく。

例を聖地にとって考えてみよう。聖地は「はじめから聖地」というわけではなく、歴史的に形成されてきたもので、その多くは、歴史のなかで多様なものが重層しチャンプルーされつつ変化してきて、今日に至る。

近世に形成された組踊・三線音楽・シーサーなども、それ以前のもを基盤としつつ、その時代における内外の協同の中でチャンプルーされて形成されてきたものだといえよう。

原型や源流を探し、そこに戻るといふ発想より、沖縄自体が多様な文化の交流協同（チャンプルー）のなかでできあがってきた形成史があるという見方を大切にしたい。

それは、沖縄のなかに地域差異があることを重視し、沖縄を一本のものに絞るといふ発想でないことも意味する。

8. 「全国最下位」議論からの卒業

2018年07月08日

4) 以上述べてきたことは、沖縄で1880～1890年代以降支配的になる国民国家枠組みによる沖縄把握を超えていくことにつながる。

国民国家の集約的表現としては、沖縄戦・米軍統治・米軍基地に象徴される軍事がある。それは、国家だけでなく、他国家による支配、国家間ブロックなどとしても現れている。そうしたものの強まりのなか、沖縄は「弱小地域」「辺境地域」として多大の苦難をもたされてきた。

と同時に、沖縄は、日本のなかの諸地域はいうまでもなく、世界の諸地域とのつながりのなかでの重要な位置を占めてきたことにも注目したい。それはまた、国家枠組思考からの卒業にもつながる。

その一つとして、「全国最下位」というデータに強く反応し「順位を上げる」ことに力を注ぐという、ここ100年余り続いた構図の歴史的性格をとらえ、この構図から抜け出る道を追いたい。その際、まずはその道に「はまって」いることの気づきが必要だろう。

基準がなくてもよい、あるいは別の基準（沖縄基準、数値化しない基準など）があることに気づきたい。全国順位思考は、標準となる基準に沿って進む。その際、東京基準が忍び込む。沖縄基準や北海道基準が出てくることは無に等しい。関西基準ならありそうだが、また、田舎基準は滅多になく、ほとんどが都会基準だ。現在、明石に置かれている標準時をどこにひくかもそうだ。その標準時にもとづいて、全国画一の標準時に合わせて統制されている。標準時が複数ある国も多いことにヒントを得た検討があってもよいだろう。そうしたものがなかった近世では、地域ごとに昼間と夜間をおのおのいくつかに分けて時間設定をしていたから、地域の違いどころか、季節によって時間が伸縮していた。

物価なども、全国画一品目によってははかられているが、それは沖縄の現実からは距離があるものがありそうだ。沖縄基準で品目を決めるなら、数値は大きく変動するだろう。また、都市生活基準と田舎生活基準とで事情は大きく異なるだろう。

沖縄における格差・貧困問題も、地域による違いは大きい。最近、ようやく沖縄内における格差・貧困についての追求が進んできている。期待したい。沖縄における格差貧困問題からの新たな実践・運動の展開は、新たな沖縄の創造にもつながるだろう。

軍事・政治分野だけでなく、研究分野においても、全国基準や中央基準で沖縄を考える傾向が長く続いてきたが、ようやく沖縄の地域に沿った研究が広がり始めているといえよう。

こうした問題についても、本書でいろいろな検討を試みた。

9. 沖縄・沖縄的なものが表れやすい分野とそうでない分野 市民形成

2018年07月15日

読后感想が寄せられ始めました。

名桜大学の嘉納英明さんが、琉球新報7月15日の「晴耕雨読」欄に、楽しく書いていただきました。

(前回からの続き)

5) 本書第4章では、「多様な分野での沖縄・沖縄的」について論じた。沖縄について考えるとき、ある分野に焦点化して考えることが多く、分野をまたがる検討は多くない。本書ではしばしば、分野をまたがった検討を試みた。たとえば、音楽芸能と学校教育の対比を試みた。

また、沖縄・沖縄的なものが表れやすい分野とそうでない分野について考えてみた。そこで、「沖縄的を抑え込む」分野から「沖縄的を出す」分野の順に、次のように並べる試みをした。

軍事 → 学校教育 → (共通)言語 → 産業経済 → マスメディア → 海外交流 → 生活文化
(衣食住・産育) → ライフスタイル・ライフサイクル → 地域・家族組織 → 宗教・スピリチュアリティ → アカデミズム → 文化芸能 → (地域)言語 → 自然環境

膨大な分野に及ぶので、検討記述は一部の分野に絞ったが、本書に収めきれなかった分野については、本ブログなどで追記していくつもりでいる。

以上述べてきたように、本書は、どちらかというところまでにはない視角から、新たな沖縄創造の展望を探るものだ。そのためか、執筆するなかで、次々と新たな関心テーマが浮かび上がってきた。そのまま書き進めると、数冊シリーズを10年かけてつくることになってしまいそうだった。ということで、大胆に絞り込み、多くの個所を別の機会に取り組むものにした。

では、私の中に浮かび上がってきた新たな関心テーマを羅列してみよう。

・沖縄における都市形成と市民形成の問題

米軍基地建設のため、住宅地農地をとられて、やむを得ず新しい住宅と町をつくってきた歴史がある。そして、新たな都市住民はその場で仕事・産業と人間関係をつくってきた。最近も、宅地開発・住宅やマンション建設を伴う都市建設がすすんでいるが、そこでの都市建設のありようと住民協同形成が大きな問題になって

いる。

他方で旧来の集落における共同体が縮小消滅傾向を見せている。自治会加入率の低下が象徴的例だ。そこに、新たな共同構築という歴史的課題が登場している。

新たな住民協同ということは、沖縄における市民形成の課題とつながっている。それは、本書最終章で書いたことだが、孤立化に陥る個人ではなく、新たな人間関係づくりや協同をおしすすめる地域主体としての市民となる個人の形成の課題だ。

10. 集落（コミュニティ）の弱体化・消滅と再編

2018年07月21日

ところで、本土都市近郊には大規模団地が大量に形成されてきたが、そうした団地では、高齢化という新たな課題に直面している。沖縄でも、数は多くないにしても、1970年代までに形成された大規模団地では、高齢化問題が浮上してきている。それにしても、他府県での様子とは異なる面がありそうだが、その点の検討は意味深いものがありそう。たとえば、沖縄では、次世代が居住・生活を引き継ぐ例がかなり広くみられるとの推測がありえようが、実際はどうだろうか。

こうした大規模団地での焦点的課題は、前回にも触れた市民形成であり、新しい形での集落（コミュニティ）の創造にある。別の言い方をすれば、集落における協同や自治を担う住民の形成である。

長期にわたって形成されてきた共同体とも呼ばれるコミュニティは、これまでの時代変化のなかで、その多くの側面が変化消滅し、それまでのものを継承するというよりも、新たなものを創造するという形で、コミュニティを継承創造することになる。その大変化が現在進行中なのである。

旧来の共同体の変化消滅が生まれてくる背景には、コミュニティに依存せず、会社などの諸組織に依存した生き方の拡大がある。その中で、コミュニティにも新たな諸組織にも依存できない人は孤立に向かうことになる。だが、コミュニティ的なものが不要になったわけではない。コミュニティを新たな形で創造する必要が生まれてきているのだ。それは新たな組織とコミュニティとの相互関係の構築ともいえよう。

その営みは、地縁的市民社会づくりないしは市民社会型コミュニティづくりとよぶことができよう。地域（コミュニティ）という場で、豊かな新しい諸組織を生み出し、それらが逆にコミュニティを生み出し強めるということであろう。

現在、私は南城市史「民俗」編の仕事を分担しているが、それは市内の全集落ごとの、人々の暮らしを描く作業だ。そのなかで旧来の共同体組織から市民社会型コミュニティへの移行過程とも呼んだらいい事例に多く出会う。こうした過程の歴史的な大変化は、ここ100年余りのなかで、20世紀初め、20世紀半ばの戦中戦後期、そして1960～70年代に集中的に見られてきた。と同時に、それらの大変化と並ぶ大変化が現在進行中であることを感じさせられる。

沖縄的なものとして、「つながりの強さ」「地縁血縁関係の強さ」「共同体が生きている」などがよく取り上げられる。といっても、沖縄でもこれらの弱体化消滅傾向、と同時に再編が進行している。その再編の進行における沖縄特性を明らかにすることも検討課題となろう。

これらのことを本書でも少しは触れたが、本格的には次の作業になろう。

1 1. 地域・人間関係における沖縄の魅力

2018年07月29日

ところで、よく言われる「限界集落」論は、経済・産業レベルで語られることが多い。だが、他のレベルでも検討が必要だ。そうすると、経済・産業上では、「限界」を超えるかもしれないが、他のレベルでは、むしろ価値あるもので、有用必要といえる面がある。

そうしたことを明らかにするためには、次のような検討が求められよう。

- ・結社型コミュニティ論
- ・できあがるものとしての集落とつくるものとしての集落
- ・住民からの視点と統治からの視点
- ・都市における集落のとらえかた。産業・経済的には集落なのだが、人間関係の視点から見るとそうはなっていない例が多すぎる。団地やアパートではその問題に直面し続けている。でも、新たな試みも行われている。コーポラティブハウス、シェアハウス、高齢者施設などでの取り組みもある。
- ・便利さ追求と手作り追求
- ・産業経済的なものにあっても、金銭で測られる面の比重が低くなり、福祉（ウェル・ビーイング）の比重が高まる傾向があるだろう。

そして重要なことは、全国画一の基準で沖縄をみると、沖縄特性を見落としやすいことだ。たとえば、沖縄の人口特性は、全国平均とはかなり異なる。出生率はその一つだ。また、社会増減の大きさにも注目する必要がある。そして、当然のことながら、沖縄内部の地域差の大きさにも注目する必要がある。

それらは、地域づくり（おこし）・沖縄づくり（おこし）ともからむ、

これらのことは、本書の最終章で少し触れたが、地域・人間関係を沖縄の魅力に不可欠なものと考えたら、そのような「魅せる沖縄」を今後どのようにしていくかに深くかかわることだろう。

1 2. 産業経済分野 沖縄おこし

2018年08月06日

本書では産業経済の分野は少し言及しただけで、大部分を割愛した。しかし、重要で興味深い問題が大量に存在している。たとえば、「沖縄らしい」協同的地縁的産業、あるいは世界と結び合う小規模産業などに注目したい。

また、沖縄においては開業率も閉業率も大変高いことが、よく話題になる。しかしながら、起業を否定的に見るまなざし、たとえば無計画といった非難をよく耳にする。起業しようとする若者に対して、安定的な職業に就くことを志向するストレーターコースを勧める大人は多い。だが、それは長く続いてきたわけではない。1970年代以降浮上し、80年代後半から広がってきた考え方だ。そのため、今では起業を社会的に支援する発想が弱いし、起業支援職のなかにも、非難が先に立ち、サポート姿勢が弱い傾向を見ることさえある。

職業における開発創造型を肯定的に見る眼が弱いままで続いてきたのだ。戦後かなりの期間、生活のために迫られたこととはいえ、そうした動きが高まったことと対照的でさえある。そのため、転職候補の中に起業を検討する若者への厳しい眼が続いた。

しかし、近年関心を高めているベンチャービジネスや人間関係型ビジネスは、福祉関連事業・観光産業などのなかで大きな期待を持たれている。観光も、以前のような大量生産大量消費型ではなくホスピタリティ重視へと変化しているなかで、人間関係重視型ビジネスへと変容している。広がる民泊などもその要素を多分にもっている。

ということで、前著「沖縄おこし 人生おこしの教育」(2011年アクアコーラル企画刊)を書いたのだ。だが、ストレターコースに乗れる比率は、最終的には10%までいくのだろうか、という現実の中で、ストレターコース以外にはないと思わせるような学校教育システムの修正の動きは未だ弱い。ストレターコースは、受身的な指示待ち人間、そして「人見知り」をはじめ、人間関係力量を弱め、沖縄を創造的に担う人材を養成する点で、大きなマイナスを作ってきた。

沖縄の学校教育界は、そうした現実をつくりながら、その問題性を変えるどころか、問題性を見ようとしない、あるいは気づかない構図のなかにある。そしてそれは、明治以降の歴史的構図でもある。

そのことが、私の「魅せる沖縄」執筆動機の一つにある。

沖縄教育をめぐる新たな構図を築く必要が高まっている。明治以来続いている(米軍統治下にあっても)日本政府のいいなりになる、ないしは下請けになる構図に代わるものをどのように築いていくのだろうか。深く重い課題だ。同様のことが言える他分野もあろう。

その際に注目されるのは、沖縄の独自性を高らかにうたいあげてきた文化芸能分野である。その教育と文化芸能の対照性に注目して書いたのも、本書の特性の一つであろう。

13. 沖縄とアイデンティティ

2018年8月22日

少し間が空いたが、読後感がよせられはじめたので、それらにも触れつつ綴っていこう。

本書を読んで、「話題が多様で、本が発するメッセージの焦点が広がり過ぎて、『何を言いたいのか』がよくわからない」という声が出そうだ。焦点を一つに絞っていないことは確かだ。それは沖縄をめぐるのは、多様な焦点が折り重なって存在しており、それらをできる限り受け入れて、まとめて書こうという志向をもっていたから当然のことだ。

とはいっても、本書では、折り重なった焦点を関連づけながら、いくつかの大きなメッセージを語ろうとした。そしてそれらのメッセージの各々が今後深化多様化していくことを願うものだ。

それらについて書くことで、連載を再開していこう。

まず、沖縄にかかわる人のアイデンティティをめぐるである。端的に言うと、「自分はウチナーンチュ(沖縄人)なのか」という問いである。「自分は日本人なのか」という問いが付随しやすい。ときには、「沖縄人なのか日本人なのか」という問いが出てくることさえある。

これらは、当人自身がどうとらえるかということと同時に、他者がどうとらえるか、ということが併存する。その際の他者には、個人だけでなく、国家をはじめとする権力機構が含まれる。

読者にはこの問題に反応した人がまず出てきた。

本書のなかでも触れた、「沖縄人」と「沖縄外の人」との結婚で生まれてきた人が一つの典型だ。それにしても、沖縄外の人には多様だ。「本土」の人、米軍関係者、台湾などアジア系の人、さらにヨーロッパ系の人などと多彩だ。

沖縄で生まれ育ったが、親の片方が沖縄外で、姓が沖縄ではあまり聞かない場合だと、アイデンティティの問題にすぐに出会い、自分では沖縄人だと思いついてきたが、周りから「ナイチャー」呼ばわりされたりして、困惑する例は多い。

1970年代までクラスのなかでそうした例は一人いるかいないかであった。しかし、近年ではそうでもないようで、学級に複数居ることも結構ありそうだ。それらには、両親とも沖縄外出身もいれば、片親が沖縄出身の例も多い。

大学授業を担当する時、最近の受講生名簿で見ると、本土姓がかなりみられるが、その多くは父親の関係で本土姓だが、本人は沖縄アイデンティティが強い学生が多い。そして、本土姓だからといって、沖縄人ではないと思うクラスメイトも少なくなってきた。

こう書く私自身も、その一人だ。沖縄外で沖縄と出会い、沖縄にやってきて長年生活してきた私の目線で、私自身のアイデンティティを問いながら書いたものだから、「自分自身の問題」「アイデンティティ探求」として読む人が結構多くなるだろう。本書の帯には、「宮古人と結婚した」と出版社が強調した文も書かれている。

といっても、私と出会う人には、私が沖縄人であるかどうか判断に迷うことが多い。恵美子をとてつきり沖縄外と思い、私を沖縄人と思う人の方が多いだろうか。学生ほどの若い世代だと、ほとんどが私を沖縄人だと思うようだ。色黒の私の沖縄式ヤマトグチ、とくにアクセントがそう思い込む原因をつくっているらしい。また、最近では多様な姓が並んでいるので、姓だけで本土出身と思わない人が多くなっている。

(この項は次回に続く)

14. 続・沖縄とアイデンティティ

2018年08月31日

近年では、ルーツの自覚が契機となって沖縄にかかわるだけでなく、本人の希望選択として沖縄にかかわる人もふえている。親や祖父母の世代に沖縄出身と見られないように改姓した場合に、改めて自分が沖縄アイデンティティをもっていることを強調して、「今は<なかむら>だけど、元々は<なかんだかり>です」と自己紹介する人もいる。

私が住民票だけでなく戸籍も沖縄に移しているのは、書類の取り寄せの面倒さなどを省くためもあるが、沖縄アイデンティティめいたものがあるからだ、と説明することがある。それに対して生まれた時から本籍沖縄県の人には、「大歓迎」「不思議」「微妙」といった多岐にわたる反応が出てくる。

また、沖縄に直接的なかわりを持たない人が、沖縄の生活・文化・仕事に魅せられて沖縄生活を始め、沖縄に「ハマ」って10年以上たつと、沖縄アイデンティティとのかかわりで自己把握をする人が出てくる。沖縄の自然に魅せられただけだと、アイデンティティ問題は出にくいですが、生活と人間関係を深めていくと、そうしたことになりやすい。

ひるがえって、長く沖縄に住んでいる人に沖縄アイデンティティが強いとは限らない。本書で触れたが、沖縄脱出志向で、沖縄アイデンティティを消そうとする人もいる。また、何世代か前から沖縄在住だが、数世代

以前に、沖縄外のルーツを持つ人もいる。

最近の史料発掘やDNA分析で、地理上、遠方の血が含まれていることに気づく例が出てきている。宮古人にユダヤ人の遺伝子が含まれているとか、北山の攀安知は西方アジア系であるという最近著もある。久米村系の人に、中国渡来人の血が流れていることは広く知られている。さらに、明治期になると、多様な人的交流が、現在の人々のルールに膨らみをもたらした。

だから、数世代以上にわたって沖縄で生活してきて、「純粋に沖縄人」と思っている人だって、実は、先をたどれば、どこかで多様な血が流れていることがわかる地点までさかのぼることができるかもしれない。といっても、家譜などの文献が残っていれば別だが、調査はなかなか難しい。

ところで、このアイデンティティ問題には、揺れ、ずれ、迷いなどが多分に含まれやすい。そこで改めて「沖縄人であるかないか」と回答を迫る必要があるかどうか問うてみたい。むしろ、揺れ、ずれ、迷いなど、そして、それらを生み出す多様な文化・生活をもつことを豊かさにとらえてはどうか、というメッセージを本書は発したのだ。

改めて見てみると、多様な地域・文化・社会をあわせもつ人はかなり多い。むしろその方が多数派だろう。一つのものだけを純粋に持っていることは、例外的なのだ。

沖縄内であっても、1960年代を境にその事情が大きく変化した。それ以前は、生まれ育ったシマ（字・集落）は一つの完結した世界だった。ほとんどのウチナーンチュにとって、そのシマがアイデンティティのスタートであって、沖縄とか日本とかは後から出てくる問題だった。1960～70年代に、そのことが激変したのだ。

15. 続々・沖縄とアイデンティティ

2018年09月06日

1970年代以降シマ（集落）内結婚が例外化し、シマ外の人と結婚することが一般化し、その両親のもとに生まれた子どもは複数のシマのアイデンティティをもつことになり、それをどう受け止めるかということが生じてきた。沖縄と沖縄外との組み合わせで生まれ育った子どもと同じような問題にぶつかったのである。

ここまで書いてきた「沖縄とアイデンティティ」という問題は、主として国単位のアイデンティティにかかわることだった。しかし、アイデンティティは国にかかわることだけではない。1960年代以前の多くの沖縄人にとっては、アイデンティティは、シマとの関係で語られることが大きな軸になっていたのである。

重要なことは、アイデンティティにかかわって、「〇〇人であるのかないのか」と迫ることは、主として外的な統治・支配とのかかわりで登場してきたことである。本書のなかでも触れたように、一般の人々が「沖縄人であるのかないのか」が問われたのは、明治期に天皇制国家による統治支配が始まって以降のことである。そして、戦後には米軍・日本政府とのかかわりで沖縄アイデンティティが登場したのだ。

その統治支配に対抗しようとする人も、いやおうなしに国家がらみでアイデンティティを問題するようになった。沖縄独立論に伴うアイデンティティにもそうしたものが見られる。

だが、そうした「国家とのかかわりを軸にして、〇〇であるのかないのか」ということとは異なる問題設定があっただけなのだ。あるいはまた、国家とのかかわりでいうと、一つの国家だけを選択する必要はないのだ。

たとえばアメリカ人であり日本人であり沖縄人であるという人がいていいのだ。アメリカでは、〇〇系アメリカ人という言い方が広く行われている。日本や沖縄でもそうした使い方があっていいだろう。そうしたことを多文化とか多文化主義とかいって語ることが20世紀後半以降広がってきた。たとえば、カナダやオーストラリアは多文化主義を国是としているが、他の先進国でも異文化に対して寛容であることがごく普通だ。難民問題で揺れているとみられているが、だからといって、単一民族で構成するという主張では、ナチスドイツの二の舞になってしまう。

国単位でアイデンティティをとらえるのは、政治レベルということになるだろうが、経済レベルでは、すでに国単位発想はぐんと希薄になっている。文化レベルだとなおさらだ。音楽が分かりやすい。世界各地の音楽が入り混じり、元々の在来の音楽が国単位でくくられて純粋に演奏される比率はぐんと低い。

沖縄ではチャンプルー音楽が盛んどころか、一般的になっている。チャンプルーにこそアイデンティティがあるといわんばかりだ。長い歴史を誇る三線音楽にしても、たとえば、86調ではなく75調の口説などは首里王府時代から歌われているチャンプルーなのだ。

16. 多文化のチャンプルーとアイデンティティ

2018年9月14日

実際、今日は世界の多くの地域で多様なアイデンティティを持つ人々によって、チャンプルー社会を作っていく時代だ。このことは、私が「異質協同」という言葉で、30年間語ってきたことでもある。

沖縄がそうであることはもちろんだが、日本本土もその傾向が強まってきている。ただ、「堂々と」表現することがためられる傾向はいまだ強い。批判抑圧されることをおそれて、「恥ずかしそうに」「気づかれないように」展開されることが多い。

だが、異文化であっても、クラシックや欧米諸国経由のものには、文句がでない。そこには異文化に対して序列構造でみるクセが残っているからだろう。また、異国間関係を支配従属とか差別構造で見るクセが強いからだろう。またいまだ単一民族発想が強く残っているからだろう。それらのクセ・発想の多くが、日本における国民国家形成期である明治大正昭和戦前期につくられたものであることを忘れてはならない。

ところで、沖縄に移住している人には、元々の集落み住む人々とはつきあわず、本土大都市型の暮らしをしている人がいる。それらの人のなかに、「遅れている沖縄」を語りたがる人がいる。それが沖縄にたいする差別感覚につながり、異文化への無理解につながっていることすらある。そうしたことは、世界的な多文化の流れから「遅れている」ことに気づいていないことだともいえよう。

また、多文化を実践していながら、それを意識する体験の蓄積の少なさがあるといえるかもしれない。自分の生活圏のなかに多様な異文化がたくさん存在していることに気づかず、日本文化中心主義に陥っている人は結構いる。

こうした点では、沖縄は日本の他地域と比べて先進的ともいえるかもしれない。

18～19世紀の国民国家が広がる時代に、いわゆる先進国が、国家単位にアイデンティティを築きだしたのは、当時としてそれなりの意味がある。と同時に、それは発展途上地にたいする植民地支配を伴った。また、20世紀半ばにおける世界的な民族独立運動の中では、途上国が民族自決権として、国家とアイデンティティ問題を再登場させた。

だが、現代において、それらの歴史と同じような発想で国家とアイデンティティの問題をとらえられるのかどうかは、検討が必要だろう。国家の多様な在り方が模索され始めているし、アイデンティティを国家と自動的につなげて考えることの是非が問われてきている。

17. チャンプルーのなかで生きる

2018年09月21日

いろいろな地域や文化とのチャンプルーで生きている人の増加は著しい。そうしたことを持つ自分のことを堂々と話すことができる社会では、至る所でそういう人に出会う。沖縄もそうした様相を示し始めている。

国籍が複数ある人は、今では珍しくない。成人したら国籍を一つにしなくてはならないという日本の制度は時代遅れになりつつある。

沖縄では、海外交流の豊かさに加えて、戦前の移民、戦後の外国軍隊駐留などが、そうしたことを加速させた。親族に海外在住の人がいたり、多様な血や文化の流れをもつ人がいたりするのは、例外的というよりは一般的なことなのだ。

そうしたことを押し隠さないと差別などに会いやすい日本の本土地域では、実際の多様さの広がりの中には、多文化性を認知している人は、とても少ない。棲み分けて日常的には出会わないようにする例も多いから、なおさらだ。

本書で紹介した世界のウチナンチュ大会にでたアメリカ人の友人には、沖縄の血は流れていない。沖縄女性と結婚し、何年かの沖縄生活を送ったから、自分もウチナンチュだとみなしたのだ。その話を聞いた時、私は彼以上にウチナンチュの資格があるなどと思った。多様な血と文化の流れを背負っている彼ならではの豊かな発想なのだ。単一民族論的な純粋さを誇り、そうでない人を区別（差別）するような発想は、狭隘すぎるのだ。

また、多言語社会、ないしはバイリンガル話者が多数いることを許容促進する社会と、単一言語に絞らせる社会との違いも大きい。これまた近代における国民国家政策が推進したものの一つだ。ヨーロッパでいうと、ギリシア語ラテン語といった古典語ではなく、地域の多数者が使う言語を国家語として承認するという近代における積極的意味をもっていた。そのなかで国家単位の共通語と地域単位の地域語とのバイリンガル状況が生まれる。

しかし、反転して一つの言語を公認して、それ以外の地域語を「方言」と呼び抑圧する動きが生まれた。そのバイリンガルさえ禁止していく動きも生まれる。そのことで、バイリンガルのもつ豊かさを抑え込み、多言語学習にもブレーキをかけてきたことが、意外に知られていない。沖縄はその典型の一つだ。教育界においても、バイリンガルは言語学習のマイナスになるという発想がいまだに根強く存在している。

こうした豊かな多様性にこそ、沖縄のアイデンティティがあるというとらえ方が広がることを期待したい。

18. 多様な読者の多様な反応

2018年10月08日

話を変えて、どんな方が本書を手にとられているか、私に入ってきた情報をもとに考えてみよう。一言でいうと、実に多様だ。

これまでの私の著書の読者は、学校教員、研究者、学生など、教育関係者が圧倒的に多かった。2007年刊の「沖縄田舎暮らし」は例外として、他は教育関係書だったから、当たり前の話だ。今回も、教育関係者がおられるが、これまでも私の著書を愛読してくださった方が多い。

他に、今回目立つのは、両親のうち片方もしくは双方が沖縄出身でないかただ。代表的には、7月の琉球新報の「晴耕雨読」欄で本書のことに触れてくださった嘉納英明さんがその例だ。

また、想定外の方も読まれている。経済政治畑の方で、重要な機関のトップに近い方が、本書のこれまでにない沖縄把握に関心をもたれ、わざわざ我が家まで訪問されて多くの質問をされた。

本書が、沖縄をめぐる先入観を訂正するきっかけになったという沖縄外の読者もいる。その先入観には、明治以降作られてきたものが多い。それらには、しばしば「遅れている沖縄」イメージがくっつき、差別的なニュアンスを含んだものが多い。それだけでなく、自然についての先入観もある。「沖縄は暑い」とか、日照時間が長いという先入観だ。沖縄の夏は沖縄外の人が想定するほど暑くない。たとえば愛知・岐阜の人で、暑い夏に「南にあってさらに暑い沖縄に出かける気にならない」という人が結構いる。実際は、最高気温についていうと、名古屋・岐阜の7月下旬から8月中旬に比べて、沖縄は数度低い。加えて、今年の西日本・東日本の暑さはすごかったが、最高気温でいうと、今年の沖縄より8～9度高い日が続いた。

日照時間については本書で書いたとおりだ。

現在は、沖縄イメージが大きく変わっていく時代だ。沖縄についての関心が高まる中で、沖縄についての先入観を捨て、沖縄についてのリアルな認識を得る絶好の時期だともいえよう。その一つの背景に、沖縄が沖縄なりに自己主張しはじめ、それが沖縄外の人々に大きな刺激を与えたことがあるだろう。他方、新たな先入観が作られつつあるといえるかもしれない。時には先入観をめぐるせめぎあいがあるといえるほどだ。マスコミ報道をめぐる最近の動きはそれを示している。

と同時に、沖縄在住の人々自身が、自分が持つ沖縄イメージを大きくふくらませつつある時代ともいえよう。それは、端的に言って、多様なものを含みこんで豊かになりつつある沖縄というイメージだ。

このように沖縄イメージの変化が激しいなかで、「沖縄」についてさらに掘り下げて知りたいということで本書を読まれた方もいる。そうした人の中には、沖縄についての「常識」を超えた単純明快なものを期待される方もいる。最近の沖縄関連書に「沖縄は独立すべか否か」「沖縄人は〇〇からやってきた」といったものがよくあるのも、その傾向を映しているだろう。

そんな期待をもって本書を読むと、「ああでもあるし、こうでもある」といった具合に、あちこちに拡散して述べている印象をもたれるだろう。ある方は「漂泊船に乗った印象だ」と語られた。

沖縄を単純明快に書くとすると、多様なものをもつ沖縄の豊かさを切り縮めることになってしまうと、私などは思ってしまう。だから、「漂泊船に乗って、読者自身で自分の方向を定めるしかない」というその読者の言葉は、的をついていると思う。

要するに、「人任せの沖縄の行方」ではないのだ。

19. 「沖縄らしさ」「沖縄的なもの」は「できあがってくるもの」だ

2018年10月13日

前回の最後に書いた「人任せの沖縄の行方」ということは、外からの勢力によって、沖縄がさせられてきたことだし、それへの沖縄側の従属などの受身的な対応といえよう。より正確に言うと、受身的に対応するしかなかったということかもしれない。これらを言い換えると、客体としての沖縄である。

と同時に、それだけでなく、今日では沖縄自身が沖縄をどうしてきたのか、どうしていききたいのか、沖縄外にどうかかわってきたのか、どうかかわっていききたいのか、という主体としての沖縄が前面に出かけてきている。

本書第四章で沖縄・沖縄的を出す分野と抑え込む分野について一覧表をつくったのも、そうした問題を考えるきっかけを作りたいからである。

日本は、最近の先進国のなかでは、多様性の認知度許容度が珍しく低い。それに引きずられて、沖縄でもその傾向が見られる。それだけに、多様性を持つ人も、多様性を押し隠そうとせざるを得ない歴史がある。沖縄という存在自体も、多様性を押し隠そうとする歴史だったといえる面があるかもしれない。「全国最下位」イデオロギーなどはそれを引きずっている。残念なことに、「全国最下位」というものが、実はイデオロギー性を濃厚に帯びていることに気づかないで使っている人がとても多い。

そうではなく多文化としての沖縄というイメージで堂々と語るなら、沖縄はより一層充実した豊かさにいるとられるのではなかろうか。それは本書のメッセージの一つの柱だ。

多様なものの流入(多様な人々の移住)と、多様なものとの交流協同で、沖縄を豊かにするという考え方は、排除の論理ではなく包摂の論理だ。「沖縄であるない」「沖縄の敵なのか味方なのか」というとらえかたとは異なる。また、外と内との境界を鮮明にするのではなく、あいまいな境界が、あるいは境界をあいまいにすることが、豊かさにつながると考えることでもある。

本書でくりかえし書いたことだが、「沖縄」「沖縄らしさ」「沖縄的なもの」がいかにできあがってきたか、これからどうなっていくのか、ということを考える際に、外から上からつくるものではなく、人々の生活の中で、多様なものとの交流協同のなかでできあがっていくものだと、考える。それについては、本書で紹介したように、伊波普猷が比嘉春潮たちに語った言葉「なる」「ビカム」に学ぶところ大だ。

だから、東京や全国標準を基準にして沖縄をとらえるだけでなく、沖縄内に標準をたてる論理も好ましくないとはいえるだろう。

あくまでもボトムアップで行くことを主張したいものだ。

20. 激変期にある沖縄と人生の転換

2018年10月18日

ここ100～200年間は、国民国家および国を単位とする巨大産業の全盛時代であった。その時代において、沖縄は国民国家のなかで「より遅れた」ものとみなされ、国家中央のありように合わせて「矯正」され、

そこに「追いつく」ことが求められた。人々の生き方も、国家や巨大産業が求める標準型生き方に沿うことが求められてきた。

だが、ここ20～30年になると、世界は激動の時代に入り、それまで国民国家や大量生産型産業が求めてきたありようへの問い直し、新たなありようの追求の時代に入った。

それは、国家のありよう、産業のありようだけでなく、人々の生き方においてもそうである。それは沖縄を例外にしてはおかない。そしてそれは、新たな標準を設定して、それを追いかけることを求めるという形とはかなり距離を置く。にもかかわらず、日本全体を見ると、旧来のものと新たなものとのせめぎ合いが激しい。そのため、ジャパン・イズ・ナンバーワンといわれた1980年代的なものと、新たな転換のなかで追求されるものとが併存するような状況が続いている。しかしながら、沖縄においてはなお1980年代的なものがお根強く残っている。それだけに「沖縄らしいもの」「沖縄的なもの」を「遅れたもの」として、そこからの脱却をもとめる発想がいまだに強い。

こうしたことは、学校教育に典型的にみることができる。受験教育・学力テスト・公務員希望がわかりやすい例だろう。と同時に、「沖縄的なもの」を追求しようとする志向も根強く存在している。近年、政治面ではとくにそうである。

現在の転換期を生き抜くためには、標準的なものを求め、それに追いつこうとする志向ではなんともならなくなりつつある。世界のどの地域もそうであるように、沖縄在住の人々も自分たちなりのものを追求することが不可欠になっている。

「国家」の位置役割の相対的低下、世界的政治経済文化動向が予測しがたいほど変動している中で、個々人自身が創造開発していかななくてはならない時代なのである。どこか強いところや標準的なものに合わせばなんとかなるといふ時代ではないのだ。

同様なことは、人間関係についてもいえる。ここ数十年の中で、地縁血縁関係のありようも激動し、沖縄の強みとまで言われた人間関係（社会資本）は弱体化してきている。そうしたものをいかにして再強化していくかにあたっては、過去のありように戻ればよいなどというものではない。歴史的蓄積を生かしつつも、新たな創造が求められている。それはまた、上や外からの指示指導でなんとかなるといふものではなく、人々の生活とつながりのレベルでできあがっていくものだ。

そうしたことを着実に進めていくための鳥観図のようなものを描くことも本書のメッセージの一つである。それはストレターではない人生づくりとか、沖縄づくりと結びつけて進めるとかということである。

そして、これまでの東京中心とは異なるものを持ち、東京から距離があることを強みにして展開するという面さえあるのだ。

今回で連載を終えよう。おそらくいつか再開することになるだろう。とくに本書作成のために準備していたものを、量的な理由で収めきれず大量割愛したので、それらを公開する場として本ブログを活用することを考えている。

「沖縄的なもの」第二次連載

1. 「沖縄的なもの」の生成・維持・変化・消滅にかかわる、社会の三つのレベル 2016

年09月10日

2015年9月～2016年4月に21回にわたる連載「沖縄的なもの」をしたが、それに続く第二次連載を始める。今回から2017年3月ごろまで十数回にわたることになる。

ここで、第一次連載で述べてきたことを踏まえて、「沖縄的なもの」の生成・維持・変化・消滅の歴史を概観しておこう。詳細については、改めて論じる予定である。

「沖縄的なもの」の生成・維持・変化・消滅は、時代によって異なるだけでなく、同時代にあっても、社会のなかでのレベルによる差異があることに注目する必要がある。まず、そのレベルを次の三つに分けて提起しよう。

I 日常生活圏内での生活・生産の必要から発生するもの

日常生活圏とは、部族、集落（シマ）、コミュニティ、家族などが相当する。時代差は大きいですが、個人のレベルも存在する。

II IとIIIの中間に位置するもの

a. Iが営まれる日常生活圏単位が、その圏外との交流の必要に基づいて生成するもの

島内他地域や近隣の島々だけでなく、数百～千数百キロと離れた遠隔地との交流・交易の長い歴史が沖縄にはある。戦争を含む対立抗争も存在してきた。IIIが出現しはじめる14世紀半ば以降、それらは徐々にIIIのレベルの統制管理下に置かれていく。

b. 20世紀初め以降、広汎に成立し、その比率を高めていくものとして、市場、メディア、社会運動などがある。

III 国・国家・外部支配組織などによる権力的強制によるもの

I、IIに比べると遅く、14世紀半ば以降に出現する。19世紀末以降でいうと、国民統合や軍隊にからんだものが重要な位置をなした。

IIIがIIを組織して推進することも多い。

これらのレベルがどう構成されるかは、時代によって異なる。そのあたりを概観していこう。

2. 14世紀以前には「沖縄的なもの」の自己意識は未成立 2016年09月20日

14世紀以前の沖縄像は、研究の急速な進展のなかにあるので確定的なことは書きづらいが、現時点で私が捉えているものを書いていこう。

およそ11世紀（もう少し以前との説もある）以降、出身地・言語など多様な集団が、沖縄に来訪・移住・

定住していく。しかもそれ以前から住んでいる人口をはるかに上回る人々が移住してくる。沖繩は、それらの多様な集団の並存・交流・対立抗争が展開する地域となる。

また、この時代は、東シナ海を取り巻く地域間の旺盛な交流・移動が展開される時代でもあるが、その中であって、沖繩が地理的に重要な位置にあったことにも注目したい。

移住してきた多様な人々が、在来の人々を含めて、対立抗争、交流連携協同などの多くのドラマを通して、沖繩・「沖繩的なもの」の原型をつくっていく。その原型をもとに、後世において作られたイメージの多くは、20世紀半ばに及ぶまで継承されてきた。そして、それらの多くは、「もともと沖繩にあったもの」であるとさえ思われてきた。そして、それらの多くは、14世紀以前から存在していたとさえ思われてきた。

だが、そのイメージのもとになった原型は、意図的につくるといよりも、多様な集団が持ち寄ったものがチャンプルーされて出来上がっていくというべきだろうか。そしてまた、年数を経る中で累積されてきたものだ。だから、14世紀以降のものがかなり含まれているのだ。

そして重要なことは、それらの中には、より強大な集団が自らのものを他の集団に押しついたり、影響を与えたりすることで出来上がってきたことが含まれていることだ。

※ 20世紀半ば以降、それらのイメージには、激変にさらされものが続出し、新たな沖繩イメージが形成されたり、変化したりしていく。その点については後述する。

重要なことは、14世紀半ばころまでは、自己意識としての「沖繩」「琉球」が未成立であり、したがって沖繩内部においては、「沖繩的なもの」が未成立の時代だといえる可能性が高いことだ。それは、先に述べたⅢレベルにかかわる統一がなされていず、沖繩としての一つのまとまった社会・文化が存在していなかったことに対応する。

14世紀半ば以降、中国側からの呼称として「琉球」の使用が広がり始める。「沖繩」類似語は、それ以前から地理上の用語としては登場するが、沖繩在住者が「沖繩」「琉球」などの用語を自己意識として使用したことはないだろうし、たとえあったとしても、その実態は不明というべきだろう。

14世紀半ば以前の東シナ海周辺は、宋・元などの中国大陸国家を除けば、国・国家というものは、たとえあったとしても、国家というには余りにも弱体で、希薄な存在であり、それよりも生活・活動を共にする集団が重要であった。そのため、かりに「沖繩」用語が使用されていたとしても、「沖繩」用語よりも、Ⅰ、Ⅱレベルの集団を示す用語の使用が優勢だったと推測される。

Ⅱレベルでいうと、一定のまとまりをもつ地域ごとの呼称は使用されていたであろう。北山・中山・南山、宮古・八重山・久米島などを指す用語である。さらに南山関連を例にとれば、佐敷、大里、玉城、具志頭、真壁といった地域を指す用語の方がよく使われていたかもしれない。それらは、人口数百人～数千人ほどだろう。あるいは、地域呼称よりは部族名を示す使用が強いかもしれない。部族名≒地域名ということがあったかもしれない。

それらの地域呼称にしても、他部族・地域との抗争の際、あるいは交易の際などで、諸集団のリーダー層・交易交流従事者において使用されたであろう。

なお、交易・軍事・農業生産・衣食住・育児などの分業秩序・身分制的なものが存在したとしても、身分制的秩序が17世紀以降ほど強くなく、いくつもの業務を合わせ担う人が多いと推察されるので、住民の中で、戦闘を含む抗争や交易・交流・交易製品の生産にかかわるものの人口比率はかなり高かっただろう。そのため、対外とのかかわりで、Ⅰ、Ⅱレベルの所属集団への帰属意識はかなり高かったであろう。その意味では、有力な地域や部族を中心に「沖繩的なもの」についての意識の原型が芽生える条件はあっただろう。

こうした状況は、14世紀後半に華夷秩序をもつ明の成立により激変していく。

3. 15世紀から16世紀におけるⅢレベルを軸にした「沖縄的なもの」の成立と

広がり

2016年10月05日

15世紀半ばから16世紀初めにかけて、統一国家の整備、そして国家による住民の管理統制が進行するなかで、住民が、「王国」とのかかわりで「琉球」「沖縄」を意識するようになりはじめる。そのなかで、逆に、それ以前のように住民自身が対外と直接かかわる機会が減っていく。

こうしたことは、住民が「沖縄的なもの」に直接的にかかわるといよりも、Ⅰレベルではなく、Ⅲレベルの王国を介して、間接的にかかわるといいう形を作りだしたといえよう。

16世紀に入ると、対外交流・交易が減少し、対照的に農業生産の比重が高まったと推量される。そして、国家の住民管理ともからんで、居住地への帰属性が強まっていく。

また、政治的管理と並行して、聞得大君を頂点とする、住民の集落単位の世界に至るまでの神・宗教体系が整備され、人々の生活が心身ともに管理統制されるようになる。

また、軍事的な統一、領域拡大の進行のなかで、地理的境界を明示することを通して、沖縄の圏内圏外の区分が鮮明になっていく。

このようにして、ⅢレベルによるⅡだけでなくⅠレベルの管理統制が成立し強められていく。それらのなかで、住民たちは、内側へと意識が向き、それが「沖縄的なもの」の形成を促進していく。

このような状況変化のなかで、圏外から移入されたものを、「沖縄的なもの」へと独自に変化させる動きが増える。

早いものとしては、14～15世紀前半において沖縄独自なものが見られるという大型グスクがある。農業生産において、圏外から持ち込まれた種苗や作業スタイルを沖縄の風土に適したものにしていくことが始まっただろう。畜産においては、新城明久がそのことに次のように触れている。

「あらゆる種類の家畜は近隣のアジア諸国や日本内地から持ち込まれたものである。これら導入された家畜は、人の手により積極的に利用目的に応じて改良され、洋種と交雑されることなく維持された。その集団が「在来家畜」である。」 新城明久「沖縄の在来家畜」ボーダーインク 2010年 p 10-11

「馬は、酵素多型遺伝子などの遺伝学的研究から九州から南下したとする説が有力視されている。また前述したように喜界島に大宰府の出張所があったとする説などを考慮すると、牛は八世紀頃、馬は一一世紀頃、九州から導入されたと思われる。しかし、牛や馬の渡来については柳田民俗学派のなかには、南方渡來說が根強く残っている。」 同前 p 25

4. (続) 15世紀から16世紀 Ⅲレベルを軸にした「沖縄的なもの」の成立と広が

り

2016年10月16日

三線に代表される楽器も、この時期に導入されただけでなく、沖縄独自のものへの歩みを始めていく。

また、中国から持ち込まれたハーリーやシーサーなども、この時期から長い期間をかけて「沖縄的なもの」へと変容していったであろう。それらの変容には、20世紀半ばになると、激変ともいべき状況になっていくものが多い。

加えて、「沖縄的なもの」で、沖縄圏外へ持ち出されたものも多い。そして、沖縄圏外から沖縄に移入されたもので、沖縄を媒介にして沖縄外各地に広まったものも多い。三線から三味線への変化も、こうした視点から検討される必要があるだろう。17世紀になってからのことだが、イモ（からいも、さつまいも・・・）においても、こうした視点が必要だろう。

こうしたなかで、沖縄意識が鮮明になり、「沖縄的なもの」と意識されるものが増え始める。沖縄語（ウチナーグチ）の仮名表記を王朝の公式文書に使用するなどもその例だろう。

社会組織や親族組織には、沖縄内にあっても地域差があっただろう。移住集団についていうと、移住してくる前の居住地での特性が反映していることが考えられる。それらも、15世紀後半からの王国支配による統一化施策のなかでの変容が生まれ、「沖縄的なもの」がでてきたであろう。したがって、国などの権力的強制によるⅢレベルが主導するのだが、それにしても、Ⅱレベルの地域単位による営みにおける地域差は長く継続していく。

神話や神職体系の統制整備も、15世紀末からすすめられるが、同様のことがいえよう。16～17世紀におけるおもしろ編纂作業にはそうしたことが反映しているといえよう。

このように、この時期以降、Ⅲを軸に、「沖縄的なもの」の形成が進みはじめる。それらには、権力性が色濃く反映するものがみられる。その代表的なものとして、創世神話や正史編纂（17世紀）作業が存在する。Ⅰレベルも継続するが、Ⅲレベルの統制下に置かれる。といっても、ⅡやⅠレベルが歴史記述の表舞台に広く登場するのは、19世紀末以降となる。

5. 17～19世紀半ば

2016年10月25日

17世紀初頭、琉球王国は実質的には薩摩との、形式的には明（のち清）との従属関係を結ぶ。それにしても、王国内部では、独自の王国としての支配秩序を形成していた。そして、独自文化をもつ「独自国家」であることを看板にする操作が行われ、その活用をはかっていく。

薩摩支配の特性として、対中交易の推進のために、「独自国家」であるように見せかけさせたのである。また、日本国内に対しても、「異国風」を強調した。

このことにかかわって、田名真之は次のように指摘する。

「島津は琉球王国を使って、日本の市場と中国の市場を結ぶと言う形で貿易を展開しようとする。島津が入ってこなければ琉球と中国の関係が続いていたかはあやしいところが多々あるんですね。また、琉球とは何者なのか考えたのは近世になってからです。わが国はどのような国なのか懸命に考えて、17世紀の後半、羽地朝

秀とか蔡温といった人たちが自分たちの歴史を初めて見直して、『中山世鑑』とか『世譜』ができ、『琉球国由来記』も書かれる。

両方の国と付き合う中で琉球はできることを一生懸命やるわけです。いまみなさんが琉球の文化と考えているようなものは、組踊も琉舞も料理、漆器も、ほとんどが近世以降、接待がらみも含めて日本と中国のものを学びながら琉球が作っていったものです。琉球人は漢詩も作るし和歌も詠みながら琉歌や琉舞も作っていく。冊封使には中国の文化をこれだけ勉強していると披露しつつ琉球踊りも見せる。日本には、中国からこんなものも学んでいますよと中国の踊りを見せ、そして琉球の踊りも見せるんです。薩摩には日本の勉強もしているよと、能とか狂言をやってみせる。そうしながら、琉球とはこういう国だと発見し発現し発揮していく。琉球が自分たちに目覚めた近世はとても大事な時代です。その形を処分の時も維持したいと思っていたと思うんですけども、近代という時代はそれを許さなかった。中途半端な国という存在はありえないから、つぶされていく。」(「表象としての肖像——王権・主権・自己決定権」シンポジウム 「時の眼—沖縄」批評誌5号2015年 p13)

この指摘で登場する事例は、主としてⅢレベルで展開されたものであり、その点では、Ⅲレベルが主導して「沖縄的なもの」を作り出されていった時代だと言えよう。

こうして、王国として「沖縄的なもの」を創作する活動が推進されていったのである。その象徴として、組踊の創作があげられよう。

芸能分野では、20世紀におけるⅡレベルのメディアに相当するものがないなかで、集落(シマ)単位で行われるⅠレベルでの展開と、組踊のようにⅢレベルが主導して展開したものが併在していたのだ。といっても、それらには相互に影響し合うものがあつたのであり、そのありよう自体が「沖縄的なもの」だといえなくもないだろう。

そして、Ⅲレベルを軸にした王国整備は、Ⅱ、Ⅰレベルにおける王国管理を徹底させるものであつた。したがって、その進行は、多くの分野での「沖縄的なもの」の成立展開を伴い、全体としての「沖縄的なもの」の定型性標準性が強められる分野が多かつたといえよう。

6. 19世紀後半～

2016年11月06日

Ⅲレベルの当事者である国・国家・外部支配組織などは、Ⅲレベルだけでなく、それと並行して、Ⅱレベルを旺盛にかつ広汎に使って展開していく。19世紀半ばまでもそうであつたが、それ以降も支配管理システムを更新して新たな形で進めていく。

また、19世紀後半以降は、Ⅰレベルのなかで、個人というものが徐々に浮かび上がっていく過程であるが、その進行のなかで、Ⅲ・Ⅱレベルが、個人にも強い焦点を当てつつⅠレベルの展開に大きくかかわっていく。

それらの様子を、まず19世紀後半から20世紀初頭について見ていこう。

琉球併合(琉球処分)は、「沖縄的なもの」のそれまでのありようを大きく変容させた。それは、Ⅲのレベルにおける外部支配の展開として始まる。そして、近世における薩摩支配が、「琉球王国」を介しての間接的支配の色彩を帯びていたのに対し、天皇制政府による直接的な沖縄支配として展開される。

それは、日本に近代国民国家を天皇制秩序として作り上げ、その辺境の地としての沖縄秩序を構築するものであつた。それは必然的に、それまでの「沖縄的なもの」を大きく変えようとするものになる。

その沖縄施策は、まず軍事・政治・外交分野において展開されるが、支配意図を貫くために、IIレベルIレベルにまで、変化を進行させる必要があった。それは、一時的な「旧慣温存」を含みながらも、地方政策・教育施策・土地政策・産業政策などとしても進行する。徴兵制の実施はそのなかでも重要な分野の一つだった。IIIレベルが推進するものを、Iレベルのなかの個人にまで徹底しようとした点が注目されるのだが、それらは、「近代化」という顔をもちつつも、国民統合の顔をあからさまに示すものでもあった。この「近代化」と「国民統合」という二つの顔が結合している点に注目しないわけにはいかない。そのために、「日本化」＝「近代化」という把握さえ生まれることがあった。

そのことを象徴するものとして、言語政策・教育政策に大きな力点が注がれたことに注目する必要がある。それらは、「沖縄的なもの」を否定し、それに代えて「日本的なもの」を据えることに基本的特質があった。また、言語政策の具体的な実施が、学校を通しての展開であったという点では、言語政策も教育政策に含まれるという特質があったといえるかもしれない。

その言語施策と教育施策が、量的にも質的にも、「沖縄的なもの」にかかわる最大の施策であるといえよう。その施策は、当初「沖縄的なもの」とそうでないものとの併存、言語でいうと、バイリンガルのなものが許容された。しかし、徐々に、「沖縄的なもの」を抑圧排除し、「沖縄的でないもの」に限定して進めるモノリンガル施策が追求されていくようになっていく。

その本格化は、20世紀に入るところからなされる。そして、その頂点は、20世紀半ばに近づく戦争期であろう。

7. 19世紀後半～（続） 芸能 沖縄内外の接触・交流 2016年11月17日

沖縄を近代日本国民国家に組み込む施策は、一定の成功を取めたにもかかわらず、文化芸能分野では必ずしも施策意図が貫ききれたとは言い難い状況がいろいろな点であられる。文化芸能分野では、それまでの「沖縄的なもの」の継承がかなりなされていたにとどまらず、むしろ、「沖縄的なもの」の新たな発展と言うべき事態が、これらの政策の進行のかなり早い時期から生まれていたことに注目しないわけにはいかない。

たとえば、明治末からの沖縄語（ウチナーグチ）を使う沖縄芝居の興行という新たなものが登場する。沖縄芝居を含む多種の「沖縄的」な文化芸能が人気を博し、都市地域で、人々が作りだす社会動向のIIレベルでの新たな展開を作りだしたともいえよう。農村部においても、各集落（シマ）において、「沖縄的なもの」を示すものとして村芝居などの芸能の新たな普及・創造があったことが注目される。それらは、人々の日常生活であるIレベルのなかにIIレベル的要素を入れ込み始めていったともいえよう。

こうした過程の中で注目すべき点をいくつかあげよう。

第一に、近世までは、「沖縄的なもの」を意識するのは主として士族においてであったことに変化が生じてきたことがある。その背景には、近世身分制の解体が進行したことがまずある。

そして、旧士族外にも、沖縄外と接し、「沖縄的なもの」について意識化する機会が急激に拡大した。それには、沖縄外から沖縄に来るものが急激に増加し、都市ではいうまでもなく、都市外でも出会う機会が激増する。官吏・警察官・寄留商人・学校教員などが代表例だ。村々に設置された小学校教員の主要ポストは、沖縄外出身者に占められ、学校が「大和屋」と呼ばれることさえあったのはその例である。（近藤健一郎『近代沖

縄における教育と国民統合』北海道大学出版会 2006 年参照)

第二に、職業の自由化・居住地の自由化などのなかで、沖縄外の多様な世界に触れる機会が増えていくことをあげることができる。なかには、進学などで沖縄外生活を経験する例も出てくる。

そのなかで、村々の生活にまでかかわって大きな影響を与えたのは、移住・出稼ぎという形での県外移動による県外者との接触がある。それらは20世紀に入るところから量的に拡大していくが、その象徴的なものは海外移民である。海外移民は、現地住民だけでなく、日本の他府県出身者との接触を作りだした。

さらに、大正期に入ると、他府県への出稼ぎが増加していく。そのなかで農村においても、集落(シマ)レベルにおいて、移民・出稼ぎ体験者がいることがごく普通になっていく。

また、移民・出稼ぎ経験者が帰郷してもたらした沖縄外での体験談は大きな影響をもたらした。こうして、多様なレベルでの県外との接触・交流が進行する。

第三に、徴兵がある。日露戦争には、多くの出兵があり、戦死者もでてくる。徴兵されたものは、主として九州での軍隊生活を送り、日露戦争時には、戦地にも出かける。その軍隊生活は、他府県出身者との共同生活として行われ、他府県出身者との接触・交流が大規模に進行する。

8. メディアの登場 日本と沖縄との対比

2016年11月26日

今回は、前回の「19世紀後半～」の続編だが、とくに大正・昭和戦前期で注目すべき点について書く。

第四は、新聞をはじめとするメディアの登場である。

住民に影響力をもつIIレベルでは、役所・役人をとおしての指示通知などもあったが、それ以前にも、学校が、通学する子どもたちだけでなく、学校を介しての地域住民への「啓蒙」活動を展開したことも大きい。また、新たな施策の下で、従来の共同体組織が再編されて結成された青年会・婦人会などが、「外」の世界と触れる重要な場となる。

それらに加えて、新聞などのマスメディアが、20世紀に入るところ登場しはじめ、地方においても、「有力者」たちが購読し始める。さらに、雑誌や書籍の購読も徐々に広がり、昭和期に入るところには、ラジオ・レコードなどに接する機会が増えていく。

それらを通して、「沖縄的なもの」について発見し感じ考えることが、旧士族や地方有力者・教育関係者にとどまらず、一般の人々においても展開されていくようになる。

そうした生活レベルでの「沖縄的なもの」をめぐる象徴的なものは、役所・軍隊・学校など「公的な」場では標準語を使用し、ウチナーグチを排除するという形での言語使用であり、またそうした場での、制服・軍服・和服着用に努めることに象徴される衣食住である。そのことによって、Iレベルにおいて、しかもその個人単位において、「沖縄的なもの」にかかわる思考・行動が迫られていく。

こうしたなかで、「沖縄的なもの」については、圧倒的に「日本的なもの」との対比で論じられるようになるのが、この時代の特徴でもある。中国など他地域との対比は霞んで、存在しないかのようであった。

そして、「日本的なもの」との対比の際に、「日本的なもの」イコール「正しいもの・進んだもの・近代的なもの」、「沖縄的なもの」イコール「間違ったもの・遅れたもの・前近代的なもの」というイメージと結びつけられがちであった。こうして、「沖縄的なもの」について、沖縄の人々が考え・行動するための規準のような

ものが仕立てられていく。その規準は、「日本」側によってつくられ、沖縄側はそれに従うという形も作られていった。

そのなかであって、リーダー的な人、知識人たちのなかで、沖縄・「沖縄的なもの」を肯定的に把握しようとする際に登場した一つの論理がある。それは、伊波普猷・柳田国男、さらには民芸グループたちが持ちだした論理であり、「沖縄は日本の典型・元祖・縮図だ」などという論理であった。それは、日本への従属という発想も含みうるが、と同時に、沖縄の優位性優秀性を示すことで、「日本的なもの」による沖縄差別への異議申し立てという発想をも含みこんでいた。

9. 沖縄戦と沖縄戦直前期

2016年12月09日

前回まで述べてきたことは、紆余曲折がありながらも、1930年代に至り、軍事色が濃くなっていくなかで、より一層の極度化純粋化が進行していく。そのことを軍事と言葉を中心にみてみよう。

Ⅲレベルのなかの軍事においては、日本軍は、「沖縄的なもの」を入れ込む余地をまったくといってよほど持っていなかった。「沖縄的なもの」は、危険なものとして扱われていた。それは、沖縄に軍隊どころか軍事施設の設置すら最小限にとどめていたことに表れている。また、軍隊編成においても、沖縄出身者をまとめることを避けた。沖縄敵視に至らないとしても沖縄不信であった。

ところが、昭和10年代の長期戦争期になると、沖縄にも軍事施設を設置するようになり、さらには、軍隊が移動してきて、沖縄戦に至る。

そのなかでは、軍隊を軸にしてⅢレベルによるⅡ、Ⅰレベルへの強力な管理統制として、「沖縄的なもの」の抑圧排除の徹底が追求される。沖縄戦のなかで、「沖縄語を話すものはスパイと見なす」がその集中的表現だろう。

さらに、住民自身によるⅡ、Ⅰレベルでの「沖縄的なもの」排除の追求運動が展開されていく。一部の知識人たちが主導して展開された改姓運動はその典型だろう。

こうした動向のなかでの象徴的な事件が方言論争である。それ以降、標準語強制を批判することさえタブー化されていく。

こうした動向の受け入れの論理として、「沖縄的なもの」は、「日本人」としては「誤ったもの」「遅れたもの」という発想が広がっていく。そのなかで、「沖縄は日本の典型・元祖・縮図だ」などという前述の論理は、吹き飛ばされてしまう。それどころか、「沖縄的なもの」を「日本的なもの」と並置するような発想は許容されなかった。

だが、そうした動向が強まったにもかかわらず、Ⅰレベルにあっては、とくにヤマトウンチュ・行政関係者・教育関係者たちがいない時には、「沖縄的なもの」が依然として根強く表れてきた。たとえば、沖縄語（ウチナーグチ）は、消滅しなかった。それが消滅の危機を感じさせるほど、人々の生活レベルで力を失っていくのは、1960年代以降である。

10. 米軍統治期（1950年代初めごろまで）

2016年12月16日

戦後の米軍統治下は、それまでの「沖縄的なもの」についてのありように大きな変化をもたらす。とくに、それまでの「日本的なもの」と「沖縄的なもの」と言う二軸構成に変化をもたらす。

軍支配という形のⅢは、まずは直接的な住民管理として、絶対的な力の行使でもってスタートする。その後、間接統治の形をとりながらも、時に直接管理の形をむき出しにすることが、かなり後の時期に至るまでしばしばあった。

間接統治は、住民による琉球政府を通して、あるいは、米軍政府が文化的啓蒙者として振舞う形でも展開された。

文化的啓蒙者としての顔は、文化芸能の場面で強く出された。また、食文化でみると、食糧提供という形で、アメリカ型食文化の導入がはかれる。衣服にしても、洋服を急激に普及させる。それらは、アメリカ的なものを持ちこむという顔よりも、近代的で合理的なものを持ちこみ、住民の生活を近代化するという顔をしたものが多かった。

当初は、担当者によって、施策の差異がかなりあった。たとえば、「日本的なもの」を許容する例、対照的に「日本的なもの」を拒否し「沖縄的なもの」を出すように指示する例がある。沖縄内部の教育関係者が強い関心を持った、学校などでの言語指導とか、放送言語にその問題があらわれる。それらについて、英語を使用するように指示する担当者もいたが、一時的なものだった。「沖縄的なもの」としての沖縄語の使用を強く求める担当者もいたが、結果として「日本語で行く」こととなる。米軍の「本部」としてある東京のGHQに従う形で、「日本的」なものを受け入れる場合もあった。

しかし、戦後も数年たつと、アメリカの世界戦略のなかで、沖縄の長期保有方針が鮮明になってくるにしたがって、世界戦略に基づく施策が硬軟おりまじえて展開するようになる。日本と切り離す施策などもそうである。

日本との分離戦略のなかで、「日本的なもの」を弱め、随所に「沖縄的なもの」を強調する動きがしばしば出てくる。少し時期が下って、米軍広報誌「守礼の光」などに、「沖縄的なもの」を掲載するなどは、その例であろう。

また、沖縄芸能を奨励するのも、そうした流れのなかで理解することもできよう。

Ⅲレベルからのこうした施策がありながらも、人々は、Ⅰレベルでの生活再建を重視して現実的に行動する。それは、シマの再建という形をとる場合もあれば、移動先で新たな集落をつくるという形もある。それらでは、無意識的なことが多いが、「沖縄的なもの」がにじみ出てくることが多い。

そうした中で、社会運動やメディアを介して、Ⅱレベルが急速に広がっていく。そうした動きは、1950年代以降鮮明になっていく。

この時期（50年代半ばまで）の象徴人物として、民政府や軍政府で、文化芸能・放送部門で要職にあった川平朝申が目される。このことについては、浅野誠「『沖縄的なもの』と川平朝申」科学研究費報告書「川平朝申のライフコースを基軸とした戦前から戦後沖縄の教育・文化実践史研究」代表者齋木喜美子2017年を参照されたい。

11. 米軍統治期（1950～1960年代） その1

2016年12月26日

1) この時期になると、ⅢとⅠの間にあるⅡレベルの比重が急速に高くなっていく。

その背景には、金銭商品を媒介とする市場経済が、人々の生活のなかでの比重を劇的に高めていくことがある。戦後直後の配給経済が終了すると、沖縄戦と基地建設のため、農業継続の困難が拡大し、かつてのような自給自足的色彩をもつ生活に頼る条件の低下に反比例して、金銭による商品購入で生活を支える流れが圧倒的になる。軍雇用をはじめとする賃金を得る形の労働が生活を支えるというありようが軸になっていく。それらはⅠレベルにおける流動化が強まったともいえよう。

2) そのなかで、マスメディア〔新聞・雑誌・書籍・ラジオ・映画・レコード・芸能公演・テレビ〕が、急速に人々の世界をおおっていき、Ⅰレベルの世界に強い影響を与え始める。そこで、Ⅲレベルもこれらを活用していく。こうしてマスメディアはⅡレベルの主媒介物となっていくのである。

マスメディアは、戦時のように単一化されたものではなく、多様なものがいくつも競い合って展開した点が注目される。新聞の離合集散の激しさがその例だろう。芸能活動をする劇団もそうである。無論、Ⅲレベルによる統制と奨励促進が米軍施策として推進されたことを軽視してはならないだろう。

3) これらと並行して、自治体や集落が、戦前のように、縛りとさえ感じるほどの強い共同性を発揮することが低下し、人々がそれら内外に多様なⅡレベルの組織をつくることが増えていく。つまり、全員参加の共同体としてのコミュニティの分解が進行しはじめるのである。

戦前においては、政府＝県庁という上からのルートで、青年団や婦人会など、いわゆる官製組織がつけられ、それが集落（シマ）共同体と重なる形で、事実上の全員参加組織がつけられた。しかし、戦後は、上からのルートが弱まる。それに代わって、教職員を代表例とする地域リーダーが啓蒙的性格を帯びつつ、地域に青年会や婦人会、さらには学事奨励会や教育隣組といった組織を作っていた。

そして、集落とのかかわりがほとんどない企業・協同組合・労働組合・文化諸団体・サークル・政治組織などの組織が広がっていく。

それらの組織は、農村地域では全員加入的性格が残るコミュニティ組織的性格を残すが、都市地域などでは、任意参加という面をもつアソシエーション的性格をもっていた。

4) こうした事態と並行して、社会運動が拡がり盛り上がっていったのも、この時期の特質である。土地闘争、復帰運動が最大のものであるが、それらはいくつもの要求・課題に見合っ、あるいは担い手の多様性に見合っ、多彩化していく。それらは、「ぐるみ」という要素と選択的自発的な性格を併せ持つことが多かった。

社会運動の意味をかなり広くとるなら、文化芸能スポーツなどの趣味的サークルなども含まれようが、そうしたものが都市を中心に広がっていくのが、この時期の特徴ともいえよう。それは農村にも見られるようになっていく。農村における青年会や婦人会組織は、コミュニティ的色彩が強いが、アソシエーションの萌芽的なものが含まれるとも言えよう。それらの組織は、衣食住などの生活改善の取り組み、スポーツなどの取り組み、復帰運動の取り組みなど、多彩な社会運動的色彩を持っていた。

こうした組織のありように、「沖縄的なもの」を見ることができようが、このあたりの検討研究は未着手状態に近いといえよう。

12. 米軍統治期（1950～1960年代）その2

2017年01月07日

5) 前回（12月26日掲載）述べた社会運動や趣味的サークルなどの多様な組織の活動は、「上から」の啓蒙的な要素がきっかけとしてあったにせよ、メンバー自身の要求をもとに広がりを見せ、多様な動きとなって広がっていく。

また、教職員会のような、ほぼ全員加入の組織であっても、そのなかにサークル的なものが作られ始めるのは、1960年代半ばである。たとえば民間教育研究団体のサークルめいたものが出てくるのである。

6) こうした動きのベースに、一人一人の沖縄戦体験、それにもとづく「決意」「覚悟」も含めた複雑な思いが存在していたという面も見逃すことは出来ないだろう。それが「沖縄的なもの」という特性をもたせる。

その中で、「沖縄的なもの」への気づき・意識化が進んでいく。それは、たとえば音楽芸能における歌詞やセリフなどの言語面に反映する。それだけでなく、言語化されていない曲や振付などにおいても、「沖縄的なもの」への意識化がすすむ。沖縄外の多様な音楽芸能の流入の中で、新たな動きも出てくる。それらに刺激を受けて、「沖縄的なもの」を積極的に押し出すもの、あるいは押し隠すものがでてくる。あるいは、それらと「沖縄的なもの」とをチャンプルーするものも出てくる。

こうしたなかで、それまでⅢレベルからⅡ・Ⅰレベルへの浸透のうえで、中心的役割を果たしていた学校の位置が相対的に下がり、多様なメディアを媒介にしたものが果たす役割が大きくなっていく。つまりメディアによるものが、Ⅱレベルにおいて不可欠な位置を占めるようになる。そしてそれがⅠレベルにおける人間関係をもとにした、「口コミ」などといわれるものをもとにした意識形成と絡み合って進行していく。

※ さらに、90年代以降になると、インターネットやソーシャルネットワークの普及に伴い、ⅠレベルとⅡレベルとがからみあった新たなメディアが浮上してくる。

7) こうしたなかで、「沖縄的なもの」についての意識は、「イメージ」と呼ばれるような形をとることが表面化してくる。こうした問題にかかわって、多田治「沖縄イメージの誕生」（東洋経済新報社2004年）の次の記述は示唆的だ。

「現代ではイメージが非常に重要な役割を果たしていることも、政治やマーケティングをはじめ、各分野の常識となっている。イメージは一概に「現実に反するもの」とは限らず、それ自体が現実を構築する力をもっているものである。」P8

「1つだけいえることは、われわれは今後、こうしたイメージをめぐる現実から、もはや逃れることはできない、ということである。イメージの円環、消費社会の円環の外へ、自分の語りだけが抜け出すことは困難だ。むしろ、その円環の内部に踏みとどまり、こうしたイメージ込みの現実と、いかにつき合っていけるかが問われていくだろう。例えば、現実を単純化するイメージ、隠蔽するイメージに違和感をおぼえたならば、オールドナティブとして、より複雑でリアルなイメージをいかに代置できるかどうか、問われるだろう。」P170

こうした視点から多田は「沖縄イメージ」について論じる。そして、その＜海＞＜亜熱帯＞＜文化＞といった「沖縄イメージ」の誕生を多田は1972年以降のことと述べていく（p2）が、このあたりの詳述は、機会を改めたい。

8) この時期についても一つ注目したいことは、沖縄外への移動体験をもつものの増加である。その一つは戦前から続く移民であるが、この時期は、八重山などへの近距離移民とともに、ボリビアなどの南米移民が、米軍政策として行われたものを含めて、多様に展開される。

そして、集団就職を含めた本土就職が増加していく。彼らには、いずれ沖縄にUターンするという見通しをもつものが多く、実際、時期を経てUターンする例も多い。と同時に、そのまま移住先に残る例も少なくない。他方、本土大学進学する場合には、卒業後、本土就職もあるが、沖縄就職する例が多い。この時期には、旅行で本土や海外に行く例は、それほど多くない。パスポートやビザが必要であり、その取得が容易なものでなかった事情もある。

とはいえ、沖縄外、特に本土について、その生活を経験・見聞してきたものを身近に見かけるようになり、そうした彼らを通して「沖縄的なもの」について認識を「日本的なもの」との対比で人々がするようになったことも大きい。それらは「復帰運動」「復帰願望」と絡み合う。

13. 「復帰」前後期（1960年代後半～70年代前半）

2017年01月18日

この時期は、「復帰」運動が高揚し、それに対して、日米両政府が対応策を探り、それまでの米軍基地を実質的に維持しつつ、米軍による直接的な沖縄統治を日本政府による統治へと変える形に落ち着かせようとするのがⅢの国家統治レベルの主要な流れである。それにもとづいて、マスメディアを中心にしたⅡレベルでのキャンペーンがすすめられる。それへの対応・対抗として、「復帰」運動は、「核も基地もない沖縄へ」という形などへと展開し、その内実の変容がすすむ。

それらのなかで、「日本の中の沖縄」、「日本人としての沖縄人」というありようについての模索がすすめられる。と同時に、多様な議論が社会運動やマスメディアのⅡレベルを中心に渦巻く。それは「沖縄的なもの」をめぐる新しい議論をも含んでいく。

「復帰運動」のなかでも、「沖縄的なもの」と「日本的なもの」とのからみが複雑に生じてくる。「日の丸」を掲げて復帰運動することの是非論議が典型的な焦点となる。たとえば、1960年の復帰協結成、翌61年4月28日を「屈辱の日」として、復帰行動の展開を始めたころについて、新崎盛暉は次のように指摘している。

「少数ではあるが、復帰運動を批判的に捉えようとする視点も芽生え始めていた。とはいえ、米軍政下から抜け出す道は、当面、日本復帰以外にはなかった。人権の回復、自由と民主主義の確立、経済的格差の是正、社会保障の充実など、いずれの点から見ても、すべての制度を「本土なみ」にすることが、少なくとも相対的には、現状の是正につながっていた。」新崎盛暉「日本にとって沖縄とは何か」岩波新書 2016年 p48

沖縄と日本、「沖縄的なもの」と「日本的なもの」、この二つを対比させて問題を捉える構図が一つのピークに達するのが、この時期の特徴でもある。法や制度を「沖縄独自のもの」から「日本」に合わせたものにしていくということが一つの流れである。

なかには、日本に合わせるのではなく、沖縄独自を残すという動きも、一部だが生まれてくる。豆腐販売で、沖縄方式を容認させる動きなどはその例だろう。だが、大きな流れは、沖縄をいかに「本土」に合わせていくか、ということにあった。

「基地抜き返還」とまでいかななくても「基地をせめて本土並みにして返還」というように「本土並み」とい

う表現はその一つであろう。あるいは、インフラ整備にあたって「本土水準」という表現もそうであろう。あるいは「本土を基準にして」「本土をモデルにして」なども、そうであろう。それは、「日本」を標準にして、「沖縄を高めていく」という発想でもある。

そうしたなかで、日本と沖縄の現実についての各種の調査がおこなわれ、沖縄を本土化していくための諸施策が展開していく。大学などでも、本土法制に合わせた「整備」がなされ、沖縄独自を切り縮め、沖縄にないものを補充していく。その際に、「本土」側を沖縄に合わせるという動きは稀有に属することであった。そこには、「沖縄は、本土に比べて不足している・遅れている」という前提認識が広く存在していたからだろう。沖縄の教育委員会の公選制を廃止し任命制に切り替えたのはその例だろう。

14. 「復帰」前後期（1960年代後半～70年代前半）（続） 2017年01月28日

各種の調査の中には、都道府県別一覧表のような統計表が添付され、沖縄の全国のなかでの順位を示すものが多く登場してくる。そして、多くの項目が、「沖縄は全国最下位」という数字を示す。そのことに驚きつつ、「他府県（本土）に追い付いて、最下位という汚名を晴らそう」という機運が生まれてくる。主としてⅢレベルから情報が出されるが、Ⅱレベルのマスメディアを通して拡散され、Ⅰレベルの人々の間の「共通認識」となることがしばしばである。

ここで、日本対沖縄ではなく、「日本のなかでの沖縄の序列上の位置」という把握が生まれ広がっていく。この発想は、戦前にも広く見られたが、この時期になって、高まり広まる。

それらには、いくつかのタイプがある。

- 1) 道路や下水道などのインフラ整備に典型的だが、全国平均レベルに早期に追い付くために、政府が予算措置を講じて、大規模工事を行うことを求める。
- 2) 米軍基地の密度などの数字をもとに米軍基地撤去縮小を求めることに見られるように、Ⅱレベルの社会運動のなかで主張され、Ⅲレベルの政府などへ要求提出をしていく。沖縄差別だとして告発していく動きもその例である。
- 3) 学力テスト結果に基づいて、「学力最下位から脱出」を悲願として追求する教育界の動向が生まれ、それを保護者にも、さらに県民全体にも訴え、Ⅱレベルの社会運動のようにして、学力向上運動を展開する。
- 4) 統計調査上の位置ではないが、各種のコンクール・競技会などでの成績をめぐる論議である。象徴的存在として、甲子園の高校野球がある。「悲願の出場」から「悲願の一勝」、そして「悲願の優勝」へという流れのなかで、野球に関心のない人でも、沖縄代表校の試合ともなると、仕事は一時停止してテレビの前にかじりつきになり、道路を通る車も閑散とする。そして、試合の動向に一喜一憂し、勝利すると、我がことのように、あるいは沖縄の勝利のように受け止め、喜ぶ。そうした姿は、まさに「沖縄的なもの」だといえよう。近年では、上位成績をとることがむしろしばしばになり、90年代までほどの熱狂ぶりはないが、いまでも、その雰囲気は残る。同じようにして、各種スポーツや音楽芸能などでの沖縄出身者の活躍に大声援を送る姿は、人々の「沖縄」に抱く心情をよく示すものとなっている。

5) 上下の序列関係でとらえるというよりも、いくつかの項目を総合的に見て、沖縄の特性を把握しようとするものがある。たとえば、開業率も閉業率も全国一ということで、起業精神が旺盛だが、試行錯誤的傾向が強いと分析し、その起業精神を前向きにとらえて、社会の活性化に活かしていくという捉え方だ。

また、データの歴史変化を分析していくありようは、専門論文にも頻出し、それが研究上の沖縄把握の重要なアプローチとなっている。

以上述べてきた五つの把握は、それ以前からも見られたが、この時期にごく日常的なものになる。そして、それ以後も根強い把握方法の一つとなる。

15. (続々)「復帰」前後期(1960年代後半～70年代前半) 2017年02月08日

この時期には、戦前同様に学校レベルを中心に推進された標準語使用ウチナーグチ抑圧の教育は、「家庭でも標準語」をスローガンに象徴されるように、家庭内の親子会話にあっても推進されるようになる。Iの日常生活レベルでのウチナーグチの「衰退」は著しい。ラジオなどのメディアでも、また、公式の会議などでも、標準語が一般化する。

こうして、当時の子どもの世界から、ウチナーグチは消えていき、ウチナーグチを日常的に使用する人の年齢が、毎年一歳ずつ上昇し始める。結果的に、2010年代に50代になる人々より若い人達の大半は、たとえ聴けたとしても、ウチナーグチを話せない状態に至る。こうして、90年代に至ると、ウチナーグチは消滅の危機を感じさせるほどになる。

こうした点を見ると、この時期に、日常言語面で、「沖縄的なもの」が消滅し、「日本的なもの」に統合されていくことが始まったといえよう。

この時期には、日本本土からの観光客が増加してくる。それに合わせて、メディアを通して沖縄の宣伝が展開される。それにかかわって、多田治が「沖縄イメージ」として分析していることが、大変示唆的だ。

そこで作られた「沖縄イメージ」が、逆に沖縄人自身の沖縄イメージにも投影してくる。「日本的な」眼を通して、「沖縄的なもの」が作られ始めたともいえよう。そうしたもののピークに位置するのが、1975～6年開催の沖縄海洋博である。

ところで、戦後人々のなかに広がり始める生き方の多様化が、この時期さらに拡大していく。職業でいうと、家業を継ぐ以外の生き方が、若者のなかに広がり一般化していく。多様化してきた人生のありようのなかで、たとえば、「沖縄から出るか出ないか」「沖縄に戻るかどうか」という問いが、一人一人の問題となって、若者に迫られる事態が広がる。つまり、沖縄にかかわるアイデンティティをめぐる選択なのである。それは、同世代の他府県の若者が「都市に出るか生育地に留まるか」の選択とは異なる意味を付加していたのである。

金銭商品経済の浸透による生活・生き方の変容、そのなかでの個人判断の比重の高まりは、広く世界的に見られることだが、その問いに沖縄との関わり方の問いが重なるのが、「沖縄的」な特質ともいえよう。

こうしたこと背景には、戦後の米軍支配に伴って従来の家業では生活できない面だけでなく、金銭商品経済の広汎な浸透の中で、被雇用者として生き、金銭を得なければ生きていけないことがある。対照的に、戦前来の半自給自足経済に対応する生活とその感覚は縮小していく。

16. 1970年代後半～90年代 その1 個人としての「沖縄的なもの」と教

育家族

2017年02月19日

1) こうしたIレベルでの生き方の変容は、IレベルだけでなくIIレベルでの人間関係や社会組織の変容とも結びついている。それは、Iレベルにおける個人・市民の成立拡大であるし、I・IIの両レベルにまたがる結社的な組織の成立拡大が重要な焦点になってくるということである。

それらは、戦前に萌芽はあるが、戦後に至ると、新たな誘因が加わって、1960年代に本格化し、1990年代（ないしは1980年代）にはごく一般的なものとなる。

そのなかで、個人としての「沖縄的なもの」が成立（意識化）していき一般化する。戦前には、限られた個人がもっていたものであったが、1950年代以降、移動する個人を中心に量的増加がみられ、移動自体がごく普通にみられるようになった1970年代後半以降、広がったのである。

だが、1990年代には、社会的関わりを弱めて、閉鎖的な世界に入り込む個人が登場し始め、いわゆる先進国に広くみられるようになった個人化傾向がすすみ、社会から背を向けた孤立化にすすむ動きもみられるようになってきた。

戦後における「本土」（日本的なもの）との交流の拡がりのなかで、人間関係あるいは社会資本の豊かさが沖縄の強みであり、「沖縄的なもの」を示す特徴だと言われてきたが、それが弱体化する傾向に警鐘を鳴らす指摘が、1990年代以降増えていく。

2) こうしたありようをわかりやすく示すものとして、教育熱心な家族の登場と広がりを見ることができるので、それについて述べよう。

長年の共同体（シマ）のなかでは、子どもは親や家族のなかの子どもであるというだけでなく、共同体（シマ 地域）の子どもでもあった。そこには、大人たちによる共同の子育てが存在していた。字が運営する字保育園が、戦後広く見られたのは、そうした歴史を背景に持っている。

それは、「復帰」後における公立幼稚園ないしは、公立・認可私立・無認可の保育園に引き継がれていき、沖縄における幼稚園就学率が図抜けて全国一位であるという「沖縄的」特徴の基盤を作りだしたのだ。また、70年代以降における地域子ども会の活発な動きの基盤になっていく。同様に、字単位の学事奨励会や教育隣組の動きも、1960年代までだけでなく、70年代まで残っていたのも、沖縄的特性をなしていた。

そうした「共同体（シマ 地域）の子ども」のありように、大きな変化が生じてくるのは、70年代後半以降である。対照的にスポーツ少年団・おけいごと塾・学習塾の拡がりどころか隆盛といえる状況がそれを象徴する。それらは、集落（シマ）ぐるみの子どもたちが参加するというのではなく、希望者参加であったし、ある程度の費用がかかるという点で、金銭商品的関係をもつものであった。

それは、子ども当人の選択判断に加えて、個々の家族単位での選択判断でもあり、個々の家族が共同体（シマ）から距離をおきはじめたということでもあった。といっても比較の上のことで、共同体から離脱したというほどではなかった。それでも、なかには地域の学校から離れて遠距離の学校を選んで入学する事例も出始める。他府県の私立中学校に進学する例が象徴的だろう。

そのなかで、地域子ども集団という存在よりも、緊密な親子の結びつきがひろがり、核家族の成立と並行し

た近代家族の成立ともいべきものが急速に進行した。そうした家族には、地域だけでなく門中などの親族組織とも距離をおく例が出始める。なかには、そうしたものから離れたところへ転居する例も出始める。

17. ストレーター秩序が沖縄にも広がるなかで

2017年03月03日

3) そうした家族では、子育て、とくに子どもの学校教育での成功が、家族の中心テーマになってくるという意味で教育家族と呼ばれ、先進国で早くから見られてきたが、20世紀末になると、途上国でも広く見られるようになる。それが沖縄でも、70年代から広がり始め、80年代90年代を通して、よく見られる姿になる。

それは、親自身が子どもに教えるというよりも、子どもの学校での成功が中心テーマであり、それを支えるものとして家庭教育が位置付けられる。そのサポートには、参考書・通販教材、そして学習塾通いなどと、かなりの金銭が必要であり、金銭・商品としての教育という性格が色濃いものであった。ということで、教育に金をかける時代に至る。そのことが、世帯の経済力と深くかかわり、経済上の格差が教育上の格差につながるということで、2000年代に入って、大きく問題とされるようになる。

こうした家庭における教育と並行して、学校の方も大きく様相を変えていき、受験実績ということが大きな柱になってくる。その変化は1980年代半ばにはっきりしてくる。高校の通学区域が拡大され、受験専門高校ともいべき高校が出現し、入学難易度で序列化してくる。受験専門高校では、大学入学試験実績が焦点化されてくる。

そうしたものとつながりあって、学力向上運動が、80年代後半から学校ぐるみ地域ぐるみで展開されるようになり、それが2010年代まで継続している。その象徴的なこととして全国学力テストでの順位が、沖縄教育界の中心テーマとなる。前に述べた「日本のなかでの沖縄の序列」ということへの関心の集中が、ますます強くなっていくのである。

4) ところで、全国的には、といべきか、「日本的なもの」といべきか、1960年代から、「よい高校→よい大学→よい会社→出世して定年まで勤務」という流れが、標準的な生き方として、成立してきた。ここで「よい」というのは、端的に言って、偏差値が高い高校・大学、そして大企業と理解されてきた。

こうした流れを私は「ストレーター・コース」と名付けたが、そのコースに乗ることが、子ども達に求められ、家庭教育には、それをサポートすることが求められた。このコースに実際に乗ることには限りがあるのだが、90年代半ば以降、ますます狭き門となり、非正規雇用に就くものが以前よりはるかに増大していく。

「日本的」には、そうしたありようの矛盾が激しくなって、問題解決の必要性がますます高まってきた90年代半ば以降、沖縄では、逆に「ストレーター・コース」に乗ろうとする動きがますます高まり、そのコースを歩むことが標準化し、学校も家庭もそれを支えることが中心的課題だととらえる動きが強まる。これまた、「日本的なもの」に近づくことこそが、沖縄に求められているという捉え方の一つの象徴的なものとなってきたのである。その点では、「沖縄的なもの」の追求は希薄になっていく。

沖縄独自のありようの追求、つまり個性としての沖縄のありようの追求ではなく、全国のなかでの序列的な位置に沖縄独自、あるいは個人独自のものを見いだそうとする傾向が強まるのである

18. 市民化と孤立化 文化芸能分野

2017年03月13日

5) 関係する人が「ぐるみ」で全員参加するのではなく、選択で参加する結社的組織が、この時期に広がり一般化していく。それらには、企業・NPO・サークル・社会運動組織・福祉施設など多様なものがある。沖縄における企業の開業率閉業率の図抜けた高さがそれを象徴しているといえるかもしれない。

その背後には、市場システムの浸透があり、さらにメディアの拡がりがあるといえよう。

こうした結社をつくり結社に参加していく動きは、市民化といえよう。そうではなく、そうした組織を避けようとする動きは、孤立化に近い個人化といえよう。それは、結社的な組織からは距離を置くが、巨大なシステムのなかでは、受身的に動く、というかシステムには受身的に埋没していく動きといえよう。孤立化した人達は、人々との具体的な付き合いを減らし、金銭で購入する商品で生活する比重を高める。それに近いものとして、バーチャルな情報のなかで生きるありようも広がる。それは、人々のつながりという社会資本において強みを持っているという沖縄社会のありように、変容をもたらしてきている。

この二つのありよう、つまり市民化と個人化＝孤立化との矛盾・対抗関係のなかで、人々は生きている状況が広く見られるようになったのが、1990年代以降の沖縄社会の特性だとも指摘できよう。

6) そうした問題を、文化芸能分野と社会運動の分野でみていこう。

1970年代以降、沖縄における文化芸能分野では、長い歴史を持つものに、マス・メディアを媒介にした新たな動向とが絡み合いつつ、流れをますます大きくしてきた。人々の生活レベルから、つまりIレベルから豊かな展開を持ってきたものと、IIレベルのマスメディアや市場動向とが絡み合っ、量的により一層巨大な動向を作り出してきたのだ。それは、IIレベルが推進するメディア・市場、愛好者組織などによって支えられつつ、Iレベルの個人の自由選択としての、そして嗜好としての性格をもって広汎に展開している。

音楽分野でいうと、民謡や古典などに加えて、クラシック・ジャズ・ポップスなど多彩化を伴っている。他に、写真・絵画・陶芸・彫刻・織染・デザイン・盆栽・料理など実に多彩な分野での展開が見られる。長い歴史をもつものだけでなく、歴史の浅いものにあっても、「沖縄的なもの」として展開していることが注目される。また、文化的嗜好の中での「沖縄的なもの」の追求が、人々とくに若い世代における沖縄アイデンティティと結びついて展開している点が注目される。

それらの分野の愛好者組織としては、民謡・古典・舞踊などの道場（研究所）、サークルなど多彩のものが展開し、既存の青年会・婦人会（女性会）なども、そうした動向に対応して、任意参加的要素を高めつつ、組織を再編してきている。

似た分野として、スポーツがあることも注目される。野球・サッカー・バレー・バスケットボール・ハンドボール・ボクシング・テニス・ゲートボール・ゴルフ・釣りなどといったジャンルにおいて、多彩な組織が作られ、活発な活動を展開している。それらの組織にも、少年スポーツチーム・部活・地域チーム・サークルなど、多様な世代にまたがって多様性がある。

こうした文化芸能やスポーツ分野には、沖縄在住者のかなりの比率の人々が参加している点も注目される。

19. 近年の社会運動のなかでの「沖縄的なもの」

2017年03月23日

7) 政治的支配とは直接的かかわりが薄い文化芸能スポーツ分野においても、「日本的なもの」との関係において、明治以降百年余りの歴史のなかで、差別・コンプレックスの問題が存在してきた。それらの諸分野において、「日本的なもの」とは異なることに自己否定的なものを感じたり、「日本的なもの」と比較して「沖縄的なもの」が劣位にあることにコンプレックスを感じたりする例が膨大にあった。

その差別・コンプレックスのなかで、「沖縄的なもの」から脱け出ることをテーマとする動向が、沖縄の人々自身のテーマにするような動向が長く続いてきた。

しかし、1980年代以降、コンプレックス構造から脱け出る動向が強まり始める。わかりやすい例でいうと、高校野球の全国大会で熱狂的な応援が展開されてきたが、敗北続きではなく、勝利を取めることが出てくるだけでなく、優秀な成績を取めることさえ出始めることで、「溜飲を下げる」感覚が広く見られていく。

このテーマは、日本（本土）との関係として登場することに特性がある。そして、「日本的なもの」とか「本土」がコンプレックス対象ではなくて、沖縄独自の肯定的で、優位ささえ持つものとして展開し始める。戦前、本土から来訪した民俗研究者の発言と、それに呼応する知識人だけにとどまらず、広汎な人々のなかで、コンプレックスから抜け、「沖縄的なもの」に自信や誇りをもつ動きが広まり高まっていく。

音楽における「沖縄的なもの」が人気を博することはその象徴例だろう。それは、沖縄以外の一般の「本土の人々」にも見られ、「沖縄的なもの」への興味関心、さらに愛好などの機運を作り出していく。2000年代初めの「ちゅらさん」人気はその象徴だろう。それが沖縄観光の拡がりを生み、「沖縄ブーム」と言われるような事態が作りだしていく。

こうした動きは、文化芸能・スポーツや観光だけでなく、それらを先導役として広汎な分野で広がっていく。

8) それらと並行するかのようになり、社会運動の高揚が90年代以降見られるようになってくる。米兵による少女暴行事件、普天間基地撤去移転問題、教科書検定問題など、多様な問題での社会運動は、1950年代の基地闘争、1960年代の復帰運動などに匹敵する大規模なものとなっていく。それらは、「沖縄的なもの」を肯定的に捉え、ウチナーンチュの誇りにかけるという性格をもっていく。それは、「ウチナーンチュ、ウシェーティナイピランドー（沖縄の人をないがしろにしていけない）」という翁長知事発言に象徴されるだろう。

そうした動向は、1990年代以降繰り返して開かれる「世界のウチナーンチュ大会」にも表れ、ウチナーンチュの誇りと結びついている。また、沖縄の自己決定権という発想もそれらとかかわりが深いといえよう。

9) そうしたなかで、Ⅲレベルについて見ると、明治以降日本国家が独占状態にあったが、戦後27年間は米軍が掌握し、「復帰」前後から米日両政府がからみあう構図になり、さらにそのからみあいのなかに、沖縄県庁に代表される沖縄自身が当事者・統治者として分け入ろうとする動きが強まってくる。それらを見ると、Ⅲが複数化していくというべきか、Ⅲを絶対的なものとはとらえず相対化していく機運が高まっていく。日本かアメリカかという選択だけでなく、日本政府と沖縄県庁とを、上下関係ではなく並列した関係で捉えようとしていたり、あるいは、アジア・国連・世界といった多様な要素も入り込んでくる。沖縄の自治体代表者などが直接米政府に交渉に出かけるなどはその例だろう。

連載「沖縄的なもの」

1. 「沖縄的なもの」を表現する言葉

2015年09月07日

沖縄、そして「沖縄らしい」「沖縄独自」「沖縄的なもの」といったことへの関心が高まり、それらの言葉が日常的に話され、目にする。だが、それらには多様なものがあり、多様なレベルのものがある。

それらの特性を明らかにしつつ、沖縄・「沖縄的なもの」をどうしていくかについての提案につなげる作業に2013年ごろから取り組んでいる。この作業を2017年ごろまで続け、2018年にはまとまったものとした。

主として歴史的検討を踏まえるので、グスク時代、近世、明治期、戦前期、戦後期、「復帰」後といったように、時代区分での検討が多いが、それにとどまらず、音楽芸能と教育とか、特定個人や出来事に焦点化して論じることも予定している。

この作業の中間報告のような形で、このブログ連載をする。作業中の中間報告なので、これを機にさらに考えを深めたい。読者のコメントを期待している。

沖縄に焦点化した私の作業は、これまで「沖縄教育の反省と提案」(1983年明治図書)、「沖縄県の教育史」(1991年思文閣)、「沖縄おこし・人生おこしの教育」(2011年アクアコーラル企画)の三つに集約した。今回は、その四つ目の作業になりそうな気配だ。

「沖縄に関係のある言葉をあげてみなさい」といわれると、実にたくさんで多様な言葉がでてくる。

グルクン ヤンバルクイナ デイゴ チャンプルー サーターアンダーギー 沖縄そば(すば) ティーダ
ニライカナイ 南海 南島 サンゴ礁 エメラルドグリーン 空手 ガマ ハブ ユンタク 米軍基地 辺
野古 普天間 沖縄戦 グスク 紅型 芭蕉布 屋上タンク 赤土汚染 ニヘーデービル タンディガータ
ンディ ハイサイ・ハイタイ テーゲー 沖縄タイム チバリヨー

さらには、比嘉 金城 首里 山原 58号線 宮古島 安里屋ユンタ 壺屋焼 剛柔流といった固有名詞も出てくる。

単語一つではなく、説明付の言葉もある。青い海 台風銀座 命ど宝 艦砲ぬ食い残し マブイグミ などが思い浮かぶ。

以上のなかには、沖縄に限定されるわけではなく他の地域にも見られるものではあるが、沖縄がイメージされやすい言葉もある。

こうした言葉に、沖縄にかかわる何か、「沖縄的なもの」を思い浮かべ、それについて何かの思いとか印象とかを持つ人が多い。沖縄に住んでいる人、沖縄で生まれ育った人は言うまでもないが、沖縄になにかしらの関わりを持つ人、さらには、沖縄に関心を多少なりとも持つ人なら、そうだろう。

そして、それをきっかけに、思い・考え・感情を深めることもあろう。また、何人かで話すときに、そんなことが話題になることも多い。そして、それをきっかけにして、その言葉が指すものについての、さらには沖縄についての、なんらかの感情・考え・行動を呼び起こすことも多い。

そして、その言葉を話す人・聞く人によって、複雑さ微妙さが含まれ、論議の中でズレや対立を生むことさえある。たとえば「沖縄」を使うか「琉球」を使うかに強いこだわりを持つ人は多い。また地域性、ジェンダ

一性、世代性がからむことも多い。たとえば、「島尻」というか「南部」というか、あるいは「山原（ヤンバル）」というか「北部」というか、人によって、そこに込める気持ちが異なってくる。

こうした言葉も含んで、沖縄、そして「沖縄らしい」「沖縄独自」「沖縄的なもの」といったことについて考えていこう。

2. いろいろに語られる「沖縄的なもの」

2015年09月18日

こうしたことを語るとき、「沖縄らしい」「沖縄っぽい」「沖縄的」「沖縄独自」「沖縄アイデンティティ」などといった言葉に頻繁に出会う。ここでは、これらの言葉を「沖縄的なもの」という言葉で一括して述べていこう。

それらが意味することは、語り手によって、聞き手によって、話題によって、場によって、などの条件で様々である。たとえば、エイサーを目にした時、東京であれば、「沖縄らしい味が強く出ていますね」という言葉を耳にするものが、沖縄で演じられると、「沖縄らしいというより、他府県の人に好かれるタイプのものですね」などという言葉が出たりもする。

「沖縄的なもの」というとき、「沖縄以外のもの」とは異なるという意味を含む。だが、その「沖縄以外のもの」にはいろいろある。たとえば琉球舞踊で「他府県と異なる沖縄的なもの」があるというように、他府県と比べての表現がある。だが、琉球舞踊のなかで他府県にはないものが、アジアのどこかで見られることがある。その逆に、他のアジア地域にみられないが、他府県と共通するものを見ることもあろう。

となると、他地域との違いをもって、「沖縄的なもの」をいう場合には、どの地域と異なるのかを明瞭にしておく必要がある。と同時に、違いだけでなく、他地域との共通性があるものをどう表現するかという問題もある。

また、沖縄全域で一様であるというのではなく、沖縄内での相違性が強いものの場合に、「沖縄的なもの」をどう表現するか、という問題も生まれる。

言葉を例にとると、沖縄語というか、沖縄方言というか、ウチナーグチというか、シマクトゥバというか、それらのうちの用語を使用するかの違いは、語る人の立場・主張だけでなく、語られる条件・文脈からも生まれてくる。ウチナーグチという、自分たちの言葉は含まれないと感じ、シマクトゥバという言葉を使用したいと思う先島の人がいよう。「沖縄方言」というと、標準日本語より下位に置かれていると感じ、日本語と対等感覚を持たせるために、「沖縄語」を使用する人もいる。

沖縄料理にしても、そうだ。同じゴーヤチャンプルーという名の食べ物でも、自宅で食べるもの、那覇の市場で食べるもの、琉球宮廷料理をメインにする店で食べるもの、宮古で食べるもの、名古屋の「わしたーショップ」で食べるもの、ポリビアのコローニャ沖縄で食べるもの、それぞれに特性があり、どれが「沖縄的なもの」といえるのか、あるいはどこまでを「沖縄的なもの」の範囲内とみるかは、人さまざまだと聞いていいほどだ。

こうした複雑さへの対応が必要だ。「沖縄的なもの」で人気が高い「かりゆしウェア」には多種のものがあ

というものにした、ということが報道されたことがある。

この例のように、定義に工夫と洗練さが求められよう。そしていったん定義されたものでも、状況に応じて定義自体を変えていくことが多い。

3. 「沖縄的なもの」という表現の多様性

2015年10月02日

「沖縄的なもの」とその関連表現には、どのようなものがあるのだろうか。それらは、実に多様多彩であるだけに、分類整理はなかなか難しい。そこでかりに次のようなことをしてみた。

1) 沖縄について、肯定的ないしは否定的に語ろうという価値評価色が濃いものだ。肯定的に語る時は、「沖縄的なもの」に誇りを感じ、尊重し促進しようという意味合いで使われることが多い。反対に否定的に語る時には、「沖縄的なもの」に嫌悪を感じ、それを消去するか、あるいはそこから脱出する意味合いで使われることが多い。

2) 「沖縄的なもの」に直接かかわる当事者が語る時と、外側から評価して語る時とがある。

3) 「沖縄的な」具体物を指して使う時と、ふるまい方・やり方などを指して使う時がある。無論、両者の区別がしにくいものもある。

以下のものは、それらのどれに該当するのだろうか。

ウチナージラー 沖縄っぽい顔つき

亜熱帯沖縄らしく明るい雰囲気

ゴーヤは、沖縄らしい野菜といえるだろうか

あのおおらかな（アラッパー）なやり方は沖縄らしい

過去問練習を通して、学力テスト全国最下位からの脱出を図ろうとするのは、沖縄らしい

「物食いしど我が御主」という根性は、沖縄らしいといえなくもない

沖縄は「ゆすり たかり」だという、アメリカ沖縄総領事発言が物議をかもした

いずれも「沖縄的なもの」に関わる発言だが、実に多様だ。このなかの「あのおおらかな（アラッパー）なやり方は沖縄らしい」を例にして言うと、1) については、否定と肯定が入り混じって併存していそう。2) は外側ともいえそうだが、内側の人と言う場合もある。3) はふるまい方だろう。

このように、対照的なものが入り混じることが多い。それだけに、「沖縄的なもの」についての発言を掘り下げていくと、興味深いことに出会うことが多く、そのこと自体が「沖縄研究」の題材になりそう。

4. 「沖縄的なもの」が語られる時・場

2015年10月16日

では、「沖縄的なもの」という言葉が使われるのは、どんな時と場だろうか。

ここで、回り道をして、私の個人体験を振り返る。

岐阜県の農村で生まれ、中学高校時代を名古屋で送り、大学・大学院を東京で送り、1972年～1990年に仕事で沖縄生活をした。そして、1990年～2003年の愛知での仕事生活。2004年からの沖縄第二次生活。

こんな私の生活歴のなかで、「岐阜的なもの」を意識したのは、名古屋に出てからである。岐阜と名古屋とは30キロぐらいの距離だが、言葉の違いを感じた。私は「岐阜から出る」という感覚であったためか、岐阜的なものが薄らいでいった。多少は消していこうとする意識はあったが、「岐阜」を消すというよりは、「田舎」「田舎者である」と見なされることを消したいという気持ちだった。時に、「岐阜の山猿」「田舎者」といった蔑称に出会うが、多くはない。

「愛知的なもの」を意識した一つは教育で、1960年代前半の当時から「愛知の管理主義」といわれたことにかかわるもので、実感的なものだ。その経験が、私が教育という進路選択をする一因になった。

自分自身が「愛知的なもの」を背負うとか、自分の中に「愛知的なもの」があるとかはなかったし、他からそうした指摘を受けたこともなかった。

こうして、「岐阜的なもの」「愛知的なもの」を消して、ないしは身に着けずに、東京に出る。東京でも「東京的なもの」を身に着けたと意識したことはなかった。東京を意識するとすれば、「全国を中心としての東京」だった。そして、日常使う言葉でいうと、標準語を身に着けたというよりも、居住地変更を繰り返す中で、「地域性無し」の言葉になっていった。

こうして、「地域性」を薄め欠落させていき、それだけに逆に地域性へのあこがれのようなものが生じ、職を地方教員養成大学に求める気持ちが芽生えてきた。そこに飛び込んできたのが、結婚をきっかけにした沖縄就職沖縄生活であった。そして、沖縄移住して以降、沖縄という「地域性」を衝撃的に感じ、考えるようになる。

こうした私自身の体験を振り返って、岐阜・愛知・東京と比べてみた時、沖縄においてだけが、強烈に「沖縄的なもの」といった問題に取り囲まれ、それに適応しつつ、時には絡み合い、格闘しながら生きることになった。そうした人々が、私だけでなく、むしろごく当たり前に存在しているということが、私にとってはさらに衝撃であった。

そうした場は、世界を見渡すと、いろいろとある。私が少しだけ知っている例をあげると、アイヌの人々。太平洋の島々の人々。フィンランドの人々、そしてフィンランドの中のオウランドの人々。ネパールのなかのいろいろな人々、カナダの先住民族の方々。

それらには、他地域との関係が、ある時期に劇的に変化させられた地域が多い。その変化は、たいていは侵略的支配的に、その地域にかかわる勢力が現れたことで引き出され、その地域と居住者のアイデンティティが問われる事態が作られてきたのだ。

もともと、その地域の居住者に、共通の地域観念とかアイデンティティがあったとは限らない。その地域の中にも多様な人々がいたが、外部からの支配者が現れることで、共通の地域観念・アイデンティティが生まれ強められることが結構ある。

そして、外部からの支配者は、国家というものを突き付けることが多い。とくに、ここ200年足らずの時期には、国民国家という観念が広がり、また帝国主義として、地球上の地域を植民地として奪い合い分割する歴史の中で、地域の居住者が自らの地域の主導権を取れないことが多発した。沖縄もこうした地域の一つだ。

5. 「沖縄」という用語と「琉球」という用語 その1

2015年10月28日

「沖縄的なもの」と並んで、「琉球的なもの」という用語も使われる。両者の語源について、ここで検討することはしない。ここでは、各々の使われ方の歴史、各用語に込められたことについて、少しだけ見ておこう。まず、「琉球」だが、14～19世紀には、次の引用文が示すように、「沖縄」用語より頻繁に使われた。まずは、中国との関係で使用されはじめ、琉球王国と密接な結びつきのなかで使われてきた。

「沖縄の島々では十四世紀から政治的統一にむけた抗争が激しくなっており、その動きは宣徳四（一四二九）年の統一王国（琉球王国）の成立によってひとまず終止符が打たれる。王国の支配は宮古・八重山のみではなく、奄美群島（現在は鹿児島県の一部）にまでおよぶようになり、沖縄本島とその周辺島嶼、先島そして奄美のすべての島々を総括できる名称、すなわち琉球国王が支配するテリトリー一名を必要としていた。そのさいに統治者は自前の造語を用意せず、中国人が命名した島嶼群の名をそのまま踏襲して「琉球」とよぶようになった。中国人のいう「琉球」は当の「琉球」の統治者によって再定義され、みずからの支配する土地の総称となったのである。

その結果、「琉球」という地域名は、沖縄本島とその周辺島嶼（狭義の沖縄）に先島（宮古・八重山）、それに奄美を含んでいた。奄美地域は万暦三十七（一六〇九）年に王国が薩摩軍にやぶれたため、王国の範囲から割譲され薩摩の直轄領となり今日におよんでいるが、「琉球」という用語を使う場合、そのなかには当然のことながら奄美が含まれている。奄美は行政的には薩摩・鹿児島県の一部だが、歴史的・文化的に沖縄と密接な関係をもっており、今でもなお沖縄県に対する強い親近感をいっている。ウチナーンチュ（沖縄人）という自己意識がとなえられるとき、その意識のなかに奄美の存在は念頭におかれていない。このことから、ウチナーンチュ意識は新しいものであり、沖縄そのものの歴史的な展開過程から浮上した自己意識であることがわかる。」安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭「沖縄県の歴史第2版」山川出版社2004年p10-11

こうした歴史をもつ「琉球」という用語は、19世紀後半以降日本との結びつきを弱める意味で使われることもあった。たとえば、米軍統治下では、「沖縄」用語使用を避け、意図的に「琉球」用語を使用することが多かった。琉球政府とか琉球大学がその典型である。

また、「琉球」用語は琉球王国という国・国家レベルのアプローチと結びついてきた歴史もあり、国家論として展開したい人がよく使う。琉球独立論などもその例であろう。

沖縄用語が広く使用されるのは、19世紀後半以降であり、日本との関係のなかで使われたことが多かった。たとえば明治政府＝沖縄県庁による統治の展開のなかでは、「琉球」用語を排して「沖縄」用語使用が基本とされた。たとえば、沖縄教育会の『琉球教育』に1895～1897年に長期連載された、新田義尊「沖縄は沖縄なり琉球にあらず」では、日本とのかかわりが深いことを強調し、「琉球」用語を使わず「沖縄」用語の使用を説く。

また、戦後の「祖国復帰運動」のなかでは、米軍が頻用する琉球という用語ではなく、沖縄という用語を意図的に使用することが圧倒的に多かった。

「沖縄」用語の大きな問題は、次の引用文が書くように、先島や奄美を含まないことである。無論、明治期

以降になると、先島でも「沖縄」用語が使用されるが、沖縄県庁など行政との関係の臭いがする用法であった。

「沖縄県内に存在する先島・大東のことを念頭におくとき、ウチナーンチュ（沖縄人）といういい方は、沖縄県民というレベルでは了解できたとしても、地域のアイデンティティにからむ問題としてはただちに納得できない、という事情が横たわっているのである。沖縄本島中心の呼称ではないか、との疑念が提示されることになる。」前掲書 p 6

6. 「沖縄」という用語と「琉球」という用語 その2

2015年11月06日

現在では、琉球と沖縄との両者とも使用されるが、使用する人による違いだけでなく、使用される場の違いが存在している。日常的使用は、沖縄の方が多く、琉球用語は改まった使用になることが多い。といっても、琉球音楽、琉球舞踊など日常生活に溶け込んだ琉球用語の使用もある。

ところで、琉球にせよ沖縄にせよ、地域を指す言葉というよりも、中国や日本という用語と似て、国家や民族を指す言葉として使われることがある。それらには、帝国・王国・国民国家・民族自決・民族統一といったように多様さがある。そのために、政治レベルでは、琉球ないしは沖縄が、日本に属するのか、中国に属するのか、はたまた独立民族として独立国家をつくるのか、という問題設定がなされることもある。

そのなかで、「琉球」用語が国家論と結びつきやすいのと対照的に、国家論から距離を取りたい人が「沖縄」用語を使うこともある。

だが、琉球にせよ沖縄にせよ、国家・民族レベルで思考しなければならないというものでもない。実際、そうではなく、地域を指す用語として使用されることが多いのも事実である。

ここでよく使われる言葉の例として、沖縄料理と琉球料理という言葉の多様な使い方をみてみよう。

2015年6月29日の沖縄タイムスに「沖縄料理 調理本の継承を」という見出しの記事がある。それは、那覇市文化協会文芸部会主催の「郷土料理・琉球料理の世界」と題した座談会の記事である。記事を何カ所か抜き書きしよう。

「琉球料理の定義について尚さんは『冊封使歓待などに振る舞う宮廷料理と、地域に残る庶民料理を琉球料理とひとくくりにするのは無理がある』と指摘」

「松本さんは琉球料理を宮廷の流れをくむ料理と庶民料理に大別した上で『戦後普及した缶詰めなど、外来の食材を取り入れた料理をうちなー料理と呼ぶ』と持論を展開した」

「調理法について西大さんは『(中略) 和食との共通点ありつつ、(中略) 和食・中華とも違う沖縄独自の文化』と話し」

以上には、「沖縄と琉球」という用語をめぐって、いくつかのことが表れている。

- 1) これらの料理を総称する用語として、「沖縄料理」「琉球料理」の双方が使われていること。「郷土料理」という表現も登場する。
- 2) これらの料理を区分する用語として、宮廷料理と庶民料理がでてくるが、そのなかの庶民料理のなかの特定のものを「うちなー料理」と呼ぶという用法があること
- 3) 和食・中華と対比して「沖縄独自の文化」という用例が登場すること。

以上とは別に、次のような用法もある。著者の母で琉球料理の研究家が語ったこととして、

「琉球料理と沖縄料理は、ちょっと捉えるニュアンスが違います。一般的な郷土・家庭料理を指すのが『沖縄料理』。『琉球料理』は、琉球王朝時代の宮廷料理を示します。」(安田未知子『沖縄ハーブ健康法』WAVE出版2015年p95というのがある。

以上は、今日の時代にあって、「琉球」「沖縄」さらに「ウチナー」という用語がもつニュアンスの微妙な違いを反映しているようだ。

おおまかにいうと、琉球という用語には、宮廷料理につながるような高尚なもので、あらたまったもので、時には自分とは遠いものを感じる人がいよう。沖縄、とくにウチナーには、身近な日常的なものを感じる人が多そうだ。

このあとの論では、以上のことを踏まえつつも、現在の慣習的使用法に従うことになる。

7. 「沖縄的なもの」が、肯定的に受け止められる時、否定的に受け止められる時

2015年11月18日

「沖縄的なもの」については、正否、是非、良し悪し、相性、好き嫌いなどの価値判断嗜好選択を伴うものが多い。そうしたものが多なのが「沖縄的」特性だといえるかもしれない。

とはいっても、「○○という植物が生育するのは、亜熱帯の沖縄らしい」とか、「運輸技術的理由により、○○施策がなされるのは、沖縄的だ」とかいうように、価値中立的な表現もある。

なかには、価値判断を含んでいるにもかかわらず、価値中立的な装いをするものもある。たとえば、「沖縄は遠い」という表現は、ただ「遠い」という距離を示すだけとは限らない。東京などの「中心的なものから遠い」ということで、否定的なニュアンスを伴うこともある。かつてよく目にした「沖縄は僻遠の地だ」という表現には、否定的なニュアンスが一層鮮明だ。

では、肯定的な意味を含んで使われる表現の例を並べよう。

- ・民芸運動が、「沖縄的な○○」の継承を力説した
- ・米軍統治下、「琉球独自の文化」の尊重が強調された
- ・観光のなかで「沖縄の自然・文化・人々が素晴らしい」というイメージが強められた
- ・近年、「沖縄独自」「琉球独自」の音楽芸能工芸の素晴らしさが強調され、人気が高まっている。

これらは、「沖縄的なもの」を守り発展させようという促進的な動きを作りだそうとする。

次に、否定的な意味で使われた表現の例を並べよう。

- ・ウチナータイムといわれるほど、時間にルーズだ
- ・台風をはじめとする自然の猛威に対して、ただひたす「耐えて過ぎるのを待つ」というのは、沖縄らしい。
- ・標準語が沖縄なまりになって、「正しい」使い方が出来ない人が多い
- ・事大主義的根性がしみついた人が多い。それを「ゆすり」「たかり」と評した外国人がいるほどだ

これらは、「沖縄的なもの」を克服する、あるいはそこから脱出する動きを作りだそうとする。

肯定的にせよ否定的にせよ、「沖縄的なもの」が話題になる時、なぜ「沖縄的なもの」が語られるのか、その文脈を検討する必要がある。また、肯定的なものを積極的に打ち出していこうとする場合、否定的なものを抑制克服しようとする時、いずれにせよ、沖縄的なものに焦点化し、それにこだわって、何かに取り組もうとする時であろう。

そして、注目すべきこととして、肯定的否定的と相反するものを、対にして語られることが多いことがある。これを「沖縄独自―沖縄脱出」構図として、以後の本論で繰り返し検討していくことにしよう。そして、この対が、二者択一的になりがちであること、時には、同じ論者が反転させて主張することさえあることにも注目しなくてはならない。

8. 「沖縄的なもの」を創りだし推進するものたち 「沖縄的なもの」の生成消滅

2015年11月28日

「沖縄的なもの」を守り発展させ、創りだそうとするにせよ、抑制消去克服し、そこから脱け出そうようとするにせよ、社会の中のどういう部分が主張し、推進しようとするのかが問われる。それが、沖縄外にあるもの、沖縄外から沖縄にやってくることもある。

それらは、人物であることもあれば、システムや権力であることもある。また、特定の限定された「沖縄的なもの」が対象になることもあれば、沖縄各地に見られる特定できないものが対象になったり、島ぐるみというような広がりを持ったりすることもある。

主張者・指示命令者・指導者などと、実施実践するものが一致するときもあれば、両者が異なる場合もある。近世を例にとると、島津の支配権力、琉球王府のシステム、士族（上層、下層）、地方役人、地方農民、老若男女といった多様なアクターのどの部分が、指示命令・主張・指導し、どの部分が実践実施するのかに踏み込んで考察する必要がある。

「方言矯正・共通語強制」を例にとると、指示命令・「指導」するシステムと主導者たちと、指示命令・「指導」される一般人や子どもとは、別なのだ。そして、「上」からの指示命令にもとづいて（あるいは「自発的に」）、現場で推進する教員たちに大きな注目を向けることが必要だ。

こうした推進者たちについては、後に詳述することになる。

なかには、意図的計画的なものではなく、当事者たちがそれほど意識せずにできあがってくる「沖縄的なもの」があり、それを外部の人が「沖縄的なもの」だと評価することで、当事者たちも「沖縄的」なのだ、と認識するといったものがあるが、それが結構多い。

「沖縄的なもの」は、いつかどこかで生成し、いつかは消滅するものだ。そして、生成と消滅の間に多様な変化があることが多い。同じものが首尾一貫して存在してきたわけではないし、現在ある「沖縄的なもの」が永遠に続くというものでもない。

たとえば、「方言矯正・共通語強制」が徹底し、「方言衰退」が「消滅」の傾向さえ見せてくる近年になって、多様な言語を尊重することがいわれ、「シマクトゥバ」を重視する動きが広がり始めている。

また、変化・消滅が、転形や統合という形でなされることもある。さらに、外から入ってきたものを変形して、「沖縄的なもの」が生成されることもある。中国などから入ってきたものを、沖縄で独自の転化発展を遂げて出来上がったサンシンなどもそうだろう。

「沖縄的なもの」を全面肯定したり、あるいは全面否定したりするよりも、あるいは絶対化固定化するのではなく、生成転化消滅という流れの中で見ていくことが重要だ。無論、不当に否定されてきたものを明らかにし、それを正當に評価し、必要があれば復活保存させることは重要だろう。

9. 連載のこれまでと今後の予定

2015年12月05日

この連載は、「沖縄的なもの」にかかわる論を、多様な面に焦点をあてつつ、連ねていくものだが、そのなかで、一般的で概括的なものではなく、多様なありようがあること、歴史的地理的社会的な構造がそれらに反映していること、などを明らかにしていきたい。

そのなかで、「沖縄的なもの」にかかわって表出される沖縄が直面してきた、あるいは直面している課題の解明につなげていきたい。それは、「沖縄的なもの」のなかで、どの部分が強められ、どの部分が弱められたか、あるいはその生成変化消滅転化弱強化強化が、どのようになされたのかをも解明することにつながる。

これらのなかで、「沖縄的なもの」を強めようとする、いわば「沖縄独自」追求型、それと対照的な「沖縄的なもの」を弱め、それから脱出しようとする、いわば「沖縄脱出」追求型、この両者のせめぎあい、絡み合いが、歴史的にも、現在の沖縄においても、多様な面で展開していることを明らかにしたい。そのこと自体が、「沖縄的な」テーマとして注目される。

その「沖縄的な」テーマを、追求していきたい。これらをとおして、「沖縄的なもの」をめぐる沖縄が抱える課題と、課題への対し方についての示唆を得ることにつながることを期したい。

ここしばらくは、<「沖縄」意識・「沖縄的なもの」の成立>に焦点をあてて、次のような項目で書く予定だ。

境界の意識

境界の内と外

沖縄外部と沖縄内部との関係に着目する

「もともと沖縄にあったもの」と決め込まない

多様なものの「チャンプルー」のなかで

沖縄外から見た「沖縄的なもの」への眼

同じ「沖縄的なもの」でも、良し悪しの価値判断が分かれる

「伝統」＝「沖縄独自」定型の形成

10. 境界の意識

2015年12月19日

「沖縄的なもの」は、いつどのようにして成立するのだろうか。それは、沖縄地域に在住する人々のなかに、「沖縄」意識が成立することとつながっている。

「沖縄的なもの」と「沖縄的でないもの」とを区別することには、「沖縄内」と「沖縄外」との区別が結び

つくことが多い。それは、内と外とを区別する境界を意識するということにもつながる。

内と外とを分ける境界には、いろいろある。

長く続いたシマ（村落共同体）で生活する人々にとっては、他シマとの境界が区別の最大のものになる。だから、〇〇というシマの人としてのアイデンティティが強く、ウチナーンチュとしてのアイデンティティが出てくることは稀に近かっただろう。離島に暮らす人には、共同体としてのシマと、暮らしている島のアイデンティティは強いが、ウチナーンチュとしてのアイデンティティを持つことは稀に近かっただろう。たとえば、今でも多くの先島の人にとっては、沖縄とは沖縄本島のことを指すのだ。

琉球王国時代に、首里那覇泊に暮らす士族にとっては、琉球王国とのかかわりで、王国の版図とその外との間に敷かれる境界が重要であり、「琉球」を意識することが多かった。とくに中国とのかかわり日本とのかかわりでそうであった。首里に住んでいたとしても、首里人としての意識は、地方農村に暮らす農民、そして那覇泊の士族との関係で意識することはあるだろうが、琉球王国の意識に付随するものだったろう。地方農村に下った屋取士族にとっては、屋取集落と隣接集落との境界と同時に、首里那覇泊と屋取先との間に生まれる境界を意識しつつ、両者のからみのなかでアイデンティティを形成したといえよう。

このように、王国時代の農民と士族とでは、琉球（沖縄）についての意識は、大きく異なっていたのである。

実は、こうした境界を一つしか持たないということは少なく、複数のものを持ち、それらを使い分けてきたのが実際であろう。たとえば、近世農民を例にあげると、他シマとの境界、他間切との境界、北部中部南部という地域の境界、首里那覇など都市地域との境界などが併存していた。また、中国や日本との境界を意識することも、全くないというわけではなかっただろう。

それらの境界に対応して、〇〇意識が成立し、アイデンティティが作られる。だから、複数の境界をもつことは複数のアイデンティティが生まれることになる。私が住んでいる南城市玉城字中山を例にしてみよう。

中山ンチュ 玉城ンチュ 南城市民 島尻（南部）の人 ウチナーンチュ（沖縄県民）

日本人（日本国民） アジア人 地球市民

ここまでの例は、同心円構図で描いてみたが、同心円構図で描くことに馴らされてきたのかもしれない。産業、職業、趣味嗜好、親族関係などによるつながりで描くなど、同心円構図でないものの方が多いだろう。

いずれにせよ、いろいろな境界には、意識の強度の違いがある。それらのなかで、沖縄意識琉球意識の場合は、中国や日本など海外地域との境界を意識する際に生じてくる。近世士族の場合には、それが成立していたが、近世農民においては稀である。薩摩役人等の来訪、あるいは台風などによる交易船などの漂着の場合に限られる。地方役人層においては、奉公という形で首里の御殿・殿内に滞在する際には、主人家族を通して、それを意識することがあったろう。

こうした点を見ると、近世において成立していた琉球意識沖縄意識は士族に限定されがちであったと言えるよう。

1.1. 境界意識を強めるもの弱めるもの

2015年12月29日

こうした境界についての意識は、共通するものを持つ人たちとともに作る内の意識として生まれるのだが、外での体験、あるいは外との出会い交流体験の有無濃淡が重要な意味をもつ。ずっと内にだけいて、外の出会いも少ない人は、そうした意識を持ちにくいし、逆に内と外とを出入りすることが多い人は、持ちやすい。

それらの体験には、いろいろなものがある。並べてみよう。

戦争 外交交渉 商業取引(貿易) 運送 漁業 移民出稼ぎ 進学就職 来訪者との接触(漂流者との対応も含む) 来訪者や支配者が行う勧誘や強制などの住民への関与・介入

個人がかかわる人間関係のなかでのリーダー的位置にある人の影響も大きい。それには、地域リーダー、政治リーダー、宗教的リーダーなど多様である。特に、個人の生育過程のなかでの指導・教育的役割を果たす人の役割は大きい。親や教育関係者がそうである。

そして、「沖縄」にしる「琉球」にしる、それらは国家的な枠組みのなかでの把握である性格を色濃く持っている。琉球王国にしる大日本帝国にしる米軍政府にしる日本国にしる、そうした「国家」とのかかわりで、沖縄・琉球を意識することが多いことに注目しなくてはならない。「国家」によって意識させられたといってもいい要素がかなり高いだろう。

もう一つ、自然環境的な要因もある。島を隔てる地理的要因、気候の差異などもそうだろう。さらに海流などがかわるかもしれない。

こうした境界の意識化の一方で、境界を弱めたり取り外したりする動向をも視野に入れる必要がある。

インターネットなどの通信手段、船・航空機などの移動手段、移住などもそうした要因になることがある。婚姻などがそうであることもある。専門用語でいう通婚圏の拡大といわれるものだ。

また、差異を意識していたものが、共通性を意識することで、境界が弱まることもある。

これらの諸要素のからまり具合で、境界意識が強まったり弱まったりする。注目したいのは、歴史上、戦争・軍事をはじめとする国家間緊張によって、強まることがしばしばだったことである。

1 2. 沖縄外部と沖縄内部との関係に着目する

2016年01月11日

沖縄における支配の特質の一つは、沖縄内部の支配被支配関係だけでなく、薩摩支配や天皇制国家による支配、さらには米軍による支配、そして日本政府による支配という外部勢力による沖縄支配の状況が長く存在してきたことにある。

※ なお、日本政府による支配を外部勢力による支配とはとらえない見方が存在することを注記しておこう。

そこで、外部支配勢力との関係で沖縄内部のものを把握する必要がある。その際、外部のものが進んでいて沖縄のものが遅れているととらえ、外部支配勢力の主導のもとで行われる文化・教育も含めた様々な活動が、支配という性格をもって展開されたことを見ないで、それらを単純に「近代化」「啓蒙」と把握することが広くみられることを問題にしないわけにはいかない。

仮に沖縄が日本の部分であるという捉え方をするなら、次のような視点を持つ必要がある。

沖縄は日本のなかで、地理・気候・政治・文化などさまざまな面でユニークな位置を占めているが、こうした把握はこのユニークさを否定的なものにとらえ、「本土」においつけ、「大和風」になれと主張するのである。そこでは、沖縄方言やユニークな沖縄史の事実は否定的なものとして排除された。なおその逆に、戦後の米軍支配下でみられたように、沖縄のユニークさを日本全体から切断して主張する動きがみられたことにも留意しなくてはならない。

重要なことは、日本をどのようにつくっていくのかということと、沖縄をどのようにつくっていくのかということとを関連づけて把握するなかで、沖縄のユニークさを生かしていくことである。それは、日本というものは単一のものではなく、日本のなかの各地域でのユニークな動向の総合として形成されていくという視点を重視するものである。つまりユニークさの排除抹消ではなく、ユニークなものに出会いのなかで互いを高めつつ、ユニークさのハーモニーとして日本を形成していくということである。

次に、沖縄を対外比較でみるために、沖縄を一括して把握し、沖縄の内部的展開を見落とす誤りについても指摘しておく必要がある。沖縄支配をはじめとする対外関係の問題は、沖縄内部の諸関係を媒介にして沖縄内部に入ってくるのであり、それらが沖縄内部のどのような部分と結びあって展開されたのかを問う必要がある。たとえば、明治期における教育を分析するときに、明治国家の支配政策が沖縄内部のどのような部分と結びあって、かつどのような部分を育てることによって、あるいはどのような部分を抑えることによって展開されたのか、を検討する必要がある。

沖縄を一括してみることはまた、教育についていうと、沖縄における教育の自主的民主的発展をになうべき主体形成への問いがあいまいになるという問題をはらむ。こうしたことの弱さが、沖縄における民衆の自己教育の研究を未開拓状況に置く一因にしてきたといえよう。

本論は、以上のような把握にくみしないだけでなく、そのような把握がなぜ成立してきたのかを解明することをも課題としつつ、沖縄外部と沖縄内部との関係に留意して叙述をすすめていく。

※上記は、浅野誠『沖縄県の教育史』思文閣 1991年のP7～9に加筆したものである

上記のことは、国単位の問題だけでなく、沖縄がつながるアジア世界・グローバルな世界との関係でもいいうることである。

それらにかかわって、外間守善の次の二つの指摘に注目したい。

「私は、沖縄以外の地域に使われている語彙との類似性に問題を結びつけようとする考え方を退け、沖縄の内側から考えることにしていきたい。沖縄独自の変化や、変化の法則性が事実として存在しているからである。これは私が、おもろ語を中心にした沖縄古語を考えるときの基本的な姿勢でもある。そしてまた、言語が生成発展していくことの背景にある歴史社会の存在も、私の視野には大きな意味をもって迫ってくるし、そのことを抜きにして、沖縄語の語源を考えることはとうていできない。」外間守善「沖縄の言葉と歴史」(中公文庫2000年)P187

「瑞鳥としての鳳凰崇拜という信仰が、いつごろ沖縄に入ってきたのかは定かでないが、首里王府を中心にした神女組織の中で、職制化されたノロの持つ扇子に図案化されている(久高ノロのほか奄美の西仲勝部落大和浜のノロも同じ扇子を保管している)ことや、円覚寺にあった彫刻その他の図柄など、首里王府を中心にして作られる文化的なものに象徴化されていることをみると、おそらく中国と交流の深い首里王府)を通じて島々に伝播していったものであらうと思われる。中国を中心にした周辺地域で鳳凰崇拜の信仰が普遍しているさまをみると、沖縄の固有信仰として育っていたものとは考えにくい。」同前P229

「〇〇は、本質的に～～だ」とか「～～は、もともとから〇〇だ」といった見方を、学術用語では「本質主義」という。その用語を使って言うと、「もともと沖縄にあったもの」という表現に見られるような本質主義的な「沖縄的なもの」があるわけではない。すべて歴史的に形成されてきたものであり、いまなお、さらに今後も形成・創造されていくものである。

「無意識に」であろうが、本質主義的に沖縄特性を語ろうとすることにしばしば出会うだけに、こうした視点を持つことを特に重視したい。無論、自然のように、数千年単位数万年単位で変化するものについて、数百年単位以内ならば、「沖縄はもともと亜熱帯気候だ」などと語ることはできよう。しかし、変容が激しい文化について、その特性を固定的に語ることは留意が必要である。

と同時に、その時代に存在している「沖縄的なもの」を、否定すべきものとして抑圧排除しようとする動きが歴史的に存在してきたし、今も、さらに今後も出てくるだろう。沖縄外からの支配者がそうしたことをするだけでなく、それに呼応する沖縄内リーダーたちにも、それらを促進する動きが見られてきた。昭和戦前期における改姓運動はその例だろう。

そして、シマクトツバ、ウチナーグチに見られるように、「沖縄的なもの」を継承形成する動きと、抑圧排除しようとする動きとが、対抗関係をもって展開されることが多い。と同時に、相反するかに見える両者を同一の社会集団や個人が並存させることも多い。そして、その両者間のズレ・矛盾が意識的無意識的に現れ出ることもある。それだけでなく、両者間の葛藤を意識せず、共存させたまま、使い分けることも見られる。

こうした変化・並存といった視点で検討をすすめることが不可欠なのである。それは次のような流れで捉えるということでもある。

生成（創出 移入 おしつけ）→ 変化（変更 強制 抑圧）→ 消滅（転化、融合 統合）

14. 多様なものの「チャンプルー」のなかで

2016年01月31日

「沖縄的なもの」の追求は、多様な交流・協同・せめぎ合いのなかで、多様なものをチャンプルーとして継承創造するという形でなされることが多かった。地理的に言って、沖縄とつながりのある世界、つまり日本・朝鮮・中国・台湾・太平洋の島々・東南アジア、さらには南北アメリカなどとのつながりの中で展開されてきたものである。

このことを踏まえて、次の諸点に留意したい。

- 1) チャンプルーの結果として生まれたものだけでなく、チャンプルーを許容促進し、チャンプルーしていく過程そのものが「沖縄的」だといえよう。
- 2) この交流・協同・せめぎあいは、沖縄外との関係を通して影響を受ける形で展開するだけでなく、異なる文化を持つ人が沖縄移住するという形で展開した。
- 3) それは、独自のものをつくるというだけでなく、独自のアプローチを生み出すということでもあった。生み出された独自のアプローチが、独自のものを創り出したという様相も濃い。また、多様な文化交流協同の場として沖縄が存在したともいえる。
- 4) 沖縄外との交流協同のなかでは、「沖縄的なもの」の（再）発見・創造があるとともに、沖縄内外で、新たなものを創造する動きが作りだされたことにも注目する必要がある。それは、必ずしも「沖縄的なもの」に

こだわらず、ハイブリッドなもの、さらに諸要素を融合させたものとして登場することさえある。

5) こうした「沖縄的なもの」を作りだし変化させていった人はだれだろうか。支配者統治者、あるいはリーダー的役割をとった知識人文化人が重要な役割を担ったことは言うまでもないが、生活レベルでの人々の営みが、新たなものを創作してきた面も強く存在する。

そうした際に、「沖縄的なもの」、あるいは、「沖縄も含めての日本的なもの」にしても、どのような流れで生み出されていったのか、に注目しないわけにはいかない。

私自身、1972年に沖縄生活を始めて以降、主として教育分野のなかで、この問題を考えてきた。そのなかで、こんなことも主張してきた。

「本土の教育と切断して沖縄の教育を検討せよと主張しているのではない。(中略)むしろ、沖縄の教育の課題を明確にすることを媒介にして、日本全体の教育の課題を鮮明にするというすじみちを考える必要も存在するのである。つまり、中央→地方のすじみちだけでなく、地方→中央のすじみちをもみ見る必要があるのである。」「沖縄教育の提案と反省」(明治図書1983年刊) P13

15. (続) 多様なものの「チャンプルー」のなかで

2016年02月09日

ところで、人類学民族学民俗学の分野の研究は、「沖縄的なもの」を考えるうえで多大の示唆を与える。しかし、研究のなかには、沖縄のさまざまな習俗が長く続く固定的な習俗であるかのように述べる傾向が強くみられるものがあり、そこでの指摘が沖縄のなかで歴史的にどのように形成されてきたのか、また海外との文化交流のなかでどのように位置づくのかなどが読みとりにくいものが多かった。そこで、以前はそれらが述べていることを私なりの解釈で再構成させていただくことがしばしばであった。

そうした点にかかわって、この分野の研究者である渡邊欣雄さんが、以下のように述べている点には、共感できることが多い。

「類似しているあるいは類似するかに見える沖縄文化と中華文明とは、それぞれがその後大なる変化を遂げ、独自の価値を再生産してきた。沖縄からみて中華文明に由来するはずの文化は、むしろ沖縄の主体性において沖縄化し、すでに中華文明のものというより沖縄文化となっていたのである。」渡邊欣雄「沖縄文化の拡がりと変貌」2002年榕樹書林 p147

「これまで『沖縄文化の固有性』について語られてきたのは、主として大和文化との比較においてであった。しかし世界を見渡してみると、たとえばノロ(女祭司)が『沖縄にしかない存在』であり、その神事が『沖縄文化の固有性』を証明するものだとはいえない」同前 p133

「沖縄文化は、その構成要素がすべて外来文化に求められるような、そんな<つぎはぎ>だらけの文化なのではない。逆に近隣文化から輸入され、影響されたであろう文化は、みごとに<沖縄化>しているのではない。門中しかり、位牌しかり、風水しかり、ハーリーしかり、・・・」同前 p133

(綱引きにかかわって)「沖縄文化内部だけで沖縄文化を考える傾向を、わたくしは<土着主義>と呼んでいる。土着主義では、もはや、沖縄文化はわからないと思う。すでに沖縄文化の特徴は、このように世界に通じていることが分かっているからだ」同前 p104

(ハーリーにかかわって)「ハーリーは、沖縄の人びとの生活目的にそってアレンジされた、独自の行事だ

と理解すべきだ。」同前 p 97

「沖縄では、神郷からの神幸のためという理由が一般的で、目的は五穀豊饒や防疫のためであることが多い。競舟文化は、どここの文化の模倣だと考える必要はまったくない。文化を輸入しても、外来文化はその民族の生活体系のなかでアレンジされ、新たな文化に作り替えられてしまう。創造された文化の世界的類似性。それこそが人類文化の遺産として、最もすべき遺産なのだ。」同前 p 98

大変参考になる指摘がつかない。無論、これらの指摘に対して、同分野の研究者のなかにあっても異論があるだろうし、特定の文化の影響や外からの強力な支配の結果だというような批判説も存在しよう。

いずれにしても、世界的な共通性と文化影響・支配の存在、そして沖縄の独自の発展といったこと全体を視野に入れて、検討を深めていくことが必要であろう。単純に、どこかの文化の影響・支配の結果というだけで解釈することの危険性に対する強い警告的示唆を行っているといえよう。

人類学民族学民俗学の研究分野では、他にも同趣旨の指摘をしばしば目にするようになってきた。冒頭で述べたような歴史を無視したような研究は減少してきているようだ。

また、文学分野にかかわっての次の指摘も興味深い。

「朝鮮の古典文学作品である『洪吉童伝』の最後に描かれる「ユルド国」は、そのモデルが琉球であるという説があります。また金延漢「沖縄からの手紙」は、沖縄のパイナップル工場やサトウキビ農園に働きに来る韓国人女性が主人公となっています。あるいは沖縄の作家である又吉栄喜の作品「ギンネム屋敷」は、沖縄戦の際に朝鮮から連れて来られた朝鮮人が登場します。これらは朝鮮と沖縄が、何らかのつながりを持ってきたことを示しています。これらを、「日本文学」「沖縄文学」「朝鮮文学」に振り分けて論じるのではなく、それぞれに浸透しあう観点から語る。そこに「朝鮮文学」の面白さがあると思います。」呉世宗「朝鮮文学への招待」(石原昌英編『沖縄からの眼差し・沖縄への眼差し』2015年沖縄タイムス社) p 62

これらの提起は、沖縄の文化が沖縄内外の多様なからみあいのなかで生成してきたことだけでなく、沖縄内外の人々の創造活動によって、今後も多様なからみあいのなかで変化していくだろうことを示唆している。

16. 沖縄外から見た「沖縄的なもの」への眼 その1 2016年02月23日

沖縄外の眼から見ると、沖縄内に共通性つまりは「沖縄的なもの」を見やすいという面がある。内にいると、「当たり前」過ぎて、「日常的」過ぎて、あるいは他との違いを気づきにくくて、「沖縄的なもの」と意識しないことは多い。そうしたものを外からの指摘を受けて、内部の人が「沖縄的なもの」を意識することがある。また、それまで内にいた人が外に出て、沖縄を振り返って「沖縄的なもの」に気付くことも多い。

それらは、内意識を基盤にして、外からの眼を取り込み、内を育み変えるものといえよう。無論、外を基盤として、沖縄内を変える動きもある。それには、外部による支配という性格が濃い場合もあれば、沖縄の内部からの組み替え・創造に関与する形もある。

また、「沖縄的なもの」があれば、「沖縄的でないもの」があり、モノコトヒトが、「沖縄的」か「沖縄的でない」かが問われる時に、つまり二分論の問いが成立する時に「沖縄的なもの」という課題意識が成立する。

こうした二分論が成立しない時には、「沖縄的なもの」は登場しにくい。無論、外から見た人が「沖縄的」かどうかを意識し判断することがある。そのことが、内に居る人の「沖縄的なもの」への意識成立を触発することは多い。

歴史的にみると、長く「沖縄的なもの」が登場しないものが多い。今でこそ、多くのものにこの二分論が成立しているが、それは数百年とか数千年という歴史のスパンでみれば、ごく最近のことなのだ。

さらにまた、沖縄内から見た「沖縄的なもの」と、沖縄外から見た「沖縄的なもの」とは異なる。それは、「見る眼」だけでなく、「沖縄的なもの」への態度にもいいうる。「眼」と「態度」とは絡み合う。暖かく肯定的な「見る眼」は、暖かく肯定的な「態度」を促進する。当然、その逆がある。外の人が、沖縄に対する肯定的な「見る眼」や「態度」をもつことを、「沖縄ひいき」とか「沖縄病」ということも多い。

沖縄内と沖縄外との両者の違い・ズレが、多くの問題を提出する。と同時に、両者の交錯が、両者とも気づいていなかった新たなものを提出することも多い。

それは、同一人物内においてもいいうることだ。たとえば、沖縄内に生活し続けていた人が沖縄外で生活するようになり、沖縄外の多様な人と付き合い始めて、「沖縄的なもの」を見る眼・態度の中にあるズレを発見することはごくありふれた話だ。

たとえば、「飲み会」で、「食事をした後で飲もうとする」沖縄で見かけることの多い習慣、「飲んだ後で、食事をしようとする」沖縄外で見かけることの多い習慣との違いを発見し、ズレの調整を始める。そのなかで、「おなかに多少食べ物を入れておいた方が健康にはいいこと」、あるいは、「空腹でまずは一杯をやると美味しいこと」などを発見し、両者の良さを生かした「飲み会」が始まることもあるだろう。

その間に、相互の認識不足を発見しあうとともに、相互に新たな提案をして、新たな「文化」をつくることも起きうる。

17. 沖縄外から見た「沖縄的なもの」への眼 その2 2016年03月04日

沖縄住民が、「沖縄的なもの」を発見し意識化する契機については、例えば次のようなことが考えられる。

・外部の人々との出会い。そして協同・対抗などの展開

古琉球時代 東シナ海沿岸地域との交易や移住

近世 薩摩をはじめとする日本本土、中国

明治期 本土からの役人・教員・警察官など

戦争期 日本軍兵士

戦後 米軍関係者

「復帰」後 大量の一般本土人 観光客

・移住・出稼ぎ 兵士体験 本土就職

・中等教育・高等教育体験

・読書・メディア情報

これらの発見・意識化は、「沖縄的なもの」について、その独自性を強めるのか、解消・抹消の方向へいくのか、あるいは新たな創出へと向かうのか、などの分岐を生む。さらに、その過程で、「沖縄的なもの」にアイデンティティや誇りを感じていくのか、コンプレックスをもちアイデンティティ解消・忘却の方向へ向かう

のか、といった分岐をも生み出してきた。

ところで、沖縄内の人と沖縄外の人との間に生まれるズレ・違いが対立となり、相手の主張を抑え込もうとする動きにまで展開する事例が、歴史上たびたび存在する。1939年の方言論争は、この違い・ズレを鋭く提出し、多くの人をまきこんでの論争以上のものになった例だろう。

沖縄外から沖縄を見る人には、いくつかのパターンがある。まず、自分にはないもの見たことがないものを沖縄に発見する、つまり異質発見というアプローチだ。19世紀末に田島利三郎のオモロに寄せた関心はその例だろう。沖縄の外からは、沖縄は「遅れている」と見るのが普通になっているなか、沖縄のなかに「優れたもの」を発見し驚きをもつ人は、知識人に特に多かった。柳宗悦を含めて、戦前に来訪した民芸協会の人々が典型例だろう。

また、知識人に限らず、沖縄のなかに自己にはないものを発見することを通して、自己を振り返る例は多い。沖縄の人との交流のなかで、自分たちにはない「純朴さ」「暖かさ」を感じ取り、そうしたものを「取り戻したい」と考える人に出会うことは、最近に至るまで結構ある。仕事や学業などで沖縄に滞在し、そうしたものを持つ人がいる。観光者にも見られ、滞在を延ばしたり、再訪したりする人が多い。

そうした異質発見をきっかけに興味を深めて、さらに追求するなかで、異質発見にとどまらず、対照的に、同質のもの、あるいは共通するものを発見する人もいる。そして、日本の原型としての沖縄を見いだす人もいる。柳田国男などがその典型例だろう。

そうしたなかで、次のような発言まで登場する時代となった。

「沖縄でのシンポジウムに参加していると、沖縄出身者が沖縄を自己表象する特権は、とうの昔になくなったことを感ずる。沖縄研究に、どこの出身かという特権はすでにないのである。それは、わたくしとは異なる外国人研究者とて同じだ。沖縄ほど多くの外国人研究者を受け入れた地域は、日本にはないであろう。」渡邊欣雄「沖縄文化の拡がりの変貌」2002年榕樹書林 p 348

この発言を生むような状況は、1960年代以降、急速に拡大深化してきた。それは、マスメディアを媒介にして、沖縄研究をする人に限らず、一般の沖縄住民はいうまでもなく、沖縄外の人々にひろがっていく。

18. 沖縄外から見た「沖縄的なもの」への眼 その3 2016年03月14日

沖縄外の人に焦点を絞ってみよう。先に述べた異質発見のなかには、観光の眼でもって沖縄に、たとえば亜熱帯特有の自然、またエスニックな文化を感じ、強調する人も多い。それは、オリエンタリズムといわれるようなものを含む。実は、戦前来訪した民芸協会も、沖縄県の沖縄観光促進策の一環として呼ばれたものだ。

以上とは異なるものとして、教化・同化の眼と態度でもって、沖縄を見る人も多い。それは、明治政府が沖縄統治にあたって基本認識としてもっていた沖縄認識だともいえよう。沖縄県庁職員や学校教育の要職にあった人など、諸制度を推進する人々の共通認識ともいえるものだった。明治期沖縄の中等学校に勤務した児玉喜八とか新田義尊などは、そうした認識を公然と表明し、実践展開にあたって、前提としての認識にしていた。

そして、教化・同化は、制度上の権力位置にある人の公式イデオロギーであった。と同時に、制度上の位置にないとしても、そうしたイデオロギーを推進する立場をとって、権威主義的にこのイデオロギーを掲げる人も

いた。

そうしたイデオロギーは、沖縄外の人だけでなく、徐々に沖縄内において権力に近い人、権威的志向が強い人にも広がっていく。そして、彼らがいう「沖縄は遅れている」という認識は、広汎なものとなっていく。特に教育界では、それが共通認識とでも言えるほどになっていく。それは、「沖縄は遅れている」といったコンプレックス構造としても定着し、体質化さえしていく。その認識は、今日もなおごくありふれたものである。

そして、そうしたコンプレックス構造を克服・打破するものとして、「万国津梁の鐘」の銘文に象徴されるグスク時代の海外交易などが持ち出されるのが一つの型になってきている。

また、リーダー的な人の場合、内の眼と外の眼の双方を持っていることが多い。たとえ外からの支配的なリーダーだとしても、外から持ち込む指導指示命令に対して、内の人々がどのような対応をするのかを読む必要があるが、そのためには内の眼が求められる。

概していうと、両者の眼のうち、外の眼が強いリーダーは、支配的傾向を帯びやすい。対照的に内の眼が強い人は、内の人々になじみやすいが、内に「埋没」して、事態がかえって見えなくなる時がある。

こうした沖縄把握にかかわって、沖縄外の被差別被支配体験を持つ類似事例を参照する事例がある。一つは、アイヌの事例だ。また、戦前では台湾や朝鮮を持ち出す例もある。しかしながら、その際、それらの地域との共通課題を追求する例だけでなく、むしろそれらの地域との間に序列をつくり、「下」の地域に対して、沖縄の優位性を語るという発想も登場してくる。

コンプレックス構造を優越感をもって打破することでは、上下序列構造を越える事ではなく、実は再生産することになってしまう。

近年になると、そうしたものは異なって、イギリスとの関係で独立論議が盛んなスコットランドの例、フィンランドのなかで特別な地位を確保しているオークランドの例も紹介されている。

また、国連の先住民問題や消滅危機にある言語をめぐる諸アクションに注目し、それと呼応した形で議論・行動も目立っている。

19. 同じ「沖縄的なもの」でも、良し悪しの価値判断が分かれる その1

2016年03月25日

沖縄把握ないしは沖縄認識には多様性がある。それらを日本本土との関係と異質同質に焦点化して分類してみよう。

- a 沖縄のもつ他府県（ないしは日本の主要傾向）とは異質なものとすることに注目する
 - a 1 それを肯定的に捉える
 - a 1 α 日本と沖縄とは、区別されるべき（対等の）存在であると捉える
 - a 1 β 沖縄と他府県とは異質だが、ともに日本を構成する部分であると捉える
 - a 2 否定的に捉える だから沖縄の本土への「同化」が必要だ、と見る
- b 沖縄と日本とは、同質である、ないしは共通性が強いと見る
 - b 1 違いがあるとしても、部分的・一時的であると見る

b 2 違いを遅れだと把握し、追いつくことを求める

※ a 2 と b 2 とは類似したものになる。

こう分類できたにしても、異質なものにしても同質なものにしても、変化するものであることに注目したい。異質が同質になったり、同質が異質になったりするだけでなく、異質なものにしろ同質なものにしろ、それぞれが変化するのだ。なかには消滅するものもあろう。

と同時に、新たに作られることも多い。「沖縄的なもの」自体も、いつの時期かにどこかで作りだされたものなのだ。

料理・食材を例にとろう。

外間守善は、次のように述べている。

「かつては「支那スバ」と呼んでいたことから察して、もともとは中国から渡ってきたのであろう。小麦粉が手に入りづらいこともあったが、琉球王国が冊封使を接待していた時代はスバは高級な宮廷料理で、庶民の食からは程遠い存在であった。明治に入って「スバ屋」ができ始め、徐々に庶民料理として味も、形もかえられていったと考えてよいだろう。」(外間守善『沖縄の食文化』新星出版2010年)

明治期に「スバ屋」ができて以降、客の嗜好を視野に入れて売れ行きを考えながら、多様な沖縄そばが創作されてきたのだろう。同じ沖縄そばにしても、何十年かの歴史を守り続けているところもあれば、新たな工夫を加えているところもある。そして、地域色をつけて、小禄そば、名護そば、与那原そば、宮古そば、八重山そば・・・など、多くの地域で多様なそばが作られ、現在に至っている。

また、昆布が北海道あたりから流入してくるなかで、沖縄的な活用が創造されていったのは近世期だろう。そこには、物流の交点としての沖縄の位置が重要な意味をもち、中国大陸の昆布文化、日本北部の昆布文化などに刺激を受けつつ、沖縄独自のものを作っていたことだろう。

近年のことでいうと、ゴーヤは沖縄独自のものというわけではなくなってきて、他府県での栽培活用がすすんでいる。そのなかで、地域色をもった新たなものを作りだす動きもある。また、苦味が弱いゴーヤが作られ、若い世代を中心に歓迎されている。

山羊汁にしても、強い臭いがするために避ける人が多かった1970年代までと比べると、近年では山羊の種類が変化したためだろうか、臭いの弱いものが出回っている。

これらは、沖縄外からの影響を受けつつも、沖縄内でも変化していることを示している。

20. 同じ「沖縄的なもの」でも、良し悪しの価値判断が分かれる その2

2016年04月05日

「沖縄的なもの」だとしての事実認識が同じでも、その評価が分かれることはしばしばだ。身近な例を取ると、「時間にあくせくしないで、ゆったりしている」という発言と、「時間にルーズで、期限を気をせずに仕事をすすめがち」という発言とが、同じことを指して言われることがある。「車間距離をとり、制限時速を守る安全運転をする人が多い」と「ヨンナーヨンナーな運転で、後続車両をイライラさせる人が多い」という発言も、同じことをめぐってなされている。

これらは、「沖縄的なもの」にかかわって、どのような価値観を持つかという立場で評価が大きく異なる。

また、時代背景によっても異なってくるだろう。とくに、「沖縄的なもの」をどのようにしていこうとするか、という志向性によって異なってくる。たとえば「ゆっくり運転」を肯定的にとらえる人は、それを奨励促進するだろうし、否定的にとらえる人は、それをやめさせる営みをすすめるだろう。

なかには、「沖縄的なもの」が見つければ、大半のものを肯定的に評価する人もいれば、対照的に大半のものを否定的に評価する人もいよう。

こうしたものであるだけに、「沖縄的なもの」は、単なる好き嫌いを越えて、社会運動的性格の強い動きを触発することも多い。たとえば、近年の肥満傾向増大は、「もともと沖縄的なもの」ではなく、戦後アメリカ食の影響が大きいと考え、生活習慣病を減らし健康長寿を回復するために、食習慣の改善をすすめる社会運動が展開されている。

これまで述べてきた問題は、沖縄史研究のなかにも見いだせるとの、次のような指摘がある。

(沖縄戦、米軍統治、「日本」への復帰などの)「経験を通じて沖縄の人びとは復帰した「日本」とは何か、「沖縄人」とは何かについて問うことになった。その結果、近代期以降の、伊波普猷に代表される「日琉同祖論」に基づく研究は一八〇度転換することになる。すなわち、「日本」との差異の強調、換言すれば琉球・沖縄の独自性の強調である(中略)。こうした琉球と「日本」の歴史的文化的相違を重視する歴史観の形成について、池田榮史は「そこには住民の意思とは関係ないところで定められてきた琉球列島の処遇に対して、自らの存在の拠り所を求める人々の切実な心情の反映」(中略)があるとし、「その結果、日本とは異なった国家であった琉球国への憧憬を含む強い関心が喚起され、研究が進められる状況を生み出した」(中略)と述べる。こうした心情に根ざす研究が主流をなしていく中で、琉球国の形成や、その序章にあたるグスク時代の開始も、外からの影響をほとんど受けなかったとする内的な発展論で説明されてきたのである。さらに言えば、古琉球時代の琉球国、島津侵攻以後から近代まで続く近世琉球の「独自性」に関する議論も、琉球王府の「主体性の発揮」を強調することで立論がなされてきたように思われる。」吉成直樹『琉球史を問い直す—古琉球時代論』2015年森話社 p 9-10

この指摘は、「良し悪し」という問題とは異なるが、現代の沖縄に対する姿勢とか願望とかが、研究の世界に強い影響をもたらしていることの指摘である。私は、そうした現代課題への姿勢や願望が歴史研究に投影することを真っ向から否定することはできないし、それらが投影していることについて自覚的であり、そのことを表明することは欠かせないし、その姿勢や願望が、歴史構成に対して「禁欲」的であること、さらに歴史事実を歪める危険性について自覚的であるべきだと考える。

これまでの本稿は、実はそうした問題への指摘であるといえるかもしれない。

21. 「伝統」 = 「沖縄独自」 定型の形成

2016年04月15日

「伝統」という言葉は、昔から変わりなくあったものというイメージをもっている。しかし、その「伝統」もさかのぼれば、作られた時点に行きつく。作られた時は、「伝統」にはなっていない。作られて、一定年数が経ち、かなりの評価を受け、それを継承継続させることが価値を持つようになってはじめて、「伝統」という言葉にふさわしいものになる。

だから、沖縄の伝統という言葉は、「沖縄独自」定型が形成確立し一定年数経た後に登場するものだ。例え

ば、空手における伝統について見てみよう。1910年ごろから、それまでの「首里手」「那覇手」「泊手」や「ティー」や「唐手」が、「空手」と呼ばれはじめ、諸流派やその道場の成立設置が進行し始める。成立し一定年数経たのち、戦前だと「ティーなど沖縄武術・古武道の伝統をひきついだ空手」という表現が生まれたかもしれないが、実際には、「空手の伝統」という言い方は、戦後しばらくしたのちに見られるようになったのではなかろうか。このあたりについて、筆者は未解明だ。

その沖縄の「伝統定型」の創設確立には、沖縄の地域的統一と安定とが後押しする。たとえば、17世紀の薩摩支配スタートから100年たち、18世紀になって近世琉球王国の盛期に、組踊の創造、三線楽譜の工四の創作、さらに、稲甘諸甘蔗を軸にした農業生産などで、いろいろな定型が創設確立した。それらは、19世紀になると、「伝統」化し始める。

また、19世紀後半からの日本の国家支配スタート以降、30年ほどたつと、その時代のありように対応した多様な「沖縄的なもの」が作られる。それらは、その後、半世紀ほどたった戦後に「伝統」化していく。先に述べた空手、ウチナー芝居、沖縄学がそうであろうし、標準語と沖縄式共通語もそういえるかもしれない。あえていうと、「なかなか、日本人＝ヤマト人化されない沖縄人」、あるいは「なかなか、日本＝ヤマト化されない沖縄」という「伝統」も成立したといえるかもしれない。このあたりは、議論がありそうところだ。

さらに、観光に焦点化された「沖縄イメージ」は1960年代に形成確立しはじめ、それらは、30～40年たったころに「伝統化」されたといえるかもしれない。自然破壊や自然環境の変化などの進行で、そのイメージが壊される事態が広がれば、そのなかで、「沖縄観光の伝統イメージを守れ」という声が出てくるかもしれない。

そして、1990年代から現在に至る時代においては、どのような沖縄定型が形成確立され、将来の「伝統」になっていくのであろうか。また、伝統は、長い歴史をもつものを保存するだけで維持されるわけではない。伝統には、再創造の過程が必要だ。再創造がなければ、「お蔵入り」して消滅へと向かうだろう。

そしてまた、どのようなものが「伝統化」されることを望むのだろうか、という問いも必要だろう。旺盛な沖縄文化創造、基地をめぐる動向、世界のウチナーンチュ大会や物流拠点化や文化交流創造など海外との交易や交流の進展、国際的な沖縄観光の進展などのなかから、どういう「伝統」が生まれてくるのであろうか。

2010年～2015年記事

日本本土を追いかける顔と独自創造の顔の二つをもつ沖縄における変化

2015年09月28日

最近、しばしば行っている「沖縄の教育は、途上国？ 先進国？ 沖縄独自？」という討論を行うと、なぜかどの会場でも、参加者は三つに分かれます。

二つに絞られることはこれまでありませんでした。中間を選ぶ人もいますし、途中で考えを変える人も結構います。そして、選んだ理由もその時の参加者によって大きく変化します。たとえば「沖縄独自」を選ぶ人にしても、その理由が随分異なります。

そのなかで、実に多様な捉え方があることを発見し、新たな思考のきっかけを得る参加者が多いのが特徴です。

こんな討論ができるほど、沖縄は多様な特質を持っているという点に特質があるといっている人もいません。それは、沖縄が豊かで多様な地理的歴史的社会的特性を持っているからに他なりません。そしてまた、沖縄に住む人々の豊かな多様性を反映しているといえるかもしれません。

地理的というと、孤島であるがゆえの孤立性にともなう厳しさを思い浮かべるかもしれませんが、海を通して多様な地域と交流交易を展開するという有利さがあります。また、亜熱帯気候がもつ豊かさが存在し、固有生物種の多さ、自然環境の美しさが、世界各地からの観光者を引き付けています。

また、アジア地域との関係、とくに日本・中国などとの関係で政治的軍事的に要所とされ、世界覇権者としてのアメリカが強い関わりを持っています。

そうした地理的特性と結び合って、歴史的にも実に多様な特性をもっています。「沖縄人はどこからきたか」ということがよく話題になりますが、単純な回答はなく、おおまかにいうと、多様な時期に西日本を中心に多様なところから断続的にやってきたといわれます。

そうしてやってきた人々が沖縄内の多様な地域で、相互に交流対抗しつつ歴史を刻むと同時に、おのおのが海外の多様な地域との交流交易を重ねてきた歴史をもっています。

沖縄諸島内で、統一的な権力が形成されるのは15世紀前半、そして奄美・先島を含めて沖縄全体が統一的なまとまりをもつのは、16世紀に入ってからだといわれています。

その後も、海外の多様な地域、多様な人々との多様なかわり進んできました。そのなかでも、日本本土との関わりは比重はかなり高いものですが、日本本土の権力機構とのつながりはあっても、支配服従関係がつくられたのは、17世紀初頭でした。そして中国政権との関わりは、冊封朝貢という独特なものでした。

こうしたなかで、沖縄独特のありようが展開してきました。とはいえ、17世紀初頭以降、薩摩支配つまり間接的な日本支配以降、それらの支配が、沖縄のありように新たな構造を作りだしました。

そして19世紀後半の近代日本国家による直接支配が始まると、沖縄住民を日本国民に同化する政策が展開されます。これらの中で、「沖縄」から脱け出て「日本国民」になる志向が広がります。

こうして、沖縄独自を志向するのか、沖縄独自のありようを否定し脱出しようとするのか、この二つの間を揺れるなかで、進行することになります。音楽芸能の世界では前者が強く、教育の世界では後者が強くなりました。

日本向き、沖縄向きだけでなく、さらに西洋向きも加わる分野が広く見られます。衣食の世界などはまさにそうです。たとえば、沖縄の風土のなかで歴史的に蓄積されてきた沖縄風に加えて、中華風和食風、戦後になるとアメリカ風の色彩が加わる食事の世界は、まさにチャンプルーになっています。

さらに、沖縄戦そして米軍支配が、日本が沖縄を犠牲にするありようをつくります。こうしたなかで、沖縄における激動と安定が展開してきました。沖縄における高度経済成長は、1960年代には本土とは異なる形で兆しがあらわれましたが、1972年以降、日本の大きな枠組みのなかで進行してきました。

そのなかで、沖縄否定のうえに本土に追いつけをすすめるのか、沖縄独自なのかという二つのことが、新たな形で進行していきます。

そして、世界のウチナーンチュ大会がシンボリックですが、海外との新たなつながりも広がっていきます。と同時に、基地問題などをめぐって新しい局面を含みつつ、沖縄における激動の時代が進行しています。

多田治「沖縄イメージの誕生」（東洋経済新報社2004年刊）を読む

2014年10月30日

著者の評判をよく聞く。しかし、私は一冊読んだような記憶もあるがはっきりしない。きちんと読みたいと思って、購入し読む。

1975年の沖縄海洋博をめぐる多様な問題の研究書だ。本格的な研究だが、読者に親しみやすく構成編集されている。著者自身は、海洋博を経験していない世代だが、よく調べられており、かつイメージ豊かだ。

私自身は、沖縄生活開始3～4年目で、慌ただしいときであり、特別な関心をもっていただけではない。一度だけ家族連れで訪問した記憶がある。長男が深刻な病気を抱えていることが判明したころ、歩くのを嫌がる長男を抱きながら会場を回った記憶が残っている。

だからむしろ、本書を読んで、海洋博のことを改めて知ったという感じだ。

と同時に、「沖縄的なもの」についての長文に挑んでいる現在、1970年代前後をどう把握するのか、ということを変更して学習検討しなくてはならないと思っていたところだった。そのことに強烈なヒントを与えてくれそうな著書だ。

与えられたヒントをもとにした私の作業は、数年先になるだろうその作業の結果を待っていただくしかない。ここでは、本書のなかの2カ所



を紹介するだけにとどめよう。

現在では当たり前になったこれらの「観光資源」が、60年代の時点ではほとんど欠落し、未開発なのだった。裏返せばこれらは、沖繩に「昔からあった」ものに見えるが、実は70年代以降、新たに人為的に創り出されたものなのだ。もちろんそれまでも、これら沖繩特有の文化や自然の多くは、「自然発生的」に、もしくは潜在的にはあった。が、それはあくまで、「素のまま」で生きられていたものであり、観光のまなざしを意識して、見せる・見られるためにあるものではなかった。むしろ70年代以降初めて、これらの沖繩の〈文化〉や〈自然〉は「観光資源」として、観光開発の対象（＝客体）と化した。それらは規格化され、メディアの宣伝によって媒介され、大量生産されることで、展示的価値を増していく。そうして、これら個々のアイテムは全体として、〈沖繩らしさ〉を演出する役割を果たしていくのである。 P 1 3 9

エイサーやハーリーなど、地域に根づいた多くの伝統行事が、観光イベントとしての役割を付加され、装いを新たにすることを余儀なくされていく。

第1次・第2次産業が、観光沖繩のイメージを取り入れる形で変わっていく局面も見逃せない。「県産品」が、〈沖繩〉や〈亜熱帯〉のイメージを身にまとい、ブランド化されていく。ハイビスカスやブーゲンビレアなど観賞用の熱帯植物が、本土に出荷されて高い人気を得る。こうした熱帯植物は沖繩の道路沿いにも植え込まれ、ロードパークの構成要素となる。沖繩パインも、観光沖繩の〈亜熱帯〉イメージを味方につけていく。野菜や花卉の生産も、亜熱帯性の気候を生かして、本土の収穫期とずらして出荷でき、そのことがまた、亜熱帯・沖繩のブランドづくりと連動していく。琉球絣・紅型・読谷山花織・官古上布・久米島紬・八重山ミンサー織・壺屋焼などの伝統工芸が、国の振興事業に指定されたことも大きい。伝統工芸の復興は、観光みやげ品の開発と密接にかかわっている。 P 1 5 6 - 7

「沖繩的な」「沖繩らしい」ものは、もともと存在していたという本質主義的なものではなく、その時代時代の政治経済社会状況のなかで構築され変化してきたものだという趣旨は、私の考えと一致する。そのことを1970年代において、とくに海洋博とか観光とかいった分野で鋭く解析しているのが本書だ。このアプローチは、「沖繩的なもの」を考えるうえで、とくに近年についての分析のうえで、かなりの有効性をもっているようだ。

外間守善「沖繩の言葉と歴史」（中公文庫2000年）を読む1

ニライカナイ オモロ

2014年10月23日

現在、「沖繩的なもの」を考える」という書き物をしているが、そのために本書を読む。外間さんの諸論は、「沖繩の歴史と文化」をはじめ、多くのことを学ばせていただき、拙著「沖繩県の教育史」執筆にあたって、多くの点で参照させていただいた。今回読んだものも、本書に先駆けて刊行された著書などで参考にさせていただいたので、既読箇所もある。といっても、「沖繩の言葉」に焦点を当てた本書には、学ぶことが多そうだと感じ、改めて読まさせていただいた。本書は、1981年刊行された「沖繩の言葉」を改題して刊行された



ものだ。

本書の多くの箇所は、作業中の「沖縄的なものを考える」で生かすことにして、今回は、本書の半分近くを占める「第三章 沖縄古語の語源を探る」のなかのいくつかの古語について、紹介コメントしたい。といっても、本格的な言語学の論文なので、コメントは私の個人的感覚・体験をもとづくものとなる。

ニライカナイ

・伊波普猷説 「にらい・かない」はもともと北方にあると考えられていたが、東方から勃興した第一尚氏の影響で、首里を中心とする地方で東方に振り替わった P 136

私がニライカナイを感じることが多いのは、ヤハラヅカサと奥武島龍宮だが、いずれでも東南東方向、久高島方向のやや南寄り方向にあるという気持ちだ。そこで祈りをささげる人たちも、その方向の人がいるし、久高島への「お通し」と考えて、久高島方向を大切にする人もいる。それにしても、政治支配とからんで、北から東へと変化したというのは、なるほどと思う。

・『にらい』は、『根所方』という語義をもつ語である P 146

・「カナイはニライに付いた意味のない後付語である」 P 148

・ニライ観の変遷

1. 祖神のまします聖域で、そのためのすべての根になり基になる所。根所。
2. 死者の魂の行く所。底の国。
3. 地上に豊穰、幸福、平安をもたらすセヂ（霊力）の源泉地
4. 海の彼方の楽土。常世の国。 P 151-3

・ニライの意義やニライ・カナイに対する古代人の信仰は、このような順序や段階を経ながら成長したり、変遷したりしていったのではなかろうかと考えている。こうして整理してみると、現在一般化されている「海の彼方の楽土」観は、後になって美化され、より理想化されていったもので、新しいニライ観であるということがかなりはっきりみえてくる。 P 154

・祖神のまします根所だからこそ豊穰の源泉にもなるわけで、さらに、この世に豊穰をもたらす源泉地であるからこそ、よりいっそう美化され理想化されて、「海の彼方の楽土」的信仰が生みだされたのである。 P 156

なるほどと思わせる。私のイメージは、ここでいわれる3と4だった。

結論箇所だけを紹介したが、これらには、20ページ余りに及ぶ言語学を軸にした専門的追求の裏付けが示されている。

オモロ

これまた諸説を検討しつつ論が展開され、次のような結論が提示される。私は、なるほどと思うばかりだ。

・私は、オモロという語の意味と語源について、口に出して「言う」という意味の動詞「思ふ」を原義にしたもので、その体言化したものが神の言葉、神言という意味を背負わされたオモロであると結論する。 P 1 7 2

外間守善「沖縄の言葉と歴史」を読む2

アジ・あまみきよ・あふ（奥武）・うりずん・若夏・シヌグ

2014年10月26日

按司（アジ・アヂ）

親（父親）の意のアサが、社会の変遷につれて武力的支配者のアジ（アヂ）に成長し、さらにアジを支配するアジが出現し、遂には王という尊称まで生まれてきた P 1 9 3

あまみきよ・しねりきよ

沖縄の創世神である「あまみきよ」「しねりきよ」は、遠い遠い「あまみ」の方からやってきた神様であると同時に、稲にもかかわりがあるということになって、 P 2 1 3

あふ（奥武）

「あふ」の意味的な機能を呪詞、神歌などの用例に即してみると、色彩としての「青」という意味より「聖なる場所」としての慣用的な使われ方が多いという事実も指摘しておかねばなるまい。 P 2 1 8

アフは、「神のまします聖なる場所」または「オボツ・カグラに通ずる中継ぎの場所」、「ニライ・カナイに通ずる中継ぎの場所」、「聖なる」という意味の敬称辞、であるということができそうである。 P 2 2 3

うりずん・若夏

「うりずん」は潤うの意の「うり」と、浸みとおるの意の「ずん」とが複合してできた語で、「降雨が土に潤い浸みる」ことを原意にした語であるが、特に、旧暦二、三月頃の季節を指していうようになったものであると考える。

四季の中で、「春」という言葉でくくられる季節感覚が沖縄にはなく、「若夏」という言葉を「初夏」と言いかえることができないように、「うりずん」は「春」と言いかえることのできない、沖縄の特有語である。「春」と翻訳したとたんにそれは標準語的感覚でくくられ、観念化されてしまう。旧暦の二、三月頃、枯れ枯れの冬期をくぐりぬけた大地に潤いが浸みわたっていく、その頃の季節が「うりずん」なのであり、そのみずみずしい語感、固有の季節表現である。その「うりずん」に重なるようにして「若夏」の季節、四、五月がやってくる。さんさんと降りそそぐ夏陽の鮮烈を迎えようとするその直前の頃が「若夏」である。 P 2 4 3 - 4

シヌグ

シヌグの語源が、「シノ・コネリ」であり、「美しく聖なる踊り」であることを知ると、歴史の流れにつれて、踊りそのものの内容も、それを受けとめる人たちの意識も、その言葉の持つ意味も、しだいに変わっていったものであることを、垣間見ることができるわけである。 P 2 8 6

いずれも、「なるほど」というだけでなく、なにかしらの感慨を覚える記述だ。あふ（奥武）なども、生囃りだった私の知識をきちんとしたものにしていただけてだけでなく、近くの奥武島龍宮神の由来についてのヒントを与えてくれた。

うりずん・若夏もそうだが、本土式の春秋イメージで沖縄の季節を「裁断」し、沖縄を『四季』の枠組みに当てはめようとする無茶な教育活動の見直しを要請するものだろう・

先日の授業で、ミーニシの話をしたら、この言葉を知らないウチナンチュの受講生が多くて驚いた。沖縄のなかで生まれた季節感覚を豊か継承し豊かにしていく営みが求められていよう。

この記述をもとにして、次のウリズン・若夏の時期を迎える、なかで改めて体感してみよう。

「あまみきよ」と稲とのかかわりは「そうだろうな」と思うと同時に、それ以前の「創世神」はどうなっていたらどうか、という新たな興味がわいてくる。

新崎盛暉「沖縄を越える」を読む1 尖閣諸島 国境を低くする 2014年08月16日

書店で見つけた本で、著者の本を読むのは久しぶりだ。

尖閣諸島をめぐる大変憂慮すべき事態が続いている。とくに国家間紛争の様相を見せている点にある。こうした国家間問題の多くは、近代の国民国家形成以降に生じた、日が浅いものだが、尖閣列島をめぐるも例外ではない。

そんななか、新聞紙上で読んだ著者の論は、傾聴すべきものがあつた。

本書でも、以下のように論じられている。

「尖閣諸島をめぐる日中の対立、(中略)もし尖閣諸島をめぐる武力衝突でも起これば、沖縄が戦場になることを意味する。問題を鎮静化させ、解決するにはどうすればいいのか。自らの主張の正当性を確信していても、「領有権問題は存在しない」と言い募って、対話の道を遮断し続ければ、力による解決しか道はない。平和的な問題解決のためには、対話による説得、あるいは妥協が不可欠である。日中両国の対話の場に、沖縄と台湾という二つの地域を加えることが不可欠である。そのことによって領土ナショナリズムを相対化する糸口が見えてくる。日台漁業協定のような、国家による近視眼的暴挙は避けなければならない。それは逆に国境地域住民の友好関係を引き裂くことになりかねない。文化、経済、観光など、あらゆる面での交流を盛んにし、自己中心的で偏狭なナショナリズムを薄める努力をすることも必要である。その意味でも、先島と台湾だけでなく、沖縄県と福建省、那覇市と福州市などの交流の実績もある沖縄の役割は大きい。」P 1 2 6

また、尖閣列島をめぐる『沖縄タイムス』と『琉球新報』の表彰された連載記事について、

「いずれも、抽象的観念的な国家の論理を国境地域住民の具体的な生活者としての視点から相対化しようとする点が高く評価されての受賞であった。」P127と述べる。

そして、尖閣問題に限らず、次のような主張は大変示唆的だ。

「われわれの立場」とは、とりあえず「国家間の力による衝突をできるだけ避け、平和的国際環境をつくるために、国境を越えて手を結ぼうとする民衆の立場」と規定しておきましょうか。とにかく基地に反対するというのは、そういうことだと思います。軍事的衝突の部分とかを少しずつでも崩していくということか必要じゃないかなと思っているんですけど。」P156

「安保がまさに構造的沖縄差別だということが、少なくとも沖縄側からはよく見えるようになってきたんですね。その仕組みまでは見えない人たちも、国土面積のわずか〇・六%の沖縄に、在日米軍基地の七五%が集中しているのはおかしい。これは差別だ、と言い出しているんです。」P156

沖縄独立論をめぐって、

「今必要なことは、新しい国家をつくるよりも、できるだけ国境を低くし、国家を相対化していくことではないでしょうか。そういうことも全部見据えた上で、自己決定権を確立する、平和を作り出す、という目的を追求する手段として、独立というのが一つの選択肢としてあってもいいけれども、今、それを選択できる状況ではないと僕は思っている。」P161

「国境を低くし、国家を相対化していく」という指摘は、大変重要な視点だ。「沖縄独立論」者は、著者のこの指摘、国民国家の枠組み、沖縄ナショナリズムに対して、どう対応するのだろうか。

新崎盛暉「沖縄を越える」を読む2 沖縄の独自性

2014年08月20日

私はこのところ、昨年準備をはじめた、「沖縄独自のもの」「沖縄的なもの」にかかわっての書き物をしてる。その参考になるものが、本書にある。

雑誌『けし風』創刊号（1993年）掲載の「問題提起 沖縄の独自性とは何か」のなかで、著者は次のように述べる。

「いまわたしたちが、この小さな雑誌の発行を軸とする文化運動に寄せる想い（中略）

その核心に存在するものは、沖縄の独自性とは何か、そして、その独自性は、現在において、あるいは沖縄社会の将来において如何なる意味をもちうるのか、それを見極めてみたいということではないでしょうか。

沖縄社会が、独自の風土や地理的位置、そして歴史に育まれたさまざまな独自性をもつことに疑いを入れないところです。それは、ゴーヤーチャンプルーから泡盛まで、紅型から三線まで、戦争体験から軍事植民地支配の体験まで多岐にわたっています。これらは未分化に入り混ったままで、あるものは自然に私たちの日常生活をうるおし、あるものは観光用の商品と化し、あるものはわたしたちの精神生活に多様な方向性を

もった影響を及ぼしています。

沖繩の独自性が否定的にとらえられがちだった過去のある時期とは違って、昨今は、沖繩的なものが、エイサーからウチナーグチにいたるまで、むしろもてはやされる傾向にあります。国営公園としての首里城の再建（中略）

こうした状況に強い違和感を感じる人びともまた少なくないはずです。この問題に関連して、わたしの印象に強く残っているニュースの一つは、首里城の復元によって、国営公園になった城壁内部の御願所（拝所）から、管理の都合上、そこにお祈り（御願）に訪れていた人びとが締め出されてしまったという新聞記事です。

沖繩のグスク（城）は、ヤマト的な城であるよりも、聖域としての意味合いが強いとは、よくいわれることです。首里城が破壊され、琉球大学がつくられた後も、わたしたちは、そここの拝所の前にうずくまる人びとを目にしてきました。その意味で、首里城は、現在に生きる人びとの精神生活と結びついていたのです。首里城の再建は、こうした首里城と民衆の精神生活とのつながりを見事に断ち切ってしまったのです。いいかえれば、目に見える形としての沖繩の独自性・異質性をもてはやしつつ、民衆の生き方にかかわるその根を断ち切ってしまったとはいえないでしょうか。似たような問題は、あちらこちらにあるのではないのでしょうか。

しかし何といても、わたし自身のもっとも大きな関心事の一つは、「戦争体験の継承と反戦意識の形成」という問題です。」P245-6

首里城の復元をはじめとする「復元」が、「復帰」後、公共工事の一環として沖繩各地で行われている。その事業を、どういう視点でどのようなものを復元し、その復元をどのように行うのか、について私も問題提起的な発言を、かなり以前から行ってきた。世界的に進行するユネスコの世界遺産についても、「もろ手を挙げて賛成」というのではなく、その地域の人々の暮らしの視点からの検討が求められる。人々の「貢献」「犠牲」によって作られた、圧倒的な権力者による建造物が選ばれることがあまりに多いからである。

著者の「沖繩の独自性・異質性をもてはや」し、観光の一助にしようとするのが、「民衆の生き方にかかわるその根を断ち切ってしまう」ことを憂慮する、この視点は注目される。

「浅野誠沖繩論シリーズ1 沖繩」のホームページ掲載

2013年3月11日

私は、1972年4月に沖繩に住み始めて以降、年々沖繩に「はまってきた」。途中14年ほど愛知県に住むが、結局は沖繩に戻ってきた。今や、現住所だけでなく本籍地も沖繩県にして9年近くなり、通算すると、沖繩とのかかわりは41年、在住期間は、26年になる。

その間、沖繩についていろいろと考え、いろいろと書いてきた。代表的には、「沖繩教育の反省と提案」（1983年明治図書）、「沖繩県の教育史」（1991年思文閣）、「沖繩おこし・人生おこしの教育」（2011年アクアコーラル企画）などの教育関連書だ。とはいえ、教育以外のことにも強い関心をもってきた。現在も、地域おこし沖繩おこしに直接かかわっている。

だから、開設した旧ホームページ（2003～2007年）にも、ブログ（2007年～）にも、沖繩にかかわってたくさんを書いてきた。それらの記事は、ブログの容量を越すために、3年もたたないうちに

消去している。

そこで、今回、2003～2010年執筆のものを以下に示す4つのカテゴリー別に編集して、そのシリーズ第一集を、浅野誠・浅野恵美子の世界に掲載した。

1. 沖繩 (今回)
2. 沖繩の暮らし (次回予定)
3. 沖繩の歴史 (夏予定)
4. 沖繩の教育 (夏予定)

その「1. 沖繩」に収録した記事一覧を示しておこう。

1 1. 沖繩とは？

沖繩印象

沖繩にすることは引っ込むことだという感覚

沖繩についてのステロタイプの認識

ステロタイプ思考「沖繩は遅れている」が見落としていること

琉球大学編『やわらかい南の学と思想』(沖繩タイムス社2008年)

「うちなーぐち」は沖繩語——宮良信詳説 琉球大学本2

国連人権委員会『沖繩先住民の権利保護を』という新聞記事

国連人権委員会『沖繩先住民』問題勧告の英文見つける

『沖繩先住民』問題、続論 この勧告の重大性

そっけない政府答弁書 沖繩/琉球先住民(族)問題

薩摩の琉球入り400年の2009年の企画

多田治『沖繩イメージを旅する』(中公新書2008年)を読む1

多田本2 本土からのツーリストのまなざしとナショナリズム

多田本3 貧困イメージと「古きよき琉球へのロマン主義」

多田本4 「愛郷心を通して愛国心を示す」

多田本5 「蔓延する沖繩病」と「癒し」

多田本6 イメージ消費 脱線話—観光でないツーリストたち

多田本7 沖繩の「内と外」 「沖繩ブームから沖繩スタイルへ」

多田本8 沖繩イメージ ちゅらさん モンパチ 琉球

多田本9 観光はいったん否定されることを通して受け入れられる

どんな沖繩イメージを発信するのか

「沖繩の出生率はなぜ高いのか？」

魚 昆布 鰹節 じゃこ

大国と沖繩

民族自決と精神 沖繩

自ら全国に「同化」していこうとする発想

外来物をチャンプルー化し、沖繩独自のものを作り出していくこと

自然・神・心・戦 千葉大学学生の礼状に見る沖繩印象

Momoto モモト・・・新刊雑誌

1 2. 移民移住・多文化・バイリンガル

移住・交流の視点から沖縄をとらえると

多文化のなかで生きる 安藤由美・鈴木規之・野入直美編『沖縄社会と日系人・外国人・アメリカン』（ク
バプロ2007年）を読む

英日西仏語雑誌OKINAWA 小川京子さんのクバ物語掲載

沖縄と移民

村上呂里さんの沖縄の言語教育にかかわる鋭く示唆的な論文を読む

沖縄とバイリンガル 村上さんの本から学ぶ

この本の私にとっての主ポイント 村上さんの本から学ぶ2

日本語創造とウチナーグチ 個人体験 村上さんの本から学ぶ3

「沖縄的なもの」への肯定と否定 村上さんの本から学ぶ4

言語観 生活・文化と道具・科学 村上さんの本から学ぶ5

沖縄的なものを教える 文化と生活現実 村上さんの本から学ぶ6

バイリンガル再論 村上さんの本から学ぶ7

地域・国・グローバルという視野で 村上さんの本から学ぶ8

実践をどう展開していくか 村上さんの本から学ぶ9

13. 政治

沖縄国際大学米軍ヘリ墜落

ステルス戦闘機F22Aが上空を轟音で飛ぶ

飛行機事故

『教科書検定』県民集会

県民集会に参加した人々と交通手段

県の旅券センター 久しぶりの国際通

会場外会場？も人がいっぱい 基地撤去集会 会場溢れる

沖縄自治の創造へ 『沖縄「自立」への道を求めて』を読む1

基地認識をリアルに 『沖縄「自立」への道を求めて』を読む3

14. 沖縄の産業・沖縄おこし

子ども未来ゾーンのすごい構想

沖縄道路事情と沖縄経済

出稼ぎ

沖縄の開業率・廃業率日本一は喜ぶべきか悲しむべきか

サステナブル・ツーリズムとニューツーリズム 琉球大学本4

新城明久『沖縄の自立に向けて 農業・産業活性化へのヒント』

新城『ヒント本』「沖縄の農業の可能性」壮大で確実な提案

新城『ヒント本』3 教育・平和と結びつけて

新城『ヒント本』4 農林業と観光とを結びつける

私達もお世話になった医介輔 歴史の幕を閉じる

照屋善義『沖縄の陶器 技術と科学』

吉本哲郎『地元学をはじめよう』 ワークショップ型地域づくり

吉本『地元学』本2 発見創造型ワークショップそのもの

吉本『地元学』本3 若者・子どもを「地元」で育てる
「地域に開かれた大学」を越えて、「地域からつくる大学」へ
「南城物語」「南城学」という科目の授業があったらどうでしょう
大江正章「地域の力ー食・農・まちづくり」(岩波新書)を読む
「地域の力」本2 I・Uターン 商店街 販売に主導権をもつ農
地域おこしの担い手 字・自治会 自治体職員 議員 フリー
「観光と有機農業の里・阿智」の村づくりの本を読む
阿智本 地域づくり主体 地域自治組織=自治会
阿智本3 村づくり委員会
阿智本4 議員・職員
阿智本5 一人ひとりの人生の質を高められる 全村博物館構想
井口貢編著『入門文化政策 地域の文化を作るという事』
築山崇、桂明宏編著「ふつうの村が動く時」を読む
自立経済の創造へ 『沖縄「自立」への道を求めて』を読む2

地域社会と子育て 「リベラル」傾向

2012年9月26日

安藤由美・鈴木規之編著『沖縄の社会構造と意識』(九州大学出版会2012年)のなかの「第9章 子育て支援状況に対する意識よりみる沖縄県の今後の課題」(本村真執筆)に、次のような記述がある。

「子育ては、その実親のみでなく近隣も含めた地域社会も関わりながら行っていくべきである」

この項目については(中略)男女とも7割5分(男性74.9%,女性76.2%)が「賛成」「やや賛成」と賛成している。総論でみると、子育ての実施主体として実親のみでなく、地域社会も参加することに対して基本的に住民の合意が得られているといえるであろう。

年齢別でみると、年齢階層が高くなるにつれて賛成とする回答の割合が高くなっており、「20歳代」が70.3%であるのに対して、「30歳代」73.6%、「40歳代」77.9%、「50歳代」77.1%、そして割合が最も高い「60歳代」は87.9%と9割近い回答となっている。別の視点からいえば、若い世代になるほど子育てへの「地域からの関わり」を肯定する者の割合が減る傾向にあるといえる(図9-16)。」P221

このデータをどう読むか。執筆者がしているような読みとりがあるだろう。私は、こうした読み取りを深めるためには、ここでいう「地域社会」が、回答者のなかでどのようにイメージされているのか、についての深めた検討が必要だと思う。

たとえば、歴史的に長期に続いてきた共同体的なもので、地域住民が全員参加するタテマエであるだけでなく、住民のかなりの人が実際に当事者としてかかわるイメージなのか、それとも地域に存在する多様な組織で、住民が選択的に利用しているもの、たとえば保育園、学童クラブ、スポーツ少年団、塾、ファミリーサポートグループなどが並存している状態でのイメージなのか、によって大きな違いが生まれてくる。

年齢が高い世代では、前者のイメージが多いただろうし、低い世代では後者のイメージが強いただろう。

このあたりに踏み込んだ検討を期待したい。

同書の「11章 沖縄県民の政治傾向とマス・メディア接触」(比嘉要執筆)には、次のように興味深い分析の提起がある。

「県民の政治的態度、特に軍事・戦争といった問題に対する態度は所謂「リベラル」な傾向が強いこと、この傾向は教育レベルが要因となっているらしいこと、「リベラル」な層ほど支持政党をもたない人が多いこと、米軍の普天間基地移設問題に対して「保守的」な人の中で意見が割れていること、テレビ視聴時間とインターネット利用頻度には関連があること、インターネットの利用と政治的態度にも関連があることなどである。」
P264

これまでの沖縄政治史では、「保守一革新」という政治構図による分析が使われてきたが、それには、たとえば1960年代のものと2000年代のものとは、ありようにおいてかなりの変化がある。そしてその変化を支える基盤の変化もあるだろう。本記述は、そのことに深くかかわるものだろうし、場合によっては、従来の「保守一革新」という政治構図とは異なるものを示唆するものかもしれない。そのあたりの論及があれば、興味をもって見ていきたい。

琉球新報社「沖縄県民意識調査報告書」琉球新報社2012年を読む1 2012年9月27日

2011年11月に実施された調査の報告書で、琉球新報の1月紙面でも報道されたものだ。このブログでも、最近、これに類した報告について何度も書いてきたので、今回は簡潔にしたい。まず所得・経済関連だ。

「質問3 現在悩んでいることを3つ選んでください」について、「「収入・所得」に厳しい認識」というタイトルで、次のように報告されている。

「現在悩んでいることについて最も多かったのは、これまでの調査と同様「収入・所得」で、ほかの項目を引き離して49.5%と5割近くを占めた。前々回の2001年調査では42.0%、前回06年は47.0%で回を重ねるごとに割合は増えている。厳しい雇用情勢や長引く景気低迷を反映した結果となった。06年調査で「収入」とともに4割を超えていた「健康」と「介護や老後の問題」はともに4割を切り、それぞれ39.8%、34.9%だった。これらに次いで「仕事」が31.7%で3割以上がこれらに悩んでいる結果となった。」P11

「質問24 沖縄は将来どんな社会になってほしいですか。(3つ選択)」では、「「経済的に豊かな社会」トップ」というタイトルで、次のように書かれている。

「全体的に見ると、「経済的に豊かな社会」59.6%、「仕事があり、安心して働ける社会」48.6%、「子供や老人、障がい者を大切に社会」44.3%が上位3位だ。

前回は「経済的に豊かな社会」54.2%が1位だったが、2位は今回3位の「子供や老人、障がい者を大切に

する社会」52.5%が入った。今回、経済や労働が重視されたのは、相変わらず高い失業率など時勢を反映していると思われる。」P32

これらの紹介文から、収入・所得・仕事といったことがトップであり、さらに増加傾向にあること、次いで、健康・介護・老後などがくる構図が読みとれる。

では、沖縄でも近年、ジニ係数増大に示されるように、拡大が話題となっている「格差」とかかわって、「所得階層」ごとの回答分析をすると、どうなるのだろうか。興味をもたれるが、この調査ではそのような項目はない。どこかで、そんな調査がなされることを希望したい。

次は、質問29の「沖縄の立場」についてである。

「今後、日本における沖縄の立場（状況）をどうすべきだと考えるか」という質問に対し、「現行通り日本の一地域（県）のままでいい」という人が61.8%と過半数を占めたが、「日本国内の特別区（自治州など）にすべきだ」と考える人が15.3%おり、「独立すべきだ」とする人も4.7%いた。一方で、「どうすべきか、分からない」と答えた人は18.1%だった。」P37

このなかの、「特別区（自治州）」というのは、余り知られていない選択肢だろう。知られてくると、どうなるか興味を持たれる。この質問項目は、今回初めて設定されたものなので、次回以降の調査では、比較が可能になるだろう。

「家族の幸せや健康」群抜く 沖縄県民意識調査2

2012年9月30日

「質問4 あなたがこれまで生きがいとしてきたことは何ですか。」について、「家族の幸せや健康」群抜く」というタイトルで、次のように書かれている。

「生きがいに関する質問で、最も多かったのが「家族の幸せや健康」で58.8%に上った。前回調査でもトップだった。次いで「仕事や事業の成功」が14.1%だった。ただ、「家族の幸せや健康」は前回から4.0ポイント減少し、「仕事や事業の成功」は3.7ポイント増加した。厳しい経済環境を反映したと見られる。「趣味」は10.8%。10%を超えたのは、この3つだった。「金銭的に豊かになる」は6.9%にとどまり、「ボランティアなど社会に貢献すること」も1.5%と低水準だった。「家族の幸せや健康」は前回調査より減少はしたが、依然群を抜いてトップで、生きがいの中心に「家族」を据える県民像が浮かび上がる。（中略）

年代別では、「仕事や事業の成功」と答えた人は60代で最も多い16.7%。次いで40代が14.8%。「家族の幸せや健康」は40代以上で比較的高く、40代が68.3%と最も高い。次いで、50代が65.5%、60代が63.0%と続く。「趣味」では20代が25.0%と各年代と比べて突出して多く、特徴的だった。時間や金銭的に余裕があり、趣味を楽しむことができる若年層の特徴を反映しており、仕事や子育てに追われる40代、50代と対照的だった。」P12

この設問が、「これまで」について尋ねていることに留意したい。となると、「今」「これから」という設問だったら、どのような回答になるのだろうか。してほしい設問だ。

「家族の幸せや健康」は40代以上で比較的高く」という結果から考えると、「これまで」の少なくとも40年間は、「家族」というものに価値を置く時代状況にあったことが示唆される。「そうだろうな」と思わせられる。では、それ以前の戦前戦中戦後はどうだったのだろうか。これほどまでに「家族」重視だったのだろうか。調べてみたいことだ。私は、他のブログ記事にも書いたが、教育にかかわっていると、子どもが学校の学業で成功することに熱心になることが家族での教育の中心に位置づく「教育家族」が、沖縄では1970年代から80年代にかけて急速に広がり、90年代には一般化したち見ている。その前のありようとは異なる形が広がったのだ。

そしてまた、別のブログ記事で書いたように、近年、家族の形、家族の境界のありようが多様化しているなど、家族をめぐる変容が進んでいる。

そうしたことを考えると、「これから」の家族がどうなるのか、「いきがい」のなかで、家族がどう位置づくのか、興味溢る問題として登場する。

また、「趣味」では20代が25.0%と各年代と比べて突出して多く」という傾向は、現在の20代に特有の現象であり、10年後の調査では、30代の回答に「趣味」重視があらわれるのだろうか。そうだとしたら、その下の20代ではどうなるのか、増加傾向を示すのかどうか。それとも、いずれの時代にも、20代は高くなるのか、こういったことにも興味をもたれる。

人間関係の『希薄化』？ 沖縄県民意識調査3

2012年10月3日

今回は、人間関係にかかわっての質問に焦点を合わせよう。

「質問7 あなたの隣近所との付き合いはどの程度ですか。」には、「全体的に希薄化の傾向」というタイトルで次のように書かれている。

「近所との付き合いについて、「普通に会話する程度」が42.9%で最も多く、次いで「あいさつ程度」38.9%、「とても盛んだ」11.8%になった。

「とても盛んだ」は前回調査から0.8ポイント減少しているが、前々回調査からすると4.6ポイントも減っている。「普通に会話する程度」も前回より4.5ポイント減少しているのに対し「あいさつ程度」が前回より3.4ポイント、「まったくない」6.4%も前回より1.9ポイントそれぞれ増えた。親密な隣近所との付き合いをしている人は全体の一部だが、10年の流れの中で、さらに減っているようだ。(中略)

年代別では「とても盛んだ」が70代以上で最も多く22.6%、次いで60代14.6%となる。20代は最も少なく3.0%だった。逆に20代が最も多かったのは「まったくない」で10.1%だった。30代も「まったくない」が9.8%と多かった。」P15

「質問8 あなたは地域の行事や祭りに参加していますか」に対しては、「参加しない」が「参加する」上

回る」というタイトルで次のように書かれている。

「前々回は「参加する」が58.0%で、「参加しない」が40.0%。「参加する」が約20ポイント上回っていた。また前回は「参加する」が49.8%、「参加しない」が46.2%で、「参加する」がわずかに上回っていた。

今回の調査で、とうとう「参加しない」が「参加する」を上回っており、地域の行事や祭りに参加する人が減ってきていることが分かる。」P16

「質問9 あなたは模合に参加していますか」に対しては、「参加している」減る傾向」というタイトルで次のように書かれている。

「模合への参加について「している」と答えた人は41.6%で前回より3.6ポイント減少した。「していない」は43.5%で前回より4ポイント増えた。「以前はしていたが、今はしていない」が14.9%で0.1ポイント増えた。している人と、していない人とがほぼ同じ割合となった。(中略)

年代別では、「している」が最も多かったのは60代で50.5%、2番目に多かったのは50代で半数の50.0%だった。50代、60代の半数が現在模合に参加している。最も少なかったのは前回調査と同様20代で35.1%(前回30.7%)。前回より4.4ポイント増えた。前回最多だった70代以上は15ポイント下がり、35.3%だった。」P17

いずれも、人間関係が少なくなっているとか希薄になっていることを示している。また、中高年層より若年層で少なくなっていることを示している。だが、単純にそう理解してよいのだろうか。

これらの質問では、中高年層に肯定的回答、若年層に否定的回答が出やすい、といえなくもない印象を受ける。たとえば、模合ではなく、スポーツを通しての人間関係を問うものだったら、どうなるだろうか。

人間関係の作り方が変容してきている。その変容を把握できるような設問を期待したい。

ところで、質問3の『現在、悩んでいることを3つ選んで下さい』への細かい集計表(P65)を見ると、「人間関係」を選んだ人は総計で9.3%だ。わずかにしろ10%を越えたのは、女性と20代、30代だった。

人間関係に悩む人がこんなに少ないのだろうか。少々驚いた。カウンセラーなどとの付き合いが多いから、それらの経験をもとに、もっと高いたらという私の思い込みだろうか。

考えていきたい問題である。

祖先崇拝 トートーメー ユタ 沖縄県民意識調査4

2012年10月5日

「質問11 沖縄の伝統的な祖先崇拝についてどう思いますか」について、「「大切」にしている、9割超」というタイトルで次のように書かれている。

「沖縄の伝統的な祖先崇拝について、「とても大切だ」(53.8%)と回答した人が、前回調査(58.2%)に比べ4.4ポイント減少。逆に「まあ大切だ」(38.4%)は前回(34.1%)に比べ4.3ポイント増えた。前回と比べると大切さの度合いが変わってきているが、「とても大切だ」「まあ大切だ」を合わせると92.2%で、前回と

同様9割を超える人が祖先崇拝を大切に思っていることが分かった。」P19

「質問12 トートーメー（位牌）の継承についてどう思いますか。」について、「「どちらが継いでもいい」トップ」というタイトルで次のように書かれている。

「「どちらが継いでもいい」という回答は、前回調査に比べ5.4ポイント増、前々回調査より2.5ポイント減で、多少の増減はあるものの、トートーメーの継承に性別のこだわりのない人がトップで、この10年間で順位の変動はなかった。「男性が継いだ方がいい」は前回比6.2ポイント減、前々回比2.4ポイント増、「女性が継いでもかまわない」は同0.9ポイント減、同0.4ポイント増だった。」P20

「質問13 あなたはユタへ悩みごとを相談しますか。」について、「男性より女性、若者より年配者」というタイトルで次のように書かれている。

「前回2割以上が「よく相談する」「たまに相談する」と回答していた60代は、今回の調査で4.1ポイント減り、18.3%と1割台に落ち込んだ。70代以上は2.9ポイント増の26.8%で、60代との開きは前回の1.5ポイントから8.5ポイントに広がった。70代以上と60代以下を境目に、ユタへ相談する機会の差が顕著に表れているといえる。」P21

以上が示すものは、「時代の流れ」ともいえるべきだろうが、その流れにも、ユタ相談の世代境目のような特質が見られる点など注目されてよいだろう。

また、「時代の流れ」だとしても、依然として「9割を超える人が祖先崇拝を大切に思っている」ことをどう分析し、かつまた、今後の流れをどう読むのか、考えたい問題がはらまれている。

これらの設問は、スピリチュアリティにかかわるものといえそうだが、これまでの人々のスピリチュアリティへのかかわり方は、100年単位、数百年単位で、ゆっくりと継承変化してきた。だから、人々は『昔からずっとそうだった』ととらえがちだ。しかし、トートーメー問題などは、比較的「日が浅い」ものだ。

その変化が、以前と比べればスピードが速くなっていることに近年の特質がある。また、その時代に生きる人々の大半が同じものを共有するありようから多様化し、個人単位のありようの問題へと移行しつつある。だから、このような個人を対象にした意識調査が行われるのだ。

その個人単位の変化は、スピリチュアリティそのものへの関心の減少ということなのか、スピリチュアリティのとらえ方、あるいはスピリチュアリティへのかかわり方の変化なのか、そうしたことの調査へと展開していこう。たとえば、「ユタ」類について、以前とはまったく異なるスタイルで、「ユタ」とは異なる名称でものが、若い層、とくに女性を中心に広がっている。

こうした変化に何を讀んだらいいのだろうか。私の関心事でもある。

ウチナンチュ・アイデンティティ 沖縄県民意識調査5最終回 2012年10月8日

「質問14 あなたは沖縄人であることを誇りに思いますか。」について、「「誇りに思う」9割」というタ

イトルで、次のように書かれている。

「沖縄人であることを誇りに思っているかどうかを質問すると、「とても誇りに思う人は55.8%と最も高く、「まあ思う」33.5%と続き、両方合わせて9割の89.3%が誇りに思っていることが分かった。前回より4.5ポイント、前々回より4.0ポイント上昇した。(中略)

年代別では「とても誇りに思う」の割合は70代以上が67.0%と最も高く、次いで60代が56.4%、40代55.6%、30代53.4%、20代51.3%と続き、最も低かったのは50代の50.8%だった。前回は、最も数値が低かったのは50代だった。」P22

この高い数値は、他府県では見られないものだろう。年代ごとに低くなる全体傾向はわかるような気がするが、50代の例外さは、よくわからない。さらに調査を深めてみると興味深いだろうが。

「質問15 沖縄県民の特性についてどう思いますか。」については、「人情が厚く、のんびり屋」というタイトルで、次のように書かれている。

「沖縄県民の特性について、16の選択肢から3つまで選んでもらうと、最も多かったのは「人情が厚い」で約6割に上る59.3%、次いで「のんびりしている」が52.6%、「助け合いの精神が強い」が42.6%と続いた。この上位3つは、ほかの選択肢よりも軒並み高く、前回、前々回調査と同じくトップ3に入った。県民の特性として県民の間で定着したイメージと言えそうだ。(中略)

前回、前々回と比べ「付き合いが多い」を選ぶ傾向が低下する傾向があった。前々回は28.9%、前回は24.6%だった。」P23

これもわかるような気がする。

「質問16 あなたは、他の都道府県の人との間に違和感がありますか。」について、「違和感ない」6割というタイトルで、次のように書かれる。

「前回に比べ「ない」と答えた人の割合はほぼ変わらないが、「ある」と答えた人の割合は2.9ポイント上昇。前々回と比べると、「ない」は6.0ポイント減ったのに対し、「ある」は7.7ポイント上昇した。(中略)

年代別に見ると、「ない」傾向は、70代以上で最も強く、63.2%。次いで60代の63.0%、40代の60.1%、20代の56.9%、30代の56.6%、50代の55.6%と続いた。比較的年代が高いほど「ない」傾向が強かった。これに対し「ある」傾向は、30代で最も強く、39.1%、次いで50代で39.0%、40代37.6%、20代34.2%、60代33.2%、70代以上31.8%の順。「とてもある」は20代で最も高く、7.6%だった。」P24

この全体傾向をどう読みとればいいのか。他府県出身だが、年ごとに沖縄アイデンティティが強まってくる私は、複雑と言うか、不思議な感じさえする。それにしても、「ある」傾向上昇とその要因の検討が求められよう。

「質問19 子どもたちに方言を使えるようになってほしいと思いますか。」については、「継承へ8割が肯定、期待」というタイトルで次のように書かれている。

「子どもたちに方言を使えるようになってほしいかどうかについて「ぜひ使えるようになってほしい」「まあ使えるようになってほしい」の合計は82.2%。前回より3.3ポイント減少したが、引き続き8割以上が方言に肯定的な意見を持っている。「ぜひ使えるようになってほしい」は37.3%で前回は5.9ポイント下回り、「まあ使えるようになってほしい」は44.9%で前回は2.6ポイント上回った。「あまり使えなくてもよい」は11.1%（前回比0.9ポイント増）、「まったく使えなくてもよい」は2.1%（同1.3ポイント増）だった。」P27

ウチナーグチをめぐる話題が多かった前回、前々回より下がったとはいえ、これだけの肯定的回答傾向は、むしろウチナーグチへの肯定的な見方対し方が定着したといえるのかもしれない。方言抑圧が基調だった、30～40年以上前のありようからの大変化は、歴史的に注目されるべきだろう。

独立か同化かといった二項対立 琉球政府の特異性 沖縄問題本1 2011年7月5日

本の正式タイトルは、藤原書店編集部編「「沖縄問題」とは何か——「琉球処分」から基地問題まで」藤原書店2011年である。書店で見つけた本。約30名の執筆による小文集である。

私が注目したいいくつかを紹介コメントしよう。

まず、「沖縄とパレスチナから考える「占領」と「独立」」（早尾貴紀）には、次のような指摘がある。

「注意を喚起したいのは、本土の人間が問題を投げ出すように「沖縄は独立すればいい」と言ったり、あるいは、懐疑的な視点で「独立してやっつけられるの?」といった挑発をしたりといった、独立か同化かといった二項対立もまた、問題の所在の隠蔽と過度に単純化された対立の捏造であるという点だ。自治や自立が喚起する問題設定の幅は、連邦制や一国二制度からユイ（相互扶助）的共同体まで、国家独立に限定されない遙かな広がりをもつ。」P111

1970年代、沖縄に住み始めたころ、この記述にかかわる問題に関心を持ちながら、うまく整理がつかないでいた。しかし、国民国家の問題性を問う視点から考え出すようになると、この引用がどのような指摘が理解できるようになり始めた。

国民国家的発想を相対化し、視野を広げて考えることの重要性は、この引用が提起している通りである。

次は、「「琉球政府」という歴史的経験——沖縄の自治と未来——」（増田寛也）である。

「沖縄の自治を考えると、一九五二年に成立し七二年の沖縄返還によって消滅した琉球政府は特異な存在である。米国統治下による軍事優先により極めて限定されていたとはいえ、米国型の三権分立の制度の下、日本で唯一、地方政府が立法、行政のみならず司法の権限も有し、立法院の議員に立法案と予算案の提出後が専属していた。行政職員は議場に入れず、予算案も提案から成立まですべて議会在権限を持った。」p74

このこと、とくに予算案についての議会の権限については、知っているようでいて、その意義について気付かないできた。こうした『地方政府』が『政府』としての位置と権限をもって20年間存在したことの意味は重大であり、それは米軍との関係だけでなく、日本政府との関係の中でも重要な意義をもつものであろう。「日

本」に合わせようとする志向性が強く存在しただろうが、沖縄の現実を踏まえて、日本政府とは異なる追求も行ったであろう。そうした意味でも、歴史的な検討が深められたい。今後の地方分権の深化のあっても、参照すべきことがあるだろう。

日本兵の遺骨の意味 蛍の光 4 番歌詞 沖縄問題本 2 2011年7月8日

これまで気付かなかった二つの指摘を紹介しよう。

一つ目は、後田多敦によるものだ。

「住まいや職場の近くから日本兵の骨が出てくるということの意味が分かってくると思う。そこは戦場であり戦闘があったのだ。出てくる骨は、なぜ米兵ではなく日本兵なのか。沖縄戦では米兵もまた多く犠牲になった。米兵の骨がまったくないことはないだろうが、多くの米兵の死者は骨になる前に収集されたようだ。そこに放置した日本政府や社会の姿を読み取ればいい。」 P 1 1 5

「日本はやってきたことを清算する必要があるだろう。骨でいえば、その骨を拾い、ふるさとへ帰す。少なくとも動員した日本がやるべきことだ。同胞さえも見捨て、放置し続けた日本の戦後。残された骨は、日本が自国の兵士を放置したことを証明し、その地域を日本が侵略したことの証拠でもある。そして、骨となった日本兵は、自国に裏切られただけでなく、骨となったいまなお、侵略者として厳しい目に晒されている。死んでも、白骨化しても日本の所業を背負わされているのだ。」 P 1 1 6

もう一つは、岸田涼によるもので、文部省唱歌『蛍の光』の第四番の歌詞のことだ。

「千島の奥も沖縄も八洲の内の護りなり 至らん国に勲しく努めよ我が背恙無く

この一節が暗示したように、沖縄は、本土防衛上「盾」としての位置を占めてきたのである。ところで、この第四番の中の「千島の奥も沖縄も八洲の内の護りなり」の一節は、明治初期には「千島の奥も沖縄も八洲の外の護りなり」、千島樺太交換条約締結と琉球処分による領土確定後は「千島の奥も沖縄も八洲の内の護りなり」、日清戦争後には「千島の奥も台湾も八洲の内の護りなり」、日露戦争後には「台湾の果ても樺太も八洲の内の護りなり」というように、度重なる変遷を遂げた。それは、帝国・日本の版図の拡大を直接に反映していた。」 P 2 1 5～6

「台湾領有後、もはや日本の帝国としての「フロンティア」ではなくなった沖縄には、本土の人々が特段の関心を払うべき「必然性」が消滅したという事情を表した。(中略)本格的な地上戦闘を経た沖縄戦の惨害もまた、東京大空襲や広島・長崎における原爆投下を経た本土の人々にとっては、もはや特別なものとは意識されなかった。

このように、近代以降、本土の人々の意識の中では、沖縄は、実質上の「空白の土地」であった。今後、日本における沖縄の位置付けを展望する折には、そのことの意味は、適切に振り返られるべきものであろう。」 P 2 1 7

二つの指摘は、沖縄への関心が継続的なものではなく、「ご都合主義」の色彩さえ帯びる一時的なものになり

うることを示唆している。

また、二つの指摘は、重大な事柄でも、それが示す意味には、気付かれない側面があることを示すものだ。

思い出したこと。長年、一緒にいろいろなことに取り組んできた富田哲さんが、「蛍の光」を歌わなかった理由に、このようなことがあったことを、今頃になって再認識した。

「辺境」南と北 自立 沖縄問題本3

2011年7月11日

興味深い視点を、西川潤が提起している。

「アイヌ先住民も沖縄人も、「自立できない」のではなく、「自立できなくさせられてきた」のである。

「辺境」はもともと辺境として存在していたのではない。辺境に仕立て上げられてきたのだ。それをつくり出したのは近代国家システムであり、その中で暮らしてきたわれわれ自身なのである。」P142～3

なるほどと思う。ここ100～200年間特有の「近代国家」的発想が私たちの思考にあまりに深く入り込んでいる。それを相対化すると、まったく新たな世界の見方が開けてくる。

次の勝俣誠の提起も、そうしたものだ。

「追いつかなければならない、といういわば歴史的強迫感を「南」の内包する第一の性とするならば、次に同化を求めない「南」とは誰になるのだろうか。

そこに「南」が「北」に突きつけるより深い問いがある。「南」は、歴史的にも地理的にも多様である。「南」であることに誇りを待って、南北関係を再定義しよう。これが関係の束そのものを見直す「南」である。

これらの「南」を私は「南性」と呼んでいるが二つの側面がある。一つは、歴史的に植民地の人民として「北」によって抑圧されてきた闘う被抑圧民族の視点である。(中略) もう一つの「南性」の側面とは、「北」を照らす「南性」である。「北」に比して、経済的に遅れている故に、「南」は「北」が経験している生活面での商品領域の未曾有の環境破壊、関係性の希薄化ないし喪失を相対的に免れ、「北」の人々にとってしばしばこの「南性」は豊かさや癒しのルーツとなっている。この意味で「南」は無限にやさしく親切なのだ。」P146～7

「追いつかなければならない」という思考は、この100年余りの沖縄に強力な作用を及ぼした。

そして、沖縄は、「南性」と「北性」の間で、様々な複雑な構図をつくりだしてきた。勝俣が示唆するような「南性」に立ち返って、沖縄を再認識することに賛意を感じながらも、沖縄が日本に連なることで「北性」をも持ってきたという面を軽視してはならない。その「北性」のとらえ返しの作業も不可欠だ。

「自立」をめぐるの、次の佐藤学の問題提起も脱落させてはならない視点だ。

「経済・財政の観点では、そもそも首都圏以外で、経済が「自立」している地域は日本にない。東京以外に、一県で完結した「自立経済」が可能なところはほとんど存在しない。よって沖縄のみが「経済自立」を強要される筋合いはないにもかかわらず、沖縄に対する財政移転は、基地との取引の性格を付される。」P206

地域の自立を考える際に、「経済的自立を不可欠と考える」強迫観念から抜け出ることが求められる。「地域の自立」というのは、「中央への上下の依存」関係ではなく、国内外の多様な地域との相互依存関係を豊かに構築していく際に自立的思考・判断・行動を豊かにするという事なのだ。

「本土に追いつけ」はどの県のどんなところをイメージするか1 2010年10月24日

「本土においつけ」という掛け声が、いろんなところで言われてきた。だが、その具体的なイメージははっきりしていないことが多い。おおざっぱに本土なのだ。あえていうと本土の『平均』水準をイメージしているのかなと推測する。「本土との格差是正」という、別のスローガンが使われる場合には、それがはっきりしている。

一步踏み込んだ言い方として、たとえば「全国最下位からの脱出」という掛け声がよく使われる。その際、最下位の一つ上の県を追い抜いて「最下位脱出」をはかるという議論も聞くが、『全国一位』の県をモデルにする、という考え方にもよく出会う。

教育問題でいうと、たとえば、『学力最下位』なので、全国第一位の『秋田県から学ぼう』ということは、単なる主張だけでなく、教員交流まで踏み込んでいる。

すると、かなりのイメージがでてくるが、では、そうした県のどんなところに注目するのか。

秋田県でいうと、産業基盤が弱く、人口流出の激しい県である。だからこそ学力で奮闘して浮上しようというのだろうか。こういう発想は、「学力テスト問題」が話題になる時によく出てくる発想だ。1960年代初めの全国学力テストの時にあった、隣り合う香川・愛媛両県の学力一位をかけての競争は余りにも有名だ。競争にともなう多くの問題、たとえば成績が芳しくない生徒をテスト当日欠席させるとかの問題が生まれたことも知られている。その後の両県の教育状況についての調査も行われ、私もそれに少しだけ関わった。

学力一位競争とそこに出てきた問題性に関心が向きがちだが、背景にあった、「学力一位で企業誘致に成功し、経済成長が達成できる」という目論見が、思うに任せないままであったことにも注目しておきたい。

※ 「教育県」という表現がよく使われるが、学力競争一位追求タイプの県と、人間性重視タイプの県など様々であることにも留意しておきたい。

企業誘致をはかるというよりも、『学力一位』は、実際のところ、県外の大工場への就職に適合的な人材を作り、送り出したというべきだろう。その受け皿になった県として、代表的には愛知県がある。その愛知県には、九州の、産業基盤が弱く「学力向上運動」に熱心な県から、たくさんの若者が就職のために移動している。近年では、「キセツ」ということで、沖縄からもかなりの数の移動がある。

※ 近年では、九州のなかでは産業基盤が強い福岡あたりに自動車工場が立地しているから、企業誘致に成功している県があることも見落としてはならないが。

こうして、学力一位、ないしはそれに近い学力をつけて、県内ではなく県外へ移動して活躍する人材育成するということになっていることに注目しておきたい。

このことを、1960年代の書籍であるが、勝田守一・中内敏夫「日本の学校」(岩波新書)では、「出稼ぎ型

地域主義」と名付けている。また、1960年代に大変注目を浴びた本として東井義雄『村を捨てる学力 村を育てる学力』というものがある。

教育を通して、地域を重視し浮上させるという発想が、「名」「名誉」での浮上にとどまり、地域おこしにつながるとは限らないという、歴史的に根が深い問題なのだ。

その点では、沖縄における近年の「学力向上運動」「学力テスト最下位脱出努力」は、「沖縄おこし」とのつながりをどうとらえているのだろうか、検討を要することだろう。

「本土に追いつけ」はどの県のどんなところをイメージするか2 2010年10月26日

前回、「学力向上」を通して、若者たちは県外に出ていく事例について書いたが、その「就職先」「出稼ぎ先」、移動先としてイメージされやすいのはどこだろうか。その一つとして、製造業第一位で、自動車産業が盛んである愛知がある。

愛知県は「管理主義教育」として有名で、規則や力ずくの管理というイメージを持たれやすいが、注目すべきは、「点数による管理」だ。小学校あたりから細かく点数・偏差値で子ども・生徒を管理し、生徒を高校に配分していくシステムは、他県の人々の想像を絶するものだ。

また、高校進学率が低く抑えられてきた。一時期、「最下位」沖縄県に次いで、低い率であった。それは、希望者が少ないのではなく、行政や学校が、計画的に生徒を公立私立高校、専門学校、就職に配分し、ほぼすべての高校が偏差値によって序列化され、中学の進路指導がそれを徹底させてきた結果なのだ。

こうしたありようは、1960年代、70年代、80年代の日本の労働力配分政策に呼応したものだ。そして、とくに大工場における流れ作業に対応できる力量をつくる上で有効であった。マニュアル型作業を、テンポよくできるかどうか、しかもまわりと規則に合わせてである。大工場生産現場をイメージしにくい人は、マニュアルにそって作業をする、大規模なコールセンターをイメージすればよいだろう。

そうした作業に、詰め込み的学習やテストが、大変なじみやすいのだ。全国学力テストでいえば、Aテストがそうなのだ。そうした学力を「向上」させて、そうした企業への就職、ないしは誘致を、産業基盤が弱い県が追求したのだ。

しかし、いまそうした動きを強めて、誘致に成功させているのは、日本に比べて人件費の安い中国、さらには東南アジア諸国なのだ。国内の大工場は生産拠点をそうしたところへ、すでに移転させている。コールセンターもそうした流れの中にある。本土と比べて時給が安い沖縄に一時的に移転させている企業もあるが、さらに安い地域への移動の可能性は高い。

そうした事態を読み取っている愛知では、すでに1990年代から、新たな対応を始めている。1990年代初め、私は中京大学の豊田キャンパスで働いていたが、当時豊田市内にあったトヨタ自動車本社が、近隣大学の教員を招いて、工場見学と人事部などの担当部門の説明会を開く企画があった。

その際、1分間に10いくつもの作業をこなす生産ラインに驚くとともに、見ているだけで頭が痛くなるほどであった。また、すべてロボットが作業をすすめる工場も見た。と同時に、受身的な詰め込み型学力では、もう駄目だという人事部職員の話も聞いた。すでに時代が動いているのを肌で感じた。

話は飛ぶようだが、日本の中での「一位」とか「最下位」という話でいいのだろうか。すでに、日本の教育行政界では、ここ10年、世界との比較に、一喜一憂する時代へと移っている。そして、PISAテストショックは大きい。

こんななかでは、「だったら、『低下傾向』の日本の平均を基準にしないで、世界を基準にすればいいではないか」という考えが、日本の中での「一位」とか「最下位」とかに一喜一憂する地方教育行政界に芽生えていいと思うのだが、そういうのにお眼にかかったことはない。

だが、日本一とか世界一とかに、関心が向くこと自体が、自らの地域に立脚した思考方法ではないことに留意したい。余談だが、世界一になったフィンランドは、世界一になろうとしてなったわけではないし、テストで生徒を追いまくったわけではない。そもそもテストがめったにない。むしろ、私の用語を使っていうと、「フィンランドおこし」を、とくに1990年代以降追求するなかで、結果として世界一が、外から飛び込んできたのだ。

無論、日本、世界の動向はどうであれ、「沖縄独自で行けばいい」という開き直りがあるが、それは「開き直り過ぎ」だと思う。世界・日本に関心と視野をもち、またつながりつつ、「沖縄おこし」を追求するなかで、沖縄独自のものを追求したいと、私は考える。

沖縄———ブログ記事の振り返り・再発見

2010年10月16日

2007～2008年の『沖縄』についての記事は、一言でいえば、沖縄独自の問題にかかわって「沖縄とは何か」という問いを考えることであった。

医介輔、薬草、共同体、気圧、所得、戦闘機、教科書問題県民集会、県の人口増減、陶器など、実に多様なことについて学び発見し、それをブログに綴った。沖縄生活は20数年になるが、それでも知らないことだらけだ。

なかでも国連人権委員会が『沖縄先住民の権利保護』の勧告についての記事は、多くのアクセスがあった重要な記事だった。

その記事もそうだが、ウチナーグチに関わる記事、たとえば村上呂里さんの著書の長い連載などが、この時期の記事の多くを占めた。ついでながら、ウチナーグチを多少なりとも聞き話せるように、という努力を少しはしているが、全くと言っていいほど、前進しない。英語もそうだが、私の語学成長度はすごく遅い。

『沖縄とは何か』という問いにとどまらず、『沖縄おこし』にかかわる提案を考えることに少しずつシフトしているこの頃だが、それは別のカテゴリーで書こう。

この先も、『沖縄とは何か』について学んでいきたい。1970年代に、琉球大学の同僚だった田港朝昭さんが、沖縄紹介を亜熱帯、島、王国、戦争、基地の5つのポイント（随分以前の事なので、私の記憶に誤りがあるかもしれない）に焦点化して見事に行われたことが大変印象深い。

そんな紹介を私なりにできるようにしたいものだ。